

GoGoがんばれ！へい
ローちゃん

竹林の春雨

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どこか異世界にある馬の魂を受け継いだウマ娘という少女たちがレースを行っている世界。

ターフの上で少女たちが織りなす数々のドラマがあった。

セイウンスカイやスペシャルウィークなどの強敵たちが出そろった年代。そこに鳴り物入りで参戦した良血であり、名家のお嬢様であるキングヘイロー——彼女もまたターフに夢を乗せる少女であった。

多くの好敵手が渦巻く世界で、そんな彼女のドラマもまた始まる。

目次

プロローグ	1
お嬢様の一人旅	15
雷鳴の出会い	33
皇帝と青雲と天真爛漫少女と	54
チームへレヴァテイ〜とトレーナー	74
負けず嫌いの新入生	94
トレセン昔話と学園の怖い噂話	121
三人目のメンバーとキングヘイローの疑問	155
チームへレヴァテイ〜始動	176
いっぱい食べる君が	208
夏合宿！行先は	225
後悔だけで終われない	252
期待の新屋	270
怪鳥とワンダーウーマン、青雲とお嬢様	297
諦めの悪いウマ娘	317
夢の第一歩	342
メイクデビュー京都	362

プロローグ

ウマ娘——それはどこか異世界の馬たちの魂を受け継いだ少女たち。

彼女たちは走るために生まれ、走るために生き、走るためにその生涯を捧げていく。

ターフの上で織りなす様々なドラマ。躍動する彼女たちに人々は魅せられ、ウマ娘たちが走る会場へと足を運ぶ。

そんな彼女たちウマ娘と人間たちの物語が幾度となく繰り広げられていた世界で、あるウマ娘の物語もまた始まるうとしていた。

「ねえねえ、お母様たち！ 見てみて、今日はとても良い青空だわ！」

家の裏手門から外へと飛びだす小さな女の子。

綺麗に切り揃えられた芝生の上で、少女は空を見上げながら楽しそうに笑う。

嬉しそうにピョンピョンと飛び跳ね、久しぶりの芝生の感触を楽しむ。

彼女は人間ではなくウマ娘と呼ばれる存在だった。

耳は頭部の横ではなく上に2つ。お尻には尻尾。ただそれ以外では目立った差異は少ない。

人と比べると超人的な脚力で走ることができるくらいだ。

チャームポイントの耳と尻尾は、少女の喜びと連動するかのようになりふりと動き、茶褐色の鹿毛がそのたびに宙を舞っていた。

新緑を思わせる緑を基調としたドレス。

口に軽く手を添えてくすくすと楽しそうにしている少女。

妖精のような愛らしい笑顔は無邪気というより、教育の行きとどいたような、どこか気品さえ漂わせる仕草だった。

振り返る彼女の視線の先には邸宅——東京ドーム1個分はあろう広大な敷地だ。

敷地内は大人の身長ほどある鉄製の柵。家の正面には海外の貴族が作りそうな噴水に、庭師が毎日手入れを行っている花畑。扉を開けば高価そうな調度品が並ぶ。

一般には豪邸と呼べるような家に住んでいたが、彼女の価値観ではそれがどれほど凄いかはまだ分からない。

しばらく悪天候が続いて外に出られなかった毎日。

高価なのだろうとぼんやりと察せられるスーツやドレスを着た大人たちとのパーティには出ていた。

パーティでは将来の有力なウマ娘として彼女は注目を浴びやすい。そんな羨望とも嫉妬とも取れる視線は心地よかったが、生来走ることが大好きな彼女はどこか退屈さも感じていた。

そんな日々が続いていたなかでの晴天。空は少女の機嫌を取るかのように穏やかな陽光を大地へと降り注いでいた。

まだ幼さが残る彼女が親の手を引つ張りながら外出するのは無理もないだろう。

そんな事情もあつて、彼女は手を引くように両親と共に自宅の裏手にある芝生へと足を踏み入れていたのであつた。

「そんなに慌てていると転びますよキングヘイロー」

「あら、いいじゃないブレーヴ。ウマ娘なら元気なくらいが丁度いいわ」

「君は……ふう、可愛いわが子が怪我をしたら大変じゃないか」

「あらあら名家ダンシングの当主ともあろうお人が弱気ね」

「そこは慎重だと捉えて欲しいな」

男装をして落ち着いた印象を受ける女性と、ドレスを身にまとつた気品がある——しかし澀刺きもある女性が立っている。2人はともに穏やかな表情でわが子を見つめていた。

キングヘイローと呼ばれた少女には母親が2人いた。

それが世間一般ではどう捉えられるのか——キングヘイローと呼ばれた少女には分らない。

ただそれが当たり前だと認識してきた彼女にとって、他人にどう言われようが意に介

さないだろう。

高貴である自身が他者の戯言などで揺らぐことはない——令嬢として育てられた幼い彼女の価値観は既に定まりつつある時期だったからだ。

そんなキングヘイローは少し頬を膨らませながら憤慨する。

「もうお母様たちばかり仲良くして。走る姿を見たくないならやめてもいいんですよっ！」

「おや、それは困るな。愛しいわが子の晴れ姿を青空の下で見られないなんて、これ以上の損害はない」

「写真の準備もしてきたから困るわね。お母さんたち反省するから見せてくれないかしら？ 貴女の走る姿を」

「え、そうかしら……えへへ、それでは行つてきますわっ！」

大好きな両親の言葉にコロツと意見を翻す少女。

自分にとって理想のウマ娘であり、世界で一番尊敬するウマ娘であり、何より優しくて大好きなのだから仕方ない。

元々両親は日本出身ではない。日本で偶然出会い、意気投合して一緒に暮らすようになったという。

ウマ娘の間ではレベルが格段に高いとされるアメリカで生まれ、それぞれアメリカ国

内やウマ娘発祥の地とされるイギリス——こちらもウマ娘たちの実力は世界屈指だという国など、様々な国でレースに出場して勝利していったと聞かされていた。

そんな両親から生まれた自身が特別な存在だと思うのは無理もないだろう。

あるときはそんな傲慢さが現れ、周囲にいばり散らす困ったウマ娘になりかけたものの、親のしつけという名の貴族としてのあるべき姿の薰陶とぶつちぎりで離される親子間のレースが行われ、多少は反省していた。

(いずれ赴くトレセン学園。そこでキングヘイローの名を——キングの走りを世間に轟かせる。その為にもお母様たちを喜ばせる走りを見せなくてはいけないわっ)

そう思いながら、キングヘイローは実家の裏手にある芝のコース内に足を踏み入れる。

まだ見ぬ強敵に思いを馳せながらも、敗北は考えない。考える必要もない。

勝利が我が手にあるのは確定しているのだ。

勝つつもりで戦うのは当たり前で、その為の努力も日々行っている。

前を見つめ、綺麗なフォームでゴール板を駆け抜けるイメージを常に欠かさない。

視界の隅に入っていた女性——芝の調整をしていたメイド姿の女性がキングヘイローの姿に気づき一礼。

自身が仕える当主たちの視線の邪魔にならないよう、そっとコース外へと出ていっ

た。

「ではお母様方……行きますわ!」

「ええ、お前の美しい疾走を見せておくれ」

「『ダンシング家は常に優雅たれ』よ。走りにも気品を忘れないようにね」

「はいっ!」

スタート地点に立つ少女。

ぐつぐつと足を踏みしめ、思った通りの感触を返してくることに内心、喜色を浮かべる。理想的なターフコンディション。

ふと見上げるとすぐ傍の内ラチの上に小鳥が止まっていた。

それを見た少女はスタートするタイミングを静かに決める。

春先の青空。スズメが鳴く声が聞こえる。両親の視線を感じながらじつとそのときを待つ。

足先から頭の前まで、ちゃんと美しく見えるように神経を集中させる。

手の振り方、姿勢、自分が他者からどのようなに見えるかも考える。

そうしてイメージを固めるながら、その時を待つ。そして――

「っ!!」

キングヘイローの僅かな動きに驚いたのか小鳥が飛び立つ。

その瞬間に少女はターフを駈け始める。慣れた空気抵抗を感じながらコース内を常人では不可能なレベルで疾走する。その速度は自動車と同レベルと言つてもいいだろう。

この日のために特注したレース用の勝負服である緑のドレスがバサバサと音を——立てない。

特注の服は空気抵抗を極限まで落とせるのだ。

少女は芝生の上を人間なら到達しえない速度で走り続ける。

なぜ走るときにドレスを着るのか。

普通なら動きやすい服装にするべきであり、非合理的だ。

しかし彼女らウマ娘たちはそういった人間たちが考えるような機能美は一部を覗いて好まない傾向にある。

走ることは彼女たちにとって生きることと同義。

生きているのだから服装は自由であるべきだ。

自身を彩る理想的な服装、そして自身の魂とも言える走りを魅せることこそ至上の喜び。

その上で同類であるウマ娘たちの中で誰よりも先にゴールする。それは勝者でしか味わえない美酒だ。

貴族は誰よりも前で戦い、民衆の前で勝利を引き寄せ与える。

その先には素晴らしい光景が見えるだろう。

その後にはウイニングライブなる歌とダンスを披露する場もあるが、そこは人間たちを喜ばせるパフォーマンスでしかない。

もちろんそれが目的で勝利を目指すウマ娘もいるし、注目されるのが好きなキングヘイローも別に嫌いではなく、むしろ好きな方ではある。

ダンスレッスンも完璧にこなせるし、いかな曲が来ても名家の令嬢として恥ずかしくない完全無欠な姿を披露できるだろう。

尊敬する両親から教育を受けた自身のダンスで人々を魅了し、3着まではステージに上がれるという制度のウイニングライブで、負けたウマ娘たちの視線を浴びながら、ダンスンシング家の晴れ姿を披露する自分の姿。

それはとても心地よい光景だ。

「はあ……はあっ……もつと速く！ もつと速く、駆け抜ける！ 私はキングなんだからっ！」

与えられた名前に負けないように努力し続けてきた。

顔は正面を見据え、走り続ける。

顔を上げるのは自身に喝采を与える民衆の顔を見るため。

そして何より――

（私に期待をお母様たちの表情を見るためにっ！）

自分が一生懸命に走り続ける姿に、笑顔を向け続ける両親。それだけで胸が暖かくなる錯覚を覚える。

走り方について、両親からは特に指導らしい指導はされてこなかった。

最低限、コースの走り方やスタート、戦略関係を少々といったところか。

両親曰く「ウマ娘の走りは魂そのもの。それを専門知識もない自分たちが指導しても歪めてしまうだけだ」という言葉を受けていた。

ウマ娘の面倒は『トレーナー』と呼ばれる専門の知識を持つ人間たちに託されている。

彼ら彼女らはそれぞれの信条、理念、技術等々を駆使し指導を行う。

レースの勝利はそんな人々の協力もあってこそだ。

「もつと先へ……！ 誰よりも届かない先へっ！」

足に力を入れる。

踏み出したに更なる力が入り、後ろに蹴り上げ、地面が抉れていた。

スタートから600mのバーを通り過ぎている。

体感では33、4秒くらいだろうか。ややハイペースかもしれない。

それでもグツと両脚を叱咤激励しつつ、キングヘイローはただただ青空の下を駆け抜

け続けている。

喜んで欲しい、嬉しくなって欲しい、誇らしく思っただけ欲しい——そして我が子は素晴らしいウマ娘だと思っただけ欲しい。

それは顔を上げなくては見れない姿だ。

俯いては見れないものだ。

優雅な姿を見せてこそその名家、貴族。

見えない観客が大声援を送っているような幻想を抱く。テレビの先でいつも見ていた景色。

自分が主役になれるなら、それはとても素晴らしい光景だろう。

全身に空気抵抗という名の風を受けながらもキングヘイローはそう願ってやまない。

勝利して両親が喜ばせたい。

それが彼女の願いだ。

しかしこれから先、どういうドラマが彼女に待ち受けているのか——それは誰にも分からない。

ただ言えるのは、例えばそれが苦難の道だとしても彼女が歩み続けた道程には変わらないということ。

色々な思考が錯誤していたのもつかの間、すぐ目の前まで迫っていたゴールが見える。

既に最初から全力だ。

勢いのままゴール板を駆け抜け1200mの疾走が終わる。

1分少々の短い時間だが、汗が湧き出て脚も少し震えていた。

「はあっ……はあっ……どう、でしょう、か……はあ……っ」

いきなり立ち止まっても心臓によろしくない。

軽く小走り——実際には歩き同然の速度だが——そんな気持ちでクールダウンしつつ、両親の元へと駆け寄る。

そんなキングヘイローはぼんぼんと頭を撫でられる感触を覚えた。

「わぶ、お母様……?」

「うむ、良い走りだったよ。さすが自慢の娘だ」

「写真も撮れたし、立派だったわよ！ さて早速、執事に現像を頼んでできた写真をアルバムに入れなくちゃね」

そういつた片方の母親はルンルンとした足取りで屋敷へと戻っていく。

その姿にブレーヴは少し苦笑しながら見送っていた。

そしてキングヘイローへと向き直ると、先ほどとは打って変わって真剣な表情にな

る。

「キングハイロー、ほんと良い走りだったよ。もう少し先の話にはなるだろうけど、トレセン学園の願書が届いていた」

「っ!? お母様、それじゃあ——」

「うん出願手続きをする予定だ。憧れの舞台——全力で楽しむといい」

「はいっ! キングハイローの名を、お母様たちの娘は素晴らしいウマ娘であることを証明してみせます!」

「ふむ、元気でよろしい。しかし注意しておくことだ、キングハイロー」

「……注意、ですか?」

神妙な面持ちで話す親にキングハイローは疑問符を浮かべる。

普段から静かな人ではあるが、いつもの飄々とした姿とも違って見えた。

困惑とも違う、少し闘志が沸きあがっているような、いつもと違う様子だった。

あえて言うならレース前のウマ娘たちに似ている、とキングハイローは感じた。

「日本のウマ娘界限も年々レベルが上がっていつている。レース内容が濃くなっているとも言えるのかな。凱旋門賞を始めた、いくつもの戦いで強敵たちとのぎを削ってきた私だが、それに近い熱のようなものを感じるんだ」

「熱、ですか?」

「ふむ、表現が難しいね。ウマ娘としての本能が騒ぐ、といった方が正しいかもしれない。強敵、好敵手、絶対者——そんな一筋縄ではない者たちの出現をなんとなくだが、肌で感じるんだ。もしかしたら君の年代は荒れるかもしれない」

「それでも……それでも私はお母様たちの自慢の娘ですわ。いかな相手でも立派に戦い——そして勝利してみせます！」

「ははは、頼もしいね。だからこそ用心しないとイケない。手助けはあまりできないが、出来る範囲での手は打っておくように」

「もちろんですわ。慢心して負けるなんてみつともない姿は私の誇りが許しません。最大限の努力を積んだうえで、最後に私の走りでもって勝利を手中に収めてみせます！
というわけでもう一回走ってきますわっ」

「うん行ってきなさい。ただし暗くなったらやめるように。オーバーワークも注意だよ」

「はいですわ！」

そう言いながら駆け出す。

強敵の出現？ 上等だと彼女は闘志を燃やしていた。むしろ願ったり叶ったりだった。
た。

弱い相手に勝つより、強い相手に勝つからこそドラマが生まれ、語り継がれる。

例え誰であろうと負けるつもりはない——そんな信念を胸にキングヘイローは、その時が来るまで走り続けるのだった——

☆

そんなキングヘイローの後ろ姿をブレーヴは見つめる。

その表情は娘に向けていたときとも違い、憂いを帯びていた。

「頑張るといいキングヘイロー。例えその道が茨だったとしても、君は投げ出すことはないだろう。顔を下に向けず、誇りを胸に立派に戦えばいい」

そう呟くとコースを走る娘を尻目に踵を返し、屋敷へと歩いていく。

「しかし」と彼女は誰に語りかけるわけでもなく声を漏らす。

「……厳しいな。本当に」

扉を開け、屋敷へと入っていく。

青空だったはずの天気は既に陰り始めていた。

お嬢様の一人旅

いつも前だけを見つめ走り続けていた少女。その時から幾ばくかの季節が過ぎた頃、キングヘイローは更に成長していた。

外見年齢なら女子高生くらいだろうか。

茶褐色のセミロングに、若干吊り目気味の強気そうな顔立ち。

お気に入り緑を基調としたマキシワンピースに身を包み、自他ともに認めるほどのお嬢様然とした雰囲気醸し出している。

ただ慣れてはいるもののまだ寒さが残っているので、上にジャンパーを羽織り、マフラーと凍傷防止のための耳当てを付けている。東京は暖かいらしいので、それまでの辛抱だ。

春先の北海道はまだ冬の寒さが漂う。

息を吐くと白い吐息は薄っすらと青空に溶けた。

寒さから少し鼻先が赤くなっているのを自覚しながらキングヘイローは荷物を確認する。

あらかじめ準備しておいた乗車カードである『syuica』。電子マネーは既に

入っているらしい。

着替えなどのかさ張るものは送っているが、自身が住む予定の栗東寮りっとうに届いていない可能性も考慮して、数日分の着替えは入っている。

あとはトレセン学園場所などが記された案内書があれば迷うこともないろう。

財布や携帯、飛行機チケットなど小物類も確認していき、「よし」と小さく声に出し、カバンの口を閉めた。

いくらか必要なモノを詰め込んだ旅行カバンを脇に置き、あとはもう出発を待つばかりとなっている。

準備が完了したキングヘイローは改めて正面に向き直る。

目の前には見送りにきていた母——ブレーヴではなく、もう一人の母であるグツバイヘイローだ。

彼女はポニーテールに適当に着てきたのであろう普段はあまり着ないガウンに身を包んでいる。

「それでは行ってまいりますわグツバイヘイローお母様」

「うんうん、気楽にやってくるといいわよー。でも何かあったらいつでも連絡頂戴ね。そしたらお母さんたちいつでも飛んでやってくるから」

「お母様たちは過保護すぎますわ。私はもう子供ではありませんし、立派にやっていけ

ます」

「子供はみんなそういうことを言うものよ」

キングヘイローの返しを適当に受け流しながら、ひらひらと手を振る女性。

その様子には彼女は一度ため息をしながら周囲を見渡し、もう一人の母を探す素振りをした。

「ブレーヴお母様は……」

「あの人は夜遅くまで仕事だったから爆睡してるわよ。朝も弱いし、寝かしておいてあげましょう」

「……そうですわね。あの、それでお母様、実はちよつとお願いがありました」

「んーどしたの?」

「ええとほら、本土にはアレを取り扱っているところが少ないと聞き及んでおりました。ですので定期的に送っていただけだと思っっているんですの」

少しわたわたしながら早口で話す。

自身にとっては大切なアレが無いとちよつと調子を崩してしまうかもしれない。

キングヘイローにとってはそれほど重要なものだ。

その娘の様子に分かつてるよとばかりに、少し気怠げに再度、手のひらをひらひらさせる。

「うちの娘はほんとガラナ好きねえ。あの人はコーラが好きっていうし。私はドクターペッパーが一番だと思うのだけど」

「コーラは風味が爽やかすぎて味が薄いように思えますし、ドクターペッパーは甘さの中に変な異物が混じっているように感じて好きになれません。ガラナのあの絡みつくようなねっとりとした甘さこそジュースには必要です。ソウルフードならぬソウルドリンクですわ」

ガラナ——それは北海道でしかまずお目にかかれないジュース。

コカ・コーラが日本のドリンク界を席卷し、怒涛の如く侵略していた時代に対抗して作られたものだ。

だがライバルの勢いには勝てず、コーラが普及していなかった北海道だけ良く分らないうちに定着した不思議飲料。

コーラに似てるような、でもやっぱりそこまで似てないような、そんなジュース。

キングヘイローはその飲み物をこよなく愛していた。

ウマ娘全体の傾向として甘味を好む傾向にある。

人類最速の男でも時速45k/mとされる。

しかしウマ娘たちは最速で時速70k/mもの速度で走ることができ、だからこそ人類すら届かない領域の速度を一目見ようと観客が集まるわけだが、同時に基礎代謝も劇

的に増えてしまう。

中には道草を喰う……とまではいかないまでも、常に食べ物を口にしていないと我慢できないレベルの子もいるくらいだ。

ただ食べ過ぎからの体重が増えるというのは彼女たちにとっても悩みの種。

年頃の乙女らしいじらしさもあつて、野菜というヘルシーな印象で、かつ糖分も多いニンジン等を好むウマ娘が多い。そんな中、キングヘイローはにんじんではなく、ガラナなどを愛飲することで高い基礎代謝に見合うカロリーを摂取していた。

「……分かってはいるけどガラナは——」

「——カフェインが多いから飲みすぎると、ですわね。もちろん理解していますわ」

「1日1ガラナとは言わないけど気を付けなさいね。眠れなくなつて夜更かししたらお肌にも悪いから注意よ」

キチンと娘に釘をさすことは忘れない。

彼女たちウマ娘はついつい食べ過ぎてしまうから注意が必要なのだ。

人間の女の子たちからしたら美味しいものを一杯食べられるなんて夢のような話だと思ふ者もいる。

しかし下手に節食すると、高すぎる基礎代謝が災いして栄養失調からの入院してしまうウマ娘もたまに現れてしまう。

そんな娘を気遣っていたところに初老の男性——静かに横で待機していた執事が声をかける。

「ご歓談中、申し訳ありません。そろそろお時間ですが……」

「ああ、もうそんな時間なのね。教えてくれてありがとう。……それじゃあキングヘイロー」

「はい、行つてまいります。そしてキングの名を……お母様たちの娘は本物だということとを証明して参りますわ」

決意を口にして振り返る。

既に旅行カバンは後ろで出発を待っていた車に載せられていた。

所在地である新冠から新千歳空港へ車で直行し、そのまま飛行機で東京へと一気に行く予定だった。

時間はまだ午前中。羽田までの空の旅は1時間と45分ほど。お昼を過ぎたころには到着する。

そして電車で乗り継ぎ、府中にある日本ウマ娘トレーニングセンター学園——通称トレセン学園。そこへ入寮する。

夕方までに着けばいいので、気楽な旅と言えるだろう。

キングヘイローはそのまま優雅な足取りで乗車。車窓越しにニコニコとした様子の

母親に会釈し、軽く手を振る。

時間も圧しているのだろう、車はすぐに動き始めていた。

そして彼女は内心、静かにもう一つの決意を固める。

(まずはG Iウマ娘……次に三冠。そしてゆくゆくはお母様が出場したあのレースに……っ！)

夢、だろうか。

彼女なりに一人前のウマ娘として成長していった過程で芽生えたあるささやかな夢。

いや、と彼女は首を振る。

(ささやか、ではありませんわね。あそこに立つのは正真正銘、超一流のウマ娘として認められた証。だからこそ勝利しなくては！)

夢にまで見たあの大舞台に立つことこそが自身の証明になると固く信じていた。

地を這い、汚泥を被つても……意地でも向かいたい未来がある。

そんな不屈の魂を抱きながら少女——キングヘイローは新たな舞台であるトレセン学園へと向かうのであった。

☆

「ふむ行ったのか」

「ええ、ついさつき。貴女も起きていたのなら見送りに出てくれば良かったのに」

「あの子から並々ならぬ闘志と決意を感じていた。水を差すような真似はしたくなかったのさ」

「ああ言えばこう言うねえ……で、あの子は大丈夫だと思う？」

煙に巻こうとしていたのを見透かされたことにブレーヴは肩をすくめる。

娘を乗せた車の方を見つめながら静かに口を開く。

「こればかりは何とも言えないね。ただ——」

「タダ？ お値段0円？」

「こら茶化さないでくれ。……ただ未来のことは誰にも分からないさ。良いトレーナーに出会えればと願うばかりだ」

「トレーナーねえ……ま、あの子もあれで凶太いところがあるから、何だかんだ楽しんできそうね」

昔、反抗期がきた時のキングヘイローの跳ねつかえりといったらなかつた。

今でこそ落ち着いているが、私の強さは一体誰に似たのやら。

（まあブレーヴは物静かだし、私かねえ。口に出しても弄られるだけだから言わないけど）

内心で納得しつづいていると、ブレーヴが続きを口にしていた。

「……我が娘のああいった愚直なところは美点となるだろう。願わくばすべてが良い形で収まってくれることを」

「仰々しい言い方ねえ……………あ」

「? どうしたんだい?」

「うちの子の荷物選びをしたときに何か間違えて入れちゃった気がするんだけど……………まあ、いつか。特に問題になるものじゃなかったし、適当に捨てるでしよ」

「ふむ、たまに思うが君のそのいい加減さもどうかしたらどうだい」

「私は私なんでムリです。さてさて冷えてきたから中に戻りましょう」

寒い寒いと肩を震わせながら屋敷に戻っていく。

キングヘイローの旅はまだ始まったばかりだった。

☆

さてそんな心配をされていた当のキングヘイローはというと、

「ふあああああ……………つ! これが、これが飛行機というものですね! さすがでかいですわ!」

田舎民まる出しで目をキラキラさせながらガラス越しの飛行機を見つめていた。

実はキンググヘイロー、飛行機に載せてもらったことが一度もない。

両親はどちらも海外出身。更にお嬢様というなら一度ならず何度でも経験がありそうなのだが。

「墜落の危険があるから必要なとき以外は駄目と言われてましたが、強引にでも頼んで正解でしたわ。巨大な飛行機、そして後ろに広がる雪景色……ふつつ、これが見れただけでもお釣りがくるというものです」

過保護気味の両親だったのか、あるいは地に足つけて走るウマ娘ゆえか。飛行機はなかなか乗る機会がなかった。

海外に行くときは全て船。パーティでは他所の令嬢の話を合わせるために、さも乗ったことがあるように語っていたが、

「これで、ようやく下手な見栄を張る必要もなくなりましたわ。これでまたウマ娘としてワンランク上がったと言えますわね！」

ウマ娘は世間一般にもかなり存在しており、街中ではさほど珍しいわけではない。

空港内にもウマ娘が人間と同じように仕事をしている風景が見られていた。

とはいえ生まれてるウマ娘のほとんどが人間の価値観で見れば、かなりの美人であり、美少女。

そんな子が無邪気にはしゃいでいるのだから、キングヘイローの周りは微笑ましいものを見るような視線が増していた。

だが他者から見られることに慣れている彼女がその視線に気付くことはついぞなく、本人だけが自覚していない羞恥プレイの状況は離陸時刻になるまで続くのであった。

「……ふう、少しはしゃぎすぎてしまいましたわね。はしたない真似は自重しなくては」
空港から手荷物を受け取って出たキングヘイロー。
さすがにテンションを上げ過ぎたと自制していた。

「それにしても」と呟く。

「東京の方々はせっかちですね。皆、あんなに早足で歩くななんて。優雅さが足りないわ」

キヨロキヨロと物珍しく見まわす。

私服、スーツ姿を問わず、目に映るほとんどの人々が彼女からすれば早足と言える速度で行き交っていた。

さながら屋敷でパーティを開催した時の修羅場と化した厨房の風景に似ているのかもしれない。

ただ携帯を通话しながら歩く人や時計を見ながら険しい表情を浮かべる人。何やら

文書を片手にぶつぶつ呟いている人など、そんな奇妙にすら映る者たちがさして衝突することもなくすれ違っているのは、ちよつとした技能を持つているのかもしれない。

そんな変な感心をしつつ、彼女もまたゆつたりとした歩調で駅を目指し始めた。

エスカレーターなどのターミナル駅などの存在に戸惑いながらも付いたゲート。キングハイローはおもむろにカードを取り出す。

「ふふふ、初 *syuica* ですわね! ……ピツと鳴ればいいのかしら?」
語尾が少しだけ弱まる。

移動には執事の車などで足りていたので電車を利用することは少なかった。

そもそも無人駅が多い北海道なので、自動改札という概念がイマイチ分からないという弊害もあったのだが。

(まあ悩んでも仕方ないですわね。優雅に、さらっとタッチして中に入ってしまったでしょう)

ピツと中指と人差し指でカードを掴み、さも慣れているかのようにタッチして中へと歩き出し――

ビビーー!

「うびゃう?!」

けたたましいブザー音と共に突如ゲートが閉まり、行く手を阻まれた格好になったキ

ングハイローはガクンと躓きかける。

後ろではどうしたのかと怪訝な表情の人々。

混乱した彼女はわたわたとしつつも、

「あ、ええつと、申し訳ありませんわ！ どうぞお先に！」

邪魔になつたらいけないと罰が悪い表情のまま素早く前を空ける。

後ろにいたスーツ姿の男性は少し迷つた素振りをしたものの、自身のカードを取り出し、そのまま改札へと入っていった。

頭部の耳がピツという効果音を捉える。

その様子に首をひねる。

ゲートが閉じたということは会計が済んでいないことを意味する。

しかしちゃんとしたカードのはずなのに何故ゲートに阻まれるのか。

人の波が緩やかになつたところでもう一度試そうかと考えていたとき、横から声がかつた。

「どうしましたかねウマ娘さん。何かお困りでしたら申し上げてください」

「あ、どうも……」

顔にしわが出来始めたくらいの男性——駅員だろう。

ニコニコとした温和な様子に、キングハイローは少し困惑しつつも事情を話すことに

した。

「ふうむ、ちよつとカードを見せていただいても宜しいでしょうか？」

「……はい、これですわ」

駅員に言われた通りに *syuica* を渡す。

駅員はカードを見た途端、「ああ、なるほど」と声をこぼす。

「あの、なにか……?」

「お嬢さん、こりやジョークグッズですよ。 *syuica* に見せかけた、ただの平べったいプラスチックのカードです。カバンの中に別のカードがあるか見てみた方がいいかもしれません」

「ジョ、ジョークグッズ!? え、ええと、少しお待ちをつ」

あせあせとカバンの中を探る。

すると手に硬質な感触を覚える。

掴んで取り出してみると *syuica* の文字が見えた。

これが偽物だったら質が悪いにもほどがあるだろう。

駅員は2枚のカードを見比べると、

「ああ、こちらは本物だから大丈夫ですね。ほら、見比べるとまったく違っていでしょ?」

「……鬼？ よく分かりませんが、紛らわしいにもほどがありますわね……」
角を生やし、酒を片手に持った少女がプリントされているカード。

正規品はペンギンなのでまったく別物なのが分かる

サブカルチャーに通じているなら分かるかもしれないが、そういった方面に詳しくない彼女は怪訝そうな顔をしつつも、「ありがとうございます」と頭を下げ、カードを受け取った。

電車が出発した後だからか人の流れが一旦途絶えている。

受け取った正規の *syuica* を恐る恐るタッチすると、効果音と共に普通に改札を通ることができた。

そのことに内心、安堵しつつ軽く駅員に頭を下げながら進む。

目的地まであと少しだった。

「ここが府中駅……つまり決戦の地！」

気合が入った様子で仁王立ちする。若干だが鼻息も荒かった。

（でも仕方ないですわよね。やっと念願であるトレセン学園がある場所に着いたのだから！）

本来ならもう1つ先の駅なのだが時間的には数時間ほど余裕がある。

先に荷物を置いてからでも良かったのだが、学園にいったら面倒な手続きが待っているかもしれない。

レースの会場に行く予定はないが今後のことも考え、どのようなお店があるか下調べするつもりだった。

「では早速——」

「すみません、ちよつと……通りたいたいのですが……いい、ですか？」

「あ、はい、申し訳ありませんわ……あ、尻尾」

背後から声を掛けられて反射的に謝ってしまふキングヘイロー。

帽子を被った内気そうな少女が申し訳なきように会釈すると、横を通り抜けて改札口を出ていく。

その様子を見送った後で、なんとなく直感めいたものを感じていた。

（あの子、大人しそうでかなり出来るタイプですね。ああいった手合いがまだまだ一杯いるのかしら）

ウマ娘だからこそその勘といえようか。

偉大な両親がいたおかげもあってか走りそうな同類は多少ではあるが感じ取れていなかった。

さすが日本で最大規模を誇るトレセン学園がある地といえよう。周囲を見渡すだけ

でも、そこかしこにウマ娘が歩いているのが見て取れる。

トレセン学園がある場所にいるウマ娘——その理由は必然と言えよう。

「ライバル多し——でも、だからこそ燃えるものもある。さあ新たな伝説の始まりですわ！」

敵が強いからこそ乗り越えがいがあるというもの。

この程度で足取りが衰えるはずもない。

グツと旅行カバンを握り直して通り抜ける——と思っただが。

ビー！

「うびよあ!？」

「だ、大丈夫ですか」

再度ゲートに阻まれ転倒しかける少女の姿がそこにあつた。

先ほどの決意が出だしから盛大に躓いた格好である。

駅員が慌てて近づくと「大丈夫です」と手で制す。

無言でカードを見るとやはりといったところか。先ほどの偽カードであつた。

何故かこんなものがカバンの中にあつたのか分らない。

しかし二度も恥をかかされるとふつつつと湧いてくるものがある。

「……………ふんっ！」

能天気そうなキャラの顔。何となく癪に障ったので地面に叩きつける。
カードはぺしっつという少しマヌケそうな音を立てた。

踏んだり蹴ったりとはこのことか。

春の府中は彼女の気分を表すかのような曇天の空に覆われていた。

雷鳴の出会い

「どんな敵でも戦うとは言いましてけど……これだけは嫌い——ひゃあ!」

ピシャンと雷鳴が轟く。

東京に来たときから嫌な天気だとは感じていたが、案の定というべきか。

曇天は更に暗さが増して雷が鳴り響いていた。

キングヘイローは昔から雨や雷は大嫌いだった。

特にいきなり脅かすような雷は大の苦手で、大体セットでやってくる雨もまとめて嫌いになるほど。

幼いときから刷り込まれたせいで条件反射でびくついてしまう。

そのためトレセン学園の下調べをしようと考えていたものの急遽、予定を変更し、近くの喫茶店に逃げ込んでいた。

店内を見まわすと突如の雨と雷鳴に他の人々も足早に歩いていくか、近くの店に避難し始めている。

びつくりしたことからウマ娘特有の俊足で、真っ先に店内の席を確保できたことに少し安堵する。怯えた結果での席確保は怪我の功名とも言えた。

ただ腹の底からゴロゴロと響く重低音までは店も防げない。むしろ見晴らしがよく、ガラス張りで外からも良く見えるような構造になっているため、外の嵐が良く見えてしまう。

なのでせめてもの対策にと仕方なく、キングヘイローは出来るだけ外から遠い席に陣取るしかなかった。

(もう踏んだり蹴ったりですわね……雨が上がったらさつさと学園へ向かいますよ) いつもは頭部の上でピンと直立する2つのウマ耳も、今はぐんにやりと折れている。そんな彼女のところに店員が近づいてくる。

日本人らしい黒髪を軽くサイドテールで纏めた普通の人間だ。

店員のお盆には注文していたコーヒールと苺のショートケーキがある。

「どうぞご注文の品です——注文は以上でよろしかったでしょうか?」

「ええ、ありがとうございます」

「はい、それではどうぞ、ごゆっくりおくつろぎください」

につこりと温和な表情でお辞儀したあとカウンターへと戻っていく。

雷にもまったく動じない様子に軽く尊敬の視線を送ったあと、角砂糖を数個ほど入れてかき混ぜる。

コーヒールの香りに甘さが混じったのを頃合いに口を付けようとしたところ、入り口の

方からカランカランとベルの音が鳴った。

また客が入ってきたのだろう。

キングヘイローは何となくそちらに視線を向けると、

「あ、め、ひ、ど、い、よ、ー、ー!!」

「だ、大丈夫ですかお客様?! タオルを持つてくるので少々お待ちを」

「う、ん……店員さん、ありがとうございます……」

濁点が付きそうな涙声で一人の少女がやってくる。土砂降りから逃げ遅れたらしく、服は雨をたっぷり吸いこんでおり、水が滴したたっている。

気の利く店員だったからか、それとも濡れネズミな状態で店内に入られても困るからか。

入口の方に留まったままタオルで少し乱暴気味に自分の服を拭っていた。

頭部の耳と尻尾——ウマ娘のようだった。

青と白のラインが入った服装はトレセン学園の物だろう。

腰まで伸びたロングヘアーに、頭部も短く髪を2つ結んで垂らすツースイドアップ。

髪は茶褐色のキングヘイローと違い、同じ茶色系統でも白を混ぜたような明るさ——
キレイな栗毛の少女だ。

ただパツと見で見てもキングヘイローよりかなり身長が低い。

背の低さに童顔とあつてまさに子供が泣いているといったところだ。

（まあ私には関係のないこと——）

トレセン学園の制服は気になるが、あくまで他人なことには変わらない。

縁があれば出会うだろうし、そうじゃないなら尚のこと気に留めても仕方がない。

我関せずとコーヒーを啜っていたところ目の前で人が立ち止まるのを感じた。

「あのお客様、少々よろしいでしょうか？」

「? どうしたのかしら？」

顔を上げてみると先ほどの店員だった。

しかし先ほどと違い、温和な笑みというよりは少し困っている様子。

怪訝な表情を浮かべるキングヘイローだったが、続きを話すように視線を向けると店

員は意を決したように話します。

「実は店内の席が満席でして……」

「ええ」

「それで入口のマヤ——えっと、お客様が雨で濡れてしまったようなのです。実はこの席が一番暖房に近いのですが……」

「……ああ、なるほど。そういうことですか。良いですわよ」

「お手数かけまして申し訳ございません。ご厚意、ありがとうございます」

途中、呼び方を変えたことに少し疑問が沸いたが、話の流れからして相席を頼みたい様子だった。

丸形のテーブルには椅子が4つほどある。

他人が座ろうと気にすることはないだろう。

「ふう、どうやら縁がある方で——そうだわ、その店の員さん。ちよつとよろしいかしら？」

「はい、何でしょうか」

「そちらの濡れウマ娘さんに何か暖かいものを。できれば甘くて身体が芯から暖かくなるやつを、ね」

「かしこまりました」

ふとした思い付きから相席になる人物の注文を頼む。

別に深い意図があつたわけではない。

先ほどの様子から相席になる人物が騒がしそうな人柄に見えたため、飲み物でも飲んでいてくれた方が静かに過ごせると思ったからだ。

実家がお金持ちということもあり、彼女も一般人からすれば十分すぎるほどのお金は持たされている。

ケチケチするような感性は持ち合わせてなかった。

注文しながら自身の長い髪がコーヒーカップに当たりそうだったので、左の前髪を軽く払う。

曲がりなりにも美少女がやると絵になるもので少し視線が集まったように感じたものの、キングヘイローは気にした様子を微塵も見せない。

自分の容姿とプロポーションから注目が集まることは昔からなので慣れているのだ。そういった整った所作も名家の令嬢として教育を受けた彼女だからこそと言えよう。

喫茶店内にある少し古めかしい時計に視線を向けると、入店してから20分ほど経過しているようだ。

雷雲が早くも上空を去っていったのか、今は雨粒が店のガラスを叩く音しか聞こえない。

耳を澄ますと客の雑談に混じって、落ち着いた曲調のBGMが流れている。

——雨音とクラシックを味わいながら飲み物を頂くのも悪くない。

そう思いながら目を瞑り、コーヒーの苦みと甘さを舌で転がしながら味わっている

と、
「ふあああ〜！ おねーさんってとつても大人の女性って感じですよ〜いねえ〜！」

「ん？」

甘ったるそうな子供っぽい声が対面から発せられた。

対面には先ほどのずぶ濡れになっていた少女が目をキラキラさせながらこちらを見ている。

彼女が座っている席は暖房に一番近い席で、温風を受けて長い髪が揺れていた。

甘い飲み物はまだ届いていない。

どうやら注文は間に合わなかったようだ。

まあ仕方ないかと思いつつ返答する。

「ん、そうかしら。あんまり意識はしていないのだけれどね」

「うわー、うわー！ 凄いつ！ なんかもうその余裕がすごい大人な感じ！ レ

ディーっていうのかなっ？」

「そ、そうかしら？ ふふーん♪」

「あれ、ちよつと子供っぽくなった？」

純粹に称賛されるのも悪い気はしない。というよりむしろ嬉しい。

ただふふーんと胸を張っていたら何故か逆に子供っぽいと言われてしまった。

しかし先ほどまで落ち込んでいた気分がプラス方向に急上昇したのは確か。ついでに何かしてあげようか、という気分になってきた。

そう思っていた矢先、目の前の少女からお礼の声が上がる。

「あ、忘れてた。席ありがとぉ〜！ とっても困ってたのっ」

「ふふん、別にいいですわよ。ノブレス・オブリージュというやつですわ」

「ノブ……おぶう？」

「ノブレス・オブリージュ、ですわ。『立場ある者、自身がそうであると思っっている者は、それに見合うだけの立派な振る舞いをせよ』とでも思っておけばいいわ」

「なんか分からないけど、おねーさんがおつても格好いいのは分かった！」

「ええ、格好いいんですわ♪」

先ほど無視しようとした事実はさらりと流す。

キングヘイロー自身はそういつた振る舞いをすべしとは考えてはいても、無暗やたらに手を貸すことを良しとしない性分でもあった。

（まああくまで自分の手が届く範囲で、それ以上はお節介。優しいだけが全てではないですし）

などと内心で己を納得させる。

それはさておき目の前の少女には語ったのだから名家らしい振る舞いをしようと考えていた。

「今日は気分がいいですし、ついでですわ。何でも好きなものを頼んでも良いですわよ」
そんな言葉がキングヘイローの口から自然と出ていた。

少し褒められただけで気分がよくなり奢る——とてもちよろいお嬢様だった。

その言葉に目の前の少女は目をまん丸にしながら驚く。

「ええっ!?」で、でもでもっ、相席して貰っただけでもありがたいとーって気持ちなんだけど……」

「相席になったのも何かの縁、遠慮はご無用ですわよ。それにお金ならたーっぶりありますからね。このブラックカードがあれば!」

すつと自分の鞆に手を入れた。

ブラックカード——大金持ち御用達の買えないものはないとまで言える最高位のカードである。

ただし一口にブラックカードと言っても色々な種類があるのだが、自分の持っているカードが何かまではイマイチ理解していなかったりするが。

普通ならそんなカードを不用意に子供に持たせるべきではないのだが、彼女はこれでもお金の使い方に関しては両親にとっても信頼されていた。

(ふふふ……なにせ使用額のトップがガラナだから!)

なぜか脳内ではドヤ顔気味だった。

単純な話、ドレスなどのお金がかかりそうなものは全て用意されていたため特に使道がない。

それ以外の遊興費も大体、両親同伴のため無駄使いがほとんどなかった。

基本的に興味の対象がウマ娘たちが走るトウインクルシリーズに集中しているため、さほど金のかかる趣味を持たなかったからとも言える。

そんなこんなで人差し指と中指に挟むように出したのだが、

「おお、それが噂のぶらつくカード……でも黒くないよーな？」

「……………え？」

目の前の少女から疑問の声があがる。

その言葉に嫌な予感が脳裏をよぎった。

手にしたカードをゆっくりと見てみる。

銀色と緑と、そしてよく分からないアニメ絵。

先ほど駅で地面に叩きつけた忌々しい偽カードだった。

地面に叩きつけたとはいえポイ捨てはいけないと結局、拾ってカバンの中に入れておけばなしにしていたのだ。

キングヘイローはその事実思い至り、硬直。

少し冷や汗を流しながら、どう答えるか数秒悩んだ結果——「ていつ！」とテーブルに叩きつける。

駅と同じようにペしっと気の抜けた音が出た。

そして彼女が出した答えは、

「——これはメンコですわっ!!」

「ぶらつくかーどってメンコなの!？」

トンチンカンな答えに、相手も変な受け取り方を見せたのだった——

☆

先ほどの間違いをなんとか誤魔化し、散々失敗の元になっていた偽カードを捨てようかとおぼしたところ、

「カワイイから欲しい!」

という少女の発言から、ジョークグッズであるカードを譲渡していた。

別段、失っても惜しくないものなので渡りに船だった。

時間は更に経ち、雨は既に小康状態。ほぼ止んでいると言っても差し支えないだろう。

どうやら質の悪い雨雲による一時的な雷雨だったらしい。

なればキングヘイローがカフェに留まる理由はない。

さつさとトレセン学園に向かえば良かったのだが。

「それでねそれでね! ワタシ、ここの喫茶店のジョーレンなのっ。ここってウマ娘だ

と、ちよつとしたサービスが受けられるからお得でおススメだよ！」

「なるほど。さすが天下のトレセン学園のお膝元、ウマ娘相手のサービスなんてものもあるのね」

「そうそう、ここら辺はそーいうお店が多いからウマ娘なら要チェックだよ！ちなみにここのお店は喫茶店ティンカーベルっていうの！」

「ふむ妖精の名前から取っているのかしら。アンティークや店内の装飾も凝っているようだし、なかなか良いお店みたいね」

2人はなし崩し的に話し込んでいた。

事情を知らない人からすれば仲の良い友達同士に見えるだろう。

目の前の少女はニコニコしながら矢継ぎ早に話題を出し、キングヘイローがそれに返答するといった形になっていた。

「うんっ！ 確かウマ娘ちいきしんこー組合、だっけかなあ？ そういうところに入っていないといけないんだって」

「ウマ娘地域振興組合ねえ……よく分かりませんが、そういうものもありますのね」

何故こんなことになっているのだろうという疑問はあるものの、府中を詳しく知らないキングヘイローからすれば彼女の話は興味を引くものであった。

またそれとは別に少女の人懐っこさも原因だろう。

名家の令嬢として過ごしてきたキングヘイローにとって彼女のようなタイプは非常に珍しい。というよりも初めてだ。

基本的に令嬢同士の会話はおっとりとした調子で、ひと呼吸置いて話し合うことが多い。

どちらかという和我が強いタイプという自覚がある自分であったが、パーティの会場でそれを表に出すことはまずなかった。

本来ならこういったグイグイくる手合いは相性が悪いのではとも思っていたのだが、(こういうのを『ウマが合う』とでも言うのかしら?)

ふと昔ながらの言葉を思い出す。

『ウマが合う』とは人間たちが発祥元である諺だ。(ことわざ)

当事者であるウマ娘たちからすると不思議な言葉なのだが、人間たちからするとウマ娘たち同士は非常に仲が良いと思われていた。

ウマ娘と言う種族自体がお互いに険悪な関係になることがあまりないのだ。

当事者たちが仲が悪いと言っても、人からすると喧嘩するほど仲が良いという風を受け取られる場合もある。

また彼女たちは出会った当日でもすぐ仲良くなることも少くない。

それこそ前世で何かあったのではないかとまことしやかに囁かれるほどだ。

そういつたオカルト的なものをキングヘイローはあまり信じていなかったのだが、

「少しだけ見方を変える必要があるのかしらねえ」

「? どうしたのおねーさん?」

「いえ何でもないわ。ちよつとした感傷の念を抱いていただけよ」

「おお……なにやら大人の貫禄が見える気がする」

打てば響くと言うのだろうか。

こころごとと表情が変わる少女との会話はなかなか楽しいものであった。

そうして時間を忘れるほどの会話を重ねていたのだが、終わりの時間もまたやってくる。

会話をしている最中にキングヘイローは何気なく外を眺めてみる。

すると外が薄暗くなっていることに気付いたのだ。

「あら?」と声を挙げた。

「いけませんわね。約束の時間を過ぎてしまおうわ」

「おねーさんどうしたの……あれ、外暗くなり始めてる!」

「さすがに話し込みましたわね。ちよつと急がないと」

「ごめーん! まさかこんなに話し込むなんて……」

「別に良いですわ、楽しかったもの。でもこれ以上はさすがにいけないわね。会計はこ

ちらでするから、貴女は早くおうちに帰った方がいいわ」

「うん、ありがとう、おねーさん……それじゃーねー」

彼女も慌てているのだろう。お礼もそこそこに見事な俊足で外を駆け出していく。人にぶつからないか不安になるレベルだったが、府中のことも詳しくかった少女だ。

おそらく大丈夫だろうと考える。

そんな後ろ姿を見送ったキングヘイローだったが、ちよつとしたミスに気付いた。

「そういえば名前を聞くのを忘れていましたわ。……まあ、いいでしょう。どのみち騒がしい子のように、すぐに出会おうでしょう」

仲良く話していたのにお互いの名前を聞くのを忘れていた。

その事実を忘れていたものの後悔はしない。

あんな、騒がしい少女なのだ。トレセン学園に行けば、すぐに出会えるだろうと思っていた。

会計を済ませ、カバンを持ち直す。

薄闇の空の合間から星々が瞬き始めている。

その様子をじっくり楽しみながら歩けないことに少し残念な想いを抱きつつ、彼女は小走り気味にトレセン学園へと向かい始めた――のだが。

「――ッ!?!」

最初は突風が吹いたのかと思った。

違う、風ではない。風が人型をしているわけではない。

彼女を追い越すかのように何名かの黒髪っぽいウマ娘たちが颯爽と追い抜いていったのだ。

(速い!?! もしや私よりも——)

思考が追いつく前に彼女たちは既に去ったあとだ。

薄闇ではあったが白と青の制服はよく映える。

間違いなくトレセン学園の生徒——喫茶店の少女と同様、ただ寮へ帰ろうと急いでいたのだろう。

しかしキングヘイローの目にはしっかりと刻まれた。

「強敵、ですわね」

駅ですれ違った少女もそうだった。

そして喫茶店での少女も浮ついた気分ではあったが、冷静に考えるとかなりの潜在能力を持っているように見えた。

キングヘイローの前に立ちふさがるのであろうウマ娘たちの存在。

いずれレースで戦うであろうことを想像し、彼女は口元を薄く三日月にさせる。

「やってやろうじゃないか、ってやつですわ」

気合を入れ直し、彼女もまた小走りでトレセン学園へと向かうのであった。

☆

「これでよし、と。荷物が多いと大変ですわね……」

「荷物が多すぎたかしら」と内心思いつつもキングヘイローは額を拭う。

トレセン学園へ着いた時には陽が沈みかけていたが予定の時間ギリギリには間に合っていた。

初日から遅刻しては家の名前に傷がしまいかもしれなかったので、ホツとしたものだ。

寮長というフジキセキ先輩——黒髪に前髪の一部が白い『流星』とも呼ばれる髪色を持つたウマ娘から軽い説明を受け、現在は自室で荷解きがひと段落ついたというところ。

次の日にはクラスへ転入する予定だった。

ここまで多少のドタバタはあったものの問題なく到着できたわけだが、少しだけ悩みもあった。

「狭い、ですわね。荷物が多いとか関係なく、部屋自体が物理的に」

彼女が入った栗東寮りつとうりょうの部屋はお世辞にも大きくない。

内装は2人部屋ということで、ベッド、机、小物入れ、椅子、クローゼットなどが2つずつ。ついでに共用だと言わんばかりに小さな冷蔵庫が1個。

あとは洗面所やトイレ、小さなお風呂。お風呂に関しては他にもウマ娘用の大浴場があるとのことだった。

スペースとしては8畳から10畳といったところか。

実家の自室に比べると三分の一か四分の一くらいの狭さだ。

幸いもう一人の住人はまだ決まっていないようなので、今のところキングヘイローが全て使える状態。

自分の荷物はできるだけ自身のベッドの方に押し込めておいて、収まりきらなかったら空いているベッドも使わせて貰おうと考える。

「制服はともかく私服はいくつか送り返さなきやいけませんわね……食器などもかさ張るわ。ふう、しばらく忙しくなりそうね」

分かつていたこととはいえやることが山積みで少し面倒な気持ちが沸く。

ただ同時にふつふつと込み上げてくる想いもある。

今日出会ったような強敵たちを打ち負かす自分の姿を。

そして観客がキングヘイローの名を呼ぶと共に拍手喝采を送る光景を。

考えるだけでいくらでも気合が入ってくる。

「明日から始まるのね——キングヘイローの伝説が！　おーっほっほっげほげホツ!? た、高笑いって何気に難しいですわね。とりあえず今日やるべきことは終わりましたし、喉が渴いたから何か飲み物を——」

勝利したときにと練習していた高笑いを盛大にしくじりせき込むキングヘイロー。涙目になりながら段ボールを開けていると、小さいながらもひと際想い箱を見つめる。

中を覗いてみると案の定というべきか。赤と黒の装飾が特徴の缶ジュースがズラつと並んでいた。

（今日はガラナを飲んでさっさと寝ましょう。明日も早いですし）

さすがに長距離の旅で疲労が溜まっていたのか、身体の芯から重い感覚を覚える。旅行から帰ってきたとき特有の何もしたくなくなるタイプのだるさだ。

冷えてはいなかったものの氷は用意していたので、グラスに注いで一気に飲み干す。何か忘れていた気がしたが気にしない。

大変な旅だったので自分へのご褒美だ。

その後は風呂も手早く済まし、洗った髪も乾かし、歯も磨いた。

パジャマ姿になったキングヘイローはそのまま電気を消し、自分のベッドに潜り込

む。

「お母様たち……お休みですわ……」

そのまま静かに眠り、明日への英気を養う。

そのつもりで彼女はゆっくり睡魔に襲われて寝る――

――はずだったが一時間経っても寝れなかった。

全力で寝ようと思うと逆に色々脳内で考えが、浮かんでは消え、浮かんでは消え、まったく寝れる気配がしない。

むしろどんどん覚醒していく感覚すらあった。

原因は明白。いくら何でも寝る前に飲んじやいけないものだった。

(……ガラナのカフェイン効果を忘れてましたわっ!! いえ、1本程度のカフェインなら慣れてるし問題ないはず。……あのティンカーベルとかいう喫茶店でコーヒーをたぐさん飲んでいたので原因かしら)

間違いなく、それに違いない。

慣れない旅と、話に花が咲いたせいで油断してしまっていた。

あの少女と話し込む過程でかなり注文していたのが明らかに原因だろう。

人知れず悶絶した彼女がようやく眠れたのは2時を過ぎ、3時に回ろうかという時刻。

——翌日、当然のように寝過ごしたキングヘイローだったが、遅刻ギリギリとはいえ学園に間に合ったのは奇跡という他なかった。

しかし彼女が最初に乗りに越えるべき強敵は、その日に何度も襲い掛かる睡魔だったのは大きな誤算であった。

皇帝と青雲と天真爛漫少女と

青空の下。トレセン学園、芝のコースで体操服を着た2名のウマ娘が競り合うように激走していた。

「まだっ！ こんなところでっ！ 負けるわけにはいかないっ!!」

「うわわわ!!? ハイローちゃんすっごーい!」

片方はキングヘイロー。普段の余裕は何処へやらとばかりに汗を流しながら全力で疾走している。

もう片方は綺麗な栗毛の少女。約2週間ほど前に喫茶店で出会った少女だった。冷や汗を流しながら背後から迫ってくるキングヘイローに驚愕している。

——何故、キングヘイローがコースで走ることになっているのか。

それは時を遡り、その日の午前中にまで巻き戻る。

☆

青と白のラインの入ったトレセン学園の制服に身を包んだキングヘイローは、とある

扉の前で緊張した面持ちのまま、右手を軽く挙げて扉を叩く。

コンコンコンと小気味よく叩くと室内から「入れ」と声が聞こえたので、ゆつくりと扉を開ける。

「失礼致します」

「来たか。そこに座ってくれ」

「はい、それでは……」

腰まで伸びた鹿毛のロングヘアーに、前髪は左右に黒、中央が白色という少し珍しい髪色。

しかし腕を組んだ姿は威厳という言葉が似合うほど堂々とした姿だった。

可愛いというよりは、凛々しさや雄々しさを感じる威風堂々とした出で立ち。

トウインクルシリーズを知っている者なら、まず知らない者はいないであろう人物。

「三冠ウマ娘であるシンボリドルフ先輩に御呼びが掛かるとは光栄ですわ」

「トレセン学園においては生徒会長という役回りだがな。ダンシング家のご令嬢にして一粒種である、キングヘイロー女史。ようこそ、トレセン学園へ。全国でも有数の規模を誇る学園だけに見るべきところも多いだろう」

「そうですわね。さすが日本中のウマ娘が集う場所——強者も多いようで」

シンボリドルフ——その圧倒的な強さのレースぶりから『皇帝』とまで称されるウ

マ娘の中でも最上位の実力を持つ人物。

キングヘイローがまだ幼かったころ。母から自分の年代についての忠告を受けたとき、『絶対者』という言葉を使っていた。それはまさに目の前の女性にこそ使われる言葉だろう。

『レースに絶対はないが、ルドルフには絶対がある』——目指すべき頂があるとすれば、それは彼女と言っても過言ではない。

「日本中とは言っても地方のトレセン学園へ向かう者もいるがな。とはいえトウインクルシリーズを勝利するために、虎視眈々と狙っている者も多いのは事実だ。……そう言う言い忘れていたが、入学者には一人一人面接してはいるんだがな。この時期は人が多いため、君は二週間遅れの面接になってしまった。済まないな」

肩を竦めながら苦笑いするルドルフ。

トレセン学園は通常の学園と違ってウマ娘たちが不定期に入学することが多い。

本来なら一括で預かれればいいのだが、学園への入学は同時にレースへ出走することを意味する。

高速で走ることができる彼女たちのレースは最悪、死亡事故がないわけではない。

そうした事情からウマ娘の成長具合やレース適正なども審査しながら随時入学許可が降りる体制になっていた。

キングヘイローも例に漏れず、5月の頭に入学している。

そういった事情を知っていたので愛想笑いしながら気遣うように返した。

「いえ、お気になさらずに。興味深い施設も多いので一通りチェックしていました。むしろ学園に慣れるために丁度いいタイミングだったと思います」

「君も既に他者と切磋琢磨するために動き始めていると言ったところだな……まあ世間話はここまですておこうか。他の者にも聞いているが、学園などについて何か質問はあるかね。将来の不安などがあるなら、ある程度のアドバイスはできるが」

トレセン学園にやってくるウマ娘は寮生活をする人が多い。

近所なら家から通う少女もいるが、2000名以上のウマ娘が所属するマンモス校の府中トレセン学園はそれだけ人気が高い。

それは同時に親元を離れてやってくる少女たちも非常に多いということで、新しい生活に不安を抱くウマ娘も少なくなかった。

生徒会長であるシンボルドルフはそういった少女たちのケアもしているのだろう。

とはいえ元からレースに勝利するために来ているキングヘイローにそういった不安はない。

むしろワクワクしているくらいだ。

そのため彼女は元から用意していた質問をする。

「凱旋門賞について質問があります」

「……………凱旋門、か。世界に於いてもつとも権威あるレースのひとつ。国を超えた多種多様なウマ娘たちが、その栄光を掴まんと夢見る賞だな」

何か思い入れがあるのか、あるいはさしもの皇帝も凱旋門への並々ならぬ拘りがあるのか、一呼吸おいたのちに反応した。

それはキングヘイローにとつても他人事ではない。

毎年、多くの世界屈指の実力と言われるウマ娘たちが集う祭典——凱旋門賞。

ウマ娘に限らず、ホースマンなら一生に一度はそのレースでの優勝に関わりたくないと願ってやまない偉大なレースだ。

日本では誰一人そのレースで勝利した歴史はない。

なればこそ手に入れたいと願うのは必然。

アメリカで生まれ、イギリスを主戦場にしていた母、ダンシングブレーヴ。

世界一尊敬してやまない彼女が勝利した凱旋門賞——その娘であるキングヘイローがその栄光を手に入れたいと望むのは当然の流れだった。

「このトレセン学園から凱旋門賞への挑戦はできるのか、それが聞きたいのです」

「できるかできないかで言えば、できる。しかしその条件は非常に厳しいぞ」

「分かっています——その条件とは？」

キングヘイローが気持ち拳に力を入れつつ、シンボリルドルフを真剣な表情で見つめる。

何がなんでも聞きたいという姿勢に相手はゆっくりと話し出す。

「細かい条件については長くなるので割愛するが、当然ながらまず実績だ。多くのレースで優勝しているか、少なくとも上位の着順についているのが最低条件。ただ絶対条件ではないのだが、通例としてGIウマ娘であることが暗黙の了解となっている。君が凱旋門賞に出場したいなら最低でもGIで1勝、できれば2、3勝はしておかないと厳しい。無論、勝てば勝つほど出走に有利なのは間違いない」

「当然ですわね。1920年から続く、長い歴史と伝統がある世界最高峰のレース。GIウマ娘でなくては出れないのは分かっています」

「そして、そこにトレーナーの問題が絡んでくるので注意が必要だ」

「なぜトレーナーが……?」

それまで余裕の態度を見せていたキングヘイローが初めて動揺する。

トレーナーがなぜ関わってくるのかという疑問だ。

実績があるウマ娘なら誰だって凱旋門賞に送りたくなるものではないのか。そんな疑問が顔に出ている。

それを知ってか知らずか、シンボリルドルフは静かな様子で説明する。

「ウマ娘の管理、育成は資格を持ったトレーナーの責務だ。もし海外遠征をしたいと言ってもトレーナーが絶対拒否の構えをしたら従うしかない」

「ある程度、理解があるトレーナーの下に付け、ということですか……」

「その通りだ。私が所属しているチームへリギルなどは、そこら辺に理解があるからまだやりやすいがな。君も興味があるなら入ってみるといい。定期的に試験を行っているので、それをクリアできれば入ることができるぞ」

「学園最強と呼ばれるリギルへの加入は、もちろん検討していますわ——それ以外に問題はない」

「あとはトレーナーの手練手管次第だな。……あまり公言したくない事実だが、腕利きのトレーナーは自身のチームのウマ娘を特定のレースに捻じ込むことが上手いらしい。大々的にマスコミへアピールを行うことで委縮した敵陣営の出走取消を狙ったり、根回しを巧み行う者がいたりと様々だ。当然、凱旋門賞ともなればそういった政治手腕も言うべき、駆け引き上手のトレーナーなら出走権をもぎ取れる可能性も高くなる」

「なるほど……」

若干、苦虫を噛み潰したように語るシンボリドルフ。

正道を往く彼女の美学としてはそういった小狡いやり方は好まないのかもしれない。ただキングヘイローの印象は少し違っていた。

（勝利するために万策を期す……当然ですわね。そういったトレーナーが見つければいいのだけれど）

勝利こそが頂点にあり、万策は尽くすべきだ。

もちろん卑怯な真似を推奨しているわけではない。

スポーツを題材にした物語の中には敵が闇討ちしてきたりなどするものもあるが、キングヘイローにとってそれは唾棄すべき行いだ。

正々堂々と戦い、他者を圧倒するからこそ勝利という言葉に意味があると固く信じている。

しかし人事尽くして天命を待つという言葉があるように、彼女は勝利するために全力を尽くしたい。そしてトレーナーも一緒に万難ばんなんを排しつつ、勝利に執着できる人が望ましい。

そんな想いからキングヘイローは次の質問が口に出る。

「話を変えるように申し訳ありませんが、トレーナーについて質問があります。ウマ娘のトレーニングは彼らがないと基本的に行えないというのは事実でしょうか？」

「事実ではあるが、事実でない部分もあるな。自動車並みの速度で走れる、我らウマ娘の監督や責任はトレーナーの資格を持つ者。そしてウマ娘たちのレースなどに関わるトレンセン学園側にある。何かしら事故が起きてしまった場合、その責任はトレーナーと学

園側が負う、ということだな。ゆえにウマ娘たちは基本的には彼らの指導方針に従う義務が生じる。彼らがウマ娘だけでも大丈夫と判断すれば、トレーナーがいなくても練習を行うことはできるといった具合だ」

「条件付きで自主練習は可能、と」

権利を持つ者は、責任も生じるという話だ。

責任の所在がハッキリしているからこそ、トレーナーにいくつかの権限が与えられているのだろう。

そしてウマ娘も安心して、それに従うという構図だ。

シンボリルドルフの話は続く。

「トレーナーはトレセン学園側にウマ娘の訓練計画を提出する必要がある。いつ、どのルートを走るか知らせることで、事件や事故あるいは不慮な出来事に対応するためだ。トレセン学園周辺には交通標識に『ウマ娘注意』の看板が立っていて、周辺住民に注意喚起を行っている。そのルートでの事故は歩行者にも責任が生じてくるといったところだ」

「正にウマ娘と人間たちが寄り添う街といった具合ですね」

「そういうことだ。これからも未来永劫、人とウマ娘が手を取り合っていくためのな。

……他に質問はあるかな？」

「聞きたいことは聞きましたから、これで……あ」

これからどう動くべきかの指針は立てた。

今すぐにも行動しようか考えていたキングヘイローだったが、あと一つだけ頭に浮かんだ疑問があった。

それは先日、喫茶店での出来事。トレセン学園の生徒らしい少女とした会話での疑問である。

どうせなら聞いてしまおうと彼女は質問する。

「ウマ娘地域振興組合なる言葉を耳にしたのですが、どういう集まりなのか何^{うかが}っても大丈夫でしょうか？」

「珍しい質問だな。……時にキングヘイロー、君は自身の容姿についてどう思う」

「?」 綺麗で美しいと思いますか？」

不可解な質問にきよんとした様子で返す。

ある意味、自信過剰ともナルシストとも言える返答だがシンボリルドルフは気にしていない。

彼女に限らずそれは周知された事実でもあるからだ。

「そうだ、ウマ娘たちは総じて眉目秀麗^{びもくしゅうれい}——少なくとも人間たちの価値観では容姿の平均レベルがかなり高いという評判らしい。そんな周囲の耳目を惹きつけてやまないウ

マ娘が店にいらしたらどう思う」

「質問の意味が分かりかねますが……まあ、そこら辺の調度品よりもはるかに良いのはと」

「それが問題になってしまう場合もある。ウマ娘相手に過度のサービスを提供して店に来てもらう。するとそのウマ娘目当てに客がくる、いわば客寄せパンダならぬ客寄せウマ娘になってしまう。いち早くそうしたサービスを提供した店は当時、大いに賑わったそう。それを他所が真似し始めたせいで一時期問題が起きたんだ。過剰なサービス合戦の結果、地域経済がダメになりかけたという過去がな」

「しよ、商魂たくま逞しい話ですわね……」

「ああ、本当にな。最初に始めた店主の一人は純粋にウマ娘のファンだったらしく、彼女たちが喜ぶ姿を眺めたかったという理由だったらしいが……世の中どう転ぶか分からないものだ」

賢いというべきか、商人魂が凄いというべきか。

どういう顔をしていいか分からず、口元をひくひくさせた。

まさか客であるはずのウマ娘を看板娘——悪い言い方をすれば釣り餌にして、人間のお客を釣るような真似を考える者がいるとは良く考えついたものである。

喫茶店ティンカーベルだっただろうか。

あそこのお店もそういった狙いがあつたのかもしれない。

実際、キングヘイローは気にしてなかつたものの、終始視線を感じていたのは事実だった。

「そうした過剰競争を抑止するために、トレセン学園が旗振り役となつて発足したのが『ウマ娘地域振興組合』という組織だ。これは地方のトレセン学園でも同様のものがある。内容はサービスを行う店の認定や提供するサービス額、ウマ娘への過度な接触行為の制限といったところだ。あとはさほど説明すべき点はないのだが、なにかあるかな」

「いえ大丈夫です。疑問が解消できてよかつたですわ。ありがとうございます」

「何、気にしないでいい。生徒たちあつての生徒会長だからな」

そう語るとシンボリルドルフは僅かに笑みを浮かべる。

堂々とした姿。女性でありながら格好良さと美しさは普通のウマ娘ではなかなか出せない。正に三冠ウマ娘の貫禄と言えよう。

そうした姿は同性であるキングヘイローでも一瞬引き込まれそうな魅力があつた。しかし自身の容姿にも自信がある彼女。

(まあ私も負けていませんが)

などと内心で思っていたりもしたが。

そのあとは軽い挨拶の後に生徒会長室を退室する。知るべきことは知つた。

湧いてくる闘志を抑えるために、左手を軽く顎に当て思案する。

一度目を閉じ、瞑目。落ち着けるように息を吐き、目を開く。彼女の瞳に迷いはなく、真つすぐ前を見据えていた。

やるべきことはただ一つ。

「チーム選び、ですわね」

不敵な笑みを浮かべて廊下を歩いていく。

元々入学初日から各チームの下調べは付いていた。

あとは実際に見学してトレーナーをじっくり選んでいけばいい。

方針が定まった彼女は高鳴る期待感を胸に歩き始めた。

☆

キングヘイローが去っていった部屋の一室。

静かになった室内でシンボリドルフが独り言ちる。

「キングヘイロー——ダンシングブレーヴの一人娘、か。……彼女とは、いつかレースを
して見たかったものだな」

どこか遠くの景色を見るような目をしながらシンボリドルフは静かに言葉をこぼ

す。

昔、勝負できるかもしれない夢の対戦カードがあった。

しかしその夢は叶わず流れてしまったレース。

もしロンシヤンのターフでぶつかればどちらが勝利できたのか。

それは当人に限らず、多くの関係者やファンが激論を交わす永遠の議題でもあった。

その娘が凱旋門について聞いてきたときは若干だが動揺してしまったものだ。

「だが」と彼女は続ける。

「ダンシングブレーヴ——静寂にして大嵐というべき鬼才と他者を圧倒する雰囲気。だが親と違い子にそこまでの覇気は感じない。しかし三日会わざれば、という言葉もある。果たして彼女がどういう軌跡を描いていくのか……興味深いな」

どこか懐かしげに、しかし寂しげに。

シンボリルドルフは眼下に見える生徒たちの姿を眺めながら嘆息する。

彼女の複雑な胸中が晴れることはなかった。

☆

本日の授業が終わり、チームが決まったウマ娘たちが教室を出ていく。

意気揚々と歩きだしたキングヘイローもチーム選びをしようと回っていた。

しかし現在は食堂の片隅で、チームの一覧が書かれているパンフレットを眺めながら、眉間に皺しわを寄せている。

なぜそうなったのかと思えば、

「これ、というものがありませんわね」

キングヘイローのお眼鏡に叶うチームがまったく見つからなかったのだ。

各チームごとに練習場所がある程度決まっている。

それを把握していたので予定していた順番にチームを見学していったのだが、ピンとくるチームが見つからない。

既に10チーム。自分の中でのハードルが高いつもりはなかったのだが。

「チームメイト、トレーナー、チーム方針、設備、実績……全てが揃っているのがリギルしかない。でも試験日はまだ先だから入ることもできない。なにやら時間を無駄にした気がしますわ」

指折り数えながら条件を精査する。

もしやハードルが高すぎるのか——そんな考えもよぎる。

しかし妥協はしたくない。

一生に一度の大きな選択になるかもしれないのだ。

チームに所属しなければトウインクルシリーズに出れないと分かってはいるものの、真剣だからこそ決断は慎重に行わなければならない。

パンフレットと睨めっこしていた彼女の横から声が掛かる。

「ふうくん、随分悩んでいるようだねえキングヘイロー」

「何事も真剣に取り組むのは当然でしょう——セイウンスカイさん」

おっとりと言うよりは、どこか雲のように掴みどころのないのんびりとした口調の少女がキングヘイローの左側から発せられた。

白に近い芦毛あしげに少しだけ青空の色を混ぜたような不思議な色合いの髪色。うなじが隠れる程度のセミショートだ。

同じクラスと同級生。しかし密かにキングヘイローが警戒している人物だ。

服装はキングヘイローと同じくトレセン学園の制服に身を包んでいる。ただキングヘイローと違って片手に体操服を入れた布袋を持参していた。

それを目ざとく気付いたキングヘイローが問いかける。

「そういう貴女はチームを決めたんですの?」

「フィーリングが大事だからねえ。入学した次の日にはこれだー、と思ったチームに入ったよ」

「入学した次の日!? つまり2日目には決めていたと」

「うん。だってチームに入らないと練習時間が限られちゃうし、どうせなら早く動いた方がいいでしょ。ほら先じれば人を制すっていうし」

「ぐ、ぐぬぬ……」

のんびりしながら即決した同級生に対し、密かにライバル心が沸く。

（人となりか掴みづらいですけど警戒すべき相手ね。テストで「勉強してないよー」とか言いながら高得点を挙げる手合いだわ）

少なくとも現時点では彼女が先を行っているのが現実だ。

同時に慎重になりすぎてる自分を叱咤激励する。セイウンスカイの判断は実に合理的だ。

見習うべきところがあるのも事実だった。

でも悔しきからちよつぱり歯ぎしりするキングヘイローを他所に、彼女は時計を見ながら「練習の時間だ」と呟く。

「それじゃあ、練習の時間だから行くね。ヘイローちゃんも頑張れー」

「分かっていますわよ。あと私の名前はキングヘイローですわ」

「もう、細かいなあ」と苦笑いしながらセイウンスカイは去っていった。

テーブルに座ったままのキングヘイローは顎に手を当て、少し悩む。

こうしている間にライバルたちはどんどんチームを決めていき、トレーナーたちから

指導を受けていく。

しかしトレーナーの質や性格が自分に合うものでなくては、指導された時間もロスになつてしまう可能性もある。

即決か、慎重か。

悩んだ彼女が立ち上がり、まずは行動すべきと判断する。

「期日を決めましょう。今日明日は精査する時間——合うチームがあれば良し、無ければリギルを選ぶ方向で動く」

選択としては中間といったところ。

万全を期す選択が誤りだったとは思わない。

他人は他人。自分は自分。

柔軟に対応するのが良作と判断した。

そして早速動こうとした彼女だったのだが。

「あー！ やあつと見つけたー！ おねーさん久しぶりいっつー！」

「あら、貴女は喫茶店の」

底抜けに明るい口調の声が食堂の入口から発せられる。

相も変わらずロングヘアーツーサイドアップという出で立ちの少女。

キングヘイローより頭一つ分くらい低い小柄な体格——喫茶店ティンカーベルで出

会ったウマ娘だ。

天真爛漫という言葉が似合う彼女はニコニコしながらキングヘイローへと駆け寄った。

しかしその動きは俊敏。風を感じたかと思うと、あっという間に距離を詰めている。あちこちから「きやあ!」「うわ、なに?!」と驚く声が出ていた。

(速い!?! やはりこの子も——)

自分がいる場所と入口はそこそこ離れている。そしてその間には自分たち以外のウマ娘も歩いていて。

しかし室内で他のウマ娘が驚いているのを他所に、衝突することもなく変幻自在とも言うべき柔軟な動きで難なくキングヘイローの前までやってきていた。

自分の予想が間違っていないことを確信する。

セイウンスカイなどと違って意図的に実力を隠しているような素振りは見せないが、動きひとつとっても才能を感じさせるものがあった。

そんなキングヘイローの内なる心を気にせず、相手は弾んだ声で話しかけてくる。

「お礼を言うのを忘れてたし、名前を聞くのも忘れてたから、ずうーつともやもやしっぱなしだったよおー」

「わ、私も同感ですわ。せつかく恩を売ったのに、お返しを頂けないなんて損なだけです

し」

動揺した心を落ち着かせるように少し強気な発言で返す。

右手の甲を腰に当て、左手は顎に軽く触れて偉そうなポーズを決める。

話しながらふふんと悪戯つ子のような笑みを浮かべた。

軽い冗談だ。

相手もそれが分かっているらしく、笑顔は変わらない。

「ほんとおねーさんはおねーさんだねえ。あつ！ マヤノの名前はねっ、マヤノトツプガン！ おねーさんのお名前は？」

「……キングヘイローですわ。以後、お見知りおきを。それでどうしたんですの」

「あー、えつとね、うんつとね。おねーさんさえ良ければうちのチームに招待したいなあ
っつて！」

「チーム、ですか」

「うんっ♪」

マヤノトツプガンと名乗った少女は太陽のように明るい笑顔を浮かべながら元気よく返事をする。

キングヘイローの長い一日はまだ終わらない。

チームへレヴァティとトレーナー

マヤノトップガンと名乗る底抜けに明るい少女。

そんな彼女の誘いに乗る形で歩いていたキングヘイローだったが少し困惑していた。

「ねえ、ちよつと良いかしら？」

「んんん？ どおーしたの？」

「明らかにチームがいるような場所じゃない気がするのだけど……」

二人がやってきた場所は学園の校舎からさほど遠くはない。しかし特に建物がある気配はなかった。

周囲は綺麗に草木が切り揃えられてはいる。

道も正面玄関と同じく、不思議と広いもののチームがいる風でもない。

あえて言うならそんな場所でも雨避けの屋根が付いたアーチと風避けの壁が両サイドにあること。

また時折、ウマ娘や学園のスタッフも行き交っている。

キングヘイローを先導するマヤノトップガンは、知り合いなのかたまに他の人物と笑顔で挨拶しながら歩いていた。

練習施設がないのに何故、といった具合だ。

疑問が絶えなかったキングヘイローだが、更に混乱させることが起きる。

辿り着いたのは学園の外へと通じる扉。外からは車が走る音が聞こえており、明らかに敷地外への道だ。

「ちよ、ちよつと！ 外へ行つてどうするんですか!？」

「まあまあ、気にしなあーい気にしなあーい♪」

「気にすることだらけですわよ……」

甘ったるい子供声でニコニコした様子の子の目の前の少女。

キングヘイローは少しぐったりした様子で、「もう何がなんだか」とこぼすしかなかった。

そのまま扉を開くと案の定道路が広がる。次いで目に入るのは横断歩道と信号——そして『ウマ娘注意!』と書かれた標識も立っていた。

標識自体はトレセン学園の近くなので別に不思議ではない。

ただマヤノトップガンはそのまま信号が青になると「こつち、こつち!」と言いながら眼前の横断歩道を渡っていく。

そうして横断歩道を渡った先にあるビル。その入口で彼女は立ち止まると、

「とうちやあーく！ さつ、入つて入つて!」

「はい、ですの」

キングヘイローは西日に目を細めながら、手で陽を遮ぎつつ、目の前のビルを仰ぎ見る。

灰色のコンクリート。少し古ぼけてはいるが四階建ての立派なビルだ。

1階部分はカーテンが掛けられているのか様子が分からない。

ただ何となくだが、期待感みたいなものが湧いてくる。

——自分が求めていたものがここにあるのかもしれない。

困惑に、少しだけ高揚感が混じりつつあった。

入口は自動ドアらしく、近づくと普通に左右に開く。

入ってすぐ左手には受付嬢とみられる女性。ウマ耳はないので普通の人間だ。

あとは警備員らしき紺色のスーツを着た男性。こちらも人間だった。

プロ意識が高いのか、キングヘイローたちに一瞥した後は、無言のまま正面に向き直る。

「いつもご苦労さまです！ ドア開けるよ？」

「あ、ちよつと——!?!」

静かに入ろうとしたキングヘイローだったが隣の少女は気にしなかったらしい。

勝手知ったる我が家とばかりに堂々と中に入ってしまった。

仕方なくついていった彼女の前に広がった光景は――

「……トレニングジム？」

広さとしてはそこそこ言ったところうか。

おおよそ体育館の半分くらいの規模だ。ただ外観に比べると幾分狭い印象を受けるので、この部屋以外にも別の部屋があるのだろう。

見える範囲には、筋トレやランニング用の器材など多様なトレニング器具が揃っている。

ところ狭しに機材があるわけではなく、何も無い場所や畳が置かれて臨時の休憩所のようになっている場所もあった。

奥の棚には本が納められているものと、何も無い棚の2種類。用途不明だが空のガラケースもある。

他には飲み物を冷やしておくための冷蔵庫などといったところか。

大人数では手狭だが、数人で使う分には申し分ない規模という印象だった。

しかしパツと見では人の気配はない――と思つたら奥に白髪の男性が一人いる。

奥まった場所の、隅にあるガラスケースをのんびりとした動作で拭いていた。

清掃業者かと一瞬考えたが、マヤノトップガンがびよんびよんと跳ねるような調子で、男性に近づいていく。

「おじーちゃん！ やってきたよー！」

「やれやれ、マヤノは相変わらず底抜けに明るいのう……そちらさんは？」

「あ、どうも……」

どう応対していいか分からず、軽く頭を下げる。

近づいてよく見るとかなり歳のいっている初老の男性だった。

杖は突いていないし、両脚はしっかりとっている。

ただ顔は皺だらけでガラスを吹いている手も、顔と同様にかなり歳付きを重ねた様子。温和な顔つきだが開いているのか分からないほど細目だ。

トレーニングジムより、縁側でお茶を啜っている姿ならとても良く似合うだろう。

様子を窺うキングヘイローに対し、男性は一礼して話し始める。

「どうもお嬢さん、儂はここでトレーナーをやっている坂戸という者です」

「わ、私はキングヘイローです。えっと今月からトレセン学園に入学した新入生ですわ」

「ほう新入生じゃったか。ということとはマヤノの後輩ということか」

「ええ、そういう訳で………後輩？」

普通に受け答えをしようとしたところで固まるキングヘイロー。

脳が言葉の意味を吟味し、理解したところだ。

マヤノの後輩、という言葉の意味。

キングヘイローの身長は150後半くらいだが、マヤノトップガンの身長は彼女の目算では140cmあるかどうかという見立てだった。

約20cm弱の身長差とあつてかなり低く見える。

トレセン学園は不定期に入学者がやつてくる学園。

おねーさんと自身を呼ぶことも相まつて無意識に、同学年かあるいは早期入学した年下などと考えていた。

少し震える指を指しながら確認する。

「申し訳ありません……マヤノ、トップガン先輩、でいいのかしら……？」

「えっ、ヘイローちゃんつて年下だったの？ おねーさんだと思つてただけど」

「事態が良く分らんがマヤノはおそらくキングヘイローさんの年上で間違いないぞ。もうトゥインクルシリーズでレースデビューもしておるしの。まあちっこいから勘違いしても仕方ない」

「ぶーぶー！ ちっこくないもん。これから大人のレディーになっていくんだよっ」

「ほっほっほっ、そうじゃな。まだまだ成長期じゃ」

「へへーん♪」

好々爺然とした様子で老人はマヤノトップガンの頭をポンポンと撫でる。

少女も満更でもないらしく、素直に撫でられていた。

ウマ耳と尻尾の有無さえ考えなければ、傍目からは完全に祖父と孫の姿だ。

その様子を眺めつつ、キングヘイローは思案する。

（まさか先輩だったとは……。いえ、その前にずつと撫でていらっしやるけど、止めた方が良いのかしら……）

仲が良いのか二人のやり取りが中々終わらない。

マヤノは気持ちよさそうに頭を撫でられており、坂戸と名乗ったトレーナーも久しぶりに来た孫を構っているかのように撫でている。

キングヘイローは部外者ではあるのだが、ほのぼのした様子をずつと見せられても困ってしまふ。

数分経つても結局終わる気配がなかったので、仕方なくキングヘイローはこほん、とわざとらしく咳をする。

坂戸トレーナーも脱線しているのに気付いたのか、苦笑しつつ畳の方を指差した。

「いやいや、濟まないね。孫が出来たようでつい撫でてしまふんだ。……とりあえず立ち話をするのも億劫じゃろう。茶菓子があるからゆつくりしていくといい。マヤノもそのつもりで連れてきたのだろう？」

「あ、うん！ ヘイローちゃんに奢って貰っちゃったからね、お返しにジムで余ってるお菓子でも一緒に食べようかなあーって！」

「そうですね、あの時のお礼を——ん？」

その言葉に応じかけたところで止まる。

彼女から「チームに招待したい」と言われていた。

そしてキングヘイローはチーム選びに苦勞していた最中。

そのため彼女は勘違いしていた。

「ちよつと待つて。チームの勧誘ではないんですの？」

「んん〜？ この前のお礼に、お菓子と一緒に食べようと思つてただけ……」

お互いに首を傾げる二人。喰い違ふ言葉。

その意味を吟味した結果、遅れて理解する。

どうやら早とちりしてしまつたらしい。

考えてみたら最初はキングヘイローのことを年上と勘違いしていた彼女だ。

普通なら既にチームに所属している身と考えるはず。それを奢つてもらつたから勧

誘というもおかしい話だった。

少しだけ嘆息する。

マヤノトップガンではなく、冷静になり切れてない自分に対する呆れだ。

何処かで焦りが出ているのかもしれない。

（単なるポカミスですね。このキングヘイローともあろう者がとんだ笑い草ですわ。

この子——先輩にも落ち度はないですし……。どうしましょう、チーム選びをしたいのだけだ)

チーム選びに早く戻った方がいいのかもしれないと考え始める。

今日か明日にでもチームを絞る予定なのだ。

生徒会長との面談が終わった後、昼休みなどを利用して各チームのトレーナーと接触していた。

練習時間中の今は、各地にトレーナーが分散しているので、かなり労力がありはするものの、やらないわけにはいかないだろう。

次はどこを巡ろうか——キングヘイローがそんな段取りを脳内で考え始めていたが、坂戸トレーナーが穏やかな口調で話してかけてきた。

「ふくむ、なにやら事情がある様子だ。とりあえずお茶でも飲みながら話してみると良い。爺と違って、若者は時間がたつぷりあるのじゃから」

「よく分からないけど、おじーちゃんに相談してみるのもいいと思うよおー。これでもこの道30年以上のベテラントレーナーさんらしいし！」

「え？ ああ、そういえば、ここもチームですものね……」

動くことだけ考えていたら、自分が今いる場所にもトレーナーがいる。

完全に失念していたことを悟った彼女は目を瞑り、額を軽く揉んだ。

——少し休んだ方がいいのかもしれない。

「——そうですわね。それじゃあゆつくりしようかしら」

「うんっどうぞどうぞ〜！ お菓子も持ってくるね！」

「ええ、ありがとう」

ここで場を辞すのも失礼と考え、思いとどまる。

そのまま休憩に入ったキングヘイローたちだったが、先ほどの話をしないわけにもい
かない。

興味深げなマヤノトツブガンと、穏やかな様子で質問してくる坂戸トレーナーを前に
自分の事情を話し始めるのだった。

☆

自分なりのプライドを持ってチーム選びをしていること。

しかしこれといったチームが見つからないこと。また現在はそのチーム選びの最中
であることなど、簡単な事情を話した。

それを受けて坂戸トレーナーは自身の白い髭ひげをなぞりながら、なるほどとこぼす。

「チーム選びは確かに難儀じゃのう。新入生のウマ娘にとっては重要な選択になるから

慎重になってしまうのかもしれない」

「ええ……でもライバルたちはほとんどんチームを選んでいきます。ただ下手なチームを選びたくないという想いもありますから中々難しくくて。……あ、センベイ美味しい」

ジム内での休憩所となっているらしい隅っこの上で話し合っていた。

話しながらも折角出されたということで、センベイなどの茶菓子いただきながらの会話。

糖分を補給した方が頭の巡りも良いだろうと考えてもいる。

広さ的には12畳ほどで、やはり数人くらいならのんびりできるスペース。

ただ休憩所といっても畳の周囲を木の板で、気休め程度に仕切っているだけの簡素なものだ。

本来なら仮眠室などちゃんとした施設もあるのだが、普段はあまり使っておらず、埃っぽい場所もよくないだろうということも畳の休憩所での会話となっていた。

悩んだ様子のキングヘイローに、マヤノトップガンが話しかける。

「これだー！ ってファイリングじゃ駄目なの？」

「同じようなことを言って決めた方もいらっしやるけど、私は自分の選択に自信を持って選びたいの。どのような結果であれ、後悔するような生き方はしたくないわ」

「おお……やっぱりヘイローちゃんって大人っぽくて格好いい……！」

「そ、そうかしら。ふふ〜ん♪」

「あ、また子供っぽくなった」

いつぞやのように褒められて胸を張るも、子供っぽいと言われてしまうやり取りを挟む。

二人の間に変なお決まりが出来つつあるのを見ていた坂戸トレーナー。

少し考えた素振りをしたのち、一度領き、キングヘイローを方に改めて向き直った。

「それならキングヘイローさんや、ちよつと走ってみんか」

「……どういふことですか?」

言葉の意味を理解しかねた彼女は怪訝な顔を見せる。

そんな相手に坂戸は少し苦笑いする。

「儂も長年ウマ娘を見てきた身じや。重賞のみでGIウマ娘を輩出していない、凡骨のトレーナーではあるが、それでも無駄に顔に皺を刻んできたわけじゃない。悩んだなら汗を流せばよい」

「ですがこの時にもライバルたちはどんどんチームを——」

「だからこそ走って汗を流すんじゃないよ。君はまだまだ若い。選択はじっくり選んでもいいんだ。迷走するくらいなら馬鹿みたいに疾走した方が頭もスッキリして、見えてこなかった道が見えるかもしれん」

その言葉を聞いて逡巡する。

確かに焦りすぎていたのかもしれない。

他人は他人、自分は自分と言いだかせたはずなのに見事に調子を狂わされている。

セイウンスカイがそんな意図を持って言ったわけではないにしろ、そんな他者の一言で右往左往していた自分を客観的に見ると無様という他ない。

人生の先達せんだつともいえるべき人の言葉は、若いキングヘイローの思考を冷静にさせるだけの力があつた。

気付かないうちにへにやりと曲がっていた彼女のウマ耳も、よく聞いておこうと直立し始める。

「それにマヤノのレースが近づいていてな。実は併せトレーニングのパートナーを探していたところなんじゃ。うちのチーム——ああ言ってなかったの。チームヘレヴァティ」は人数が多めなんだが、マヤノに付いていけるレベルのウマ娘がいなくてのう。人助けと思つて、頼まれてくれんか」

「それにしても他の方々がいらつしやらないような……」

「レヴァティというチームは少し特殊な形態を取っていてな。所属するウマ娘が非常に多いため、複数のトレーナーやトレーナー助手を雇って形成している複合チームなん

じゃよ。グループごとに各々がトレーニングをしておる」

「複合チーム!? いえ、少し待ってくださいまし」

キングヘイローは慌ててパンフレットを取り出し、チェックし始める。

リギルなどを始めとしたチームと、所属している主なウマ娘が書かれているページをめくっていく。

名前だけでなくチームの練習場所や部室などもあり、あちこちにキングヘイローがメモした文章もある。

そして最後の方にあったチーム。かなりのウマ娘の名前が記されていた。

しかし分からない事があったため、『詳細不明・他を優先』と横にメモを入れていたのだ。

「確かチームには学園内で主な拠点の場所が書かれている。けど一つだけトレセン学園以外の住所が記載されていたチームがあったはず」

「よく調べているのう。おそらくそれがレヴァティじやろうな。人数が多すぎて普通の部室ではとてもじゃないが収まりきれん。なのでビルを貸し切ってここをチームの拠点にしている。トレセン学園からの裏口や横断歩道も頼んで作って貰ったんじゃないよ」

「頼んだって……いえ、それじゃあ、どれほどのウマ娘たちが所属しているんですの?」

「僕も完全には把握しとらんのだが、まあ100名以上は所属しているかの。それにト

レリーナー2、3名と助手が十数名の大所帯じゃ」

「ひゃく!?!」

さらつとトンデモナイ発言が飛び出し、キングヘイローは驚愕する。

横断歩道の件もあり見過ごせないが、それ以上に重要なのは所属人数と規模だ。

確かにパンフレットには大勢の名前が載っているのは把握している。

しかしチーム〈レヴァティ〉という大きなくりの中に、何故か各チームごとに名前が記載されていたのだ。

そのことを坂戸トレーナーに聞いてみると、

「人数が多いため、儂が各グループごとに人員を割り振っておるからじゃよ。とてもじゃないが一人で捌ける人数ではないからろう。まだ足腰は健在とはいえ、老骨には厳しいものがある。チーム名に関しては色々事情があるが、各グループで行動しているため、把握しやすくするのが主な理由かの。マヤノだけは儂が指導している状態じゃな」

「じゃな!」

「そ、そうなんですか……」

する。

それよりもチームの実態が見えてきて、さしものキングヘイローも驚きを隠せない。

マンモス学園ならぬマンモスチームだ。

実績はないと言うが、チームの規模なら間違いなく最大。チームの歴史も長く、施設なども整っている。

熟達したトレーナーというのもプラス材料だ。

温和で闘志に欠ける部分も見え隠れするが経験は嘘をつかない。

何より真摯にこちらの言葉を聞いてくれている誠実な人物とも言える。

打算的な考えをしまっている自覚があるものの、当たりを引いたかもしれないと内心で考えていた。

そんなあれこれと考えているキングヘイローを他所に、坂戸トレーナーは時計を覗き込みながら、

「ところで驚いているところで申し訳ないんだが、先ほどの併せトレーニングの件についてはどうじやろうか。時間も圧しているようだな」

「えっと、そうですね……先輩さえ良ければ」

「私？ もちろんオツケーだよっ！ おねーさん速そうだし、楽しみだなあ〜」

無邪気な笑顔で快諾するマヤノトップガン。

ただ彼女の中でおねーさんという単語が定着しそうなので、念のため釘を差す。

さすがに先輩からおねーさん呼ばわりされるのは何かと誤解を呼ぶだろう。

「そちらの方が年上なのだけれど……」

「あれま、そうだっけ。それじゃ、ハイローちゃんって呼ぶね！ 私のことは気軽にマヤノって呼んでいいよっ。マヤなら更によし！」

「……ではマヤノ先輩で」

「むむむ、距離感を測っている気配がする。でも、それも面白くていいかもっ！」

「もうすっかり仲良しじゃのう」

社交パーティーでの会話は相手の反応を良く観察しながら慎重に会話することも多い。

そういった相手と違ってマヤノトップガンの反応は素直すぎるので調子が合いやすいのかもしれない。

ややこしいことを考えずに会話できる純粋な相手に少し苦笑いしながら、キングヘイローはマヤノ先輩に先導されながら併せトレーニングを行うための場所へと歩き出した。

☆

そんな二人の少女の仲睦まじく、微笑ましい後ろ姿を眺めながら、坂戸トレーナーは静かに携帯を取り出す。

「……ああ、儂じゃ。今日の合同トレーニングなんだが追加で一人加わるから、少し予定を変更したい」

「訓練計画？ 学園外ならともなく学園内なら後出しで構わん。あんなもの頭の固い役所連中のポイント稼ぎだ。辻褄が合えばええ」

「ダートではなく芝に変更じゃ。合わせる相手は芝の方が良さそうじゃし、ダート主戦のマヤノ相手ならハンデにもなるしの。学園側には儂が根回ししておくから適当に捻じ込ませてもらう。普段はそこまで芝コースを使わんのだから、こういう時くらい我儘を言ってもええじゃろう」

「ああ、それで頼む。残りの子たちはゆっくり観戦席で休ませてやれ。観客がいる方がより実戦に近いシチュエーションで行える」

強引とも言うべき内容を口にしながらも、坂戸は的確な指示を出しながら携帯先の相手との会話を終える。

そこに立っていたのは好々爺した人物とは少し違う。

執念とでも言うべきなのか。

普段の温和な様子とはまったく違った並々ならぬ気迫がそこにはあった。

しかしそんな気配を嫌がるかのように、坂戸は大きく深呼吸する。

普段通りの様子に戻った。

「まったく、嫌な大人になったもんじゃ。しかし——」

懐から写真を取り出す。

中央には見目麗しいウマ娘。身長は少し大柄で可愛いというよりは凛々しい姿だ。

ピースサインをしながら白い歯を見せ、満面の笑みを浮かべている。

白黒写真ではあったが、前髪の中央には特徴的な白い流星があった。

そのウマ娘の左右にも男女の姿があり、片方はどことなく坂戸トレーナーに似ていた。

それを見ながら決意を瞳に宿す老人が一人。

少し陽が傾きかけた空を見上げる。

空はいつもの見慣れた光景だ。

ただ幾度となく太陽が過ぎ去った後に残ったのは、老いぼれた男だけ。

その事実を思い出した坂戸は誰に言うでもなく呟く。

「もう、農一人か……。GI……。勝ちたいのう」

「おじーちゃん！ 遅いぞおー！」

「——おっと、すまんすまん。今行くぞー」

老人らしいゆつたりとした歩調で彼女たちを追いかける。

指導者たる者、弱気な姿を見せてはいけない。

彼女たち、ウマ娘はそういつた感情を敏感に感じてしまう。

坂戸は努めて穏やかな笑みに戻す。

そこにいるのはいつもの年老いたトレーナーの姿があつた。

負けず嫌いの新入生

「ここが、練習用のコース……さすが天下のトレセン学園。壮大ですね……」

学園内でも一際、青空が広く感じる会場。

さすがに実際のレース場よりも狭いが踏みしめる芝ひとつひとつでも、しつかり足を包み込むような感触を返してくる。

自然が多いせい、肺一杯に空気を吸うと草木の匂いが立ち込める。

都会の中にあつてもどこか安心できる雰囲気があるにはあつた。

キングヘイローは実家でも芝コースを良く走っていた。

だからこそ分かる。キチンとプロ意識を持った職員が忠実に仕事を行っているのが。

「走つたら凄く気持ちよさそうな芝だよねえー」

「ええ、完璧に管理されたコースですわ。走るのがもつたないくらい」

「じゃあ走るの止めて散歩でもしてみますか？ ピクニックするのも良いかも」

「日曜日の朝ならそれも良いかもしれませんが、こういった場所を全力で駆けたらさぞ気持ちいいか——マヤノ先輩の方が分かっているのではなくて？」

「そうだねえー。マヤノは普段はダートばかりだったけど、芝も良いかもーって思って

る。これから走るってだけでも胸がワクワクしてたまらないもんっ」

体操着に着替えたキングヘイローとマヤノトップガンは、併走トレーニング開始前までの僅かな会話を楽しむ。

ブルッと少し震える。

怖気づいたのではなく、武者震いに近いものだ。

観客席も完備している。

事情は分からないものの多くのウマ娘たちが休憩時間なのかくつろいでいた。

キングヘイローたちがやってきたのはトレセン学園内にあるコースのひとつ。

トレセン学園は芝、ダート、坂路はんろ、そしてウッドチップコース。また心肺機能を鍛えるためのプールなど多彩な訓練施設が揃っている。

とはいえ常に自由に使えるわけではない。

各チームには規模や実績などに応じて練習時間が決められている。

もちろんそれはただの意地悪でやっているのではない。

ダートなどは土を均なせばいいだけなので維持費は安いが、芝コースは使い過ぎれば当然、地面がむき出しになってしまう。草も生き物なのでコースの回復には時間が掛かるのだ。

ウッドチップもウマ娘の強靱な脚力に耐えられず、碎けてしまうため常に整備しなく

てはならない。

しかもウッドチップは特殊な加工を行っているため、雨が降ると汚染された水が流れだしてしまう。

管理するだけでも非常に面倒が多い設備だが、骨への負担を抑えたまま、筋肉に負荷を与えられる施設とあつて非常に便利で人気も高い。

こういった各練習施設は順番待ちになりやすい。

そういつた事情もあつてキングヘイローといえども、ちゃんとした芝コースで走ることになるのは実家から出て以来だった。

高揚する自身の気持ちを抑えるように、手をグーパーさせたり、身体の各所の柔軟に励む。

マヤノトップガンも楽しげな顔をしているものの、やはり先輩。小柄ながら普段とは明らかに違う雰囲気まどを纏まとっている。

その纏うものが何なのかは実際のところキングヘイローにも真の意味では理解できていない。

ただ分かっているのは、

（お母様たちと同様の空気——実戦を積んできたウマ娘。まだ格が違う、ということ。でも負けるつもりは毛頭ない……勝つつもりで勝負する。何故なら、私がキングヘイ

ローだから！)

尊敬する母から貰った名前。

偉大なる祖母、ハイローと王を意味するキングを合わせた大切な名前。

キングハイローにとつて、それは何よりも拘るべきもの。

左手で前髪を払う。

そうするとどこまでも遠くを見渡せる気がする、好きな動作。

気合は十分だった。

併走トレーニングに関しては坂戸トレーナーから詳細な指示は貰っていない。

ただ一言、「楽しいレースをするといい」とだけ伝えられただけだ。

つまり全力で走れということだろうと彼女は受け取っていた。

マヤノトップガンを改めて観察する。

こちらの視線に気付いたのかニツコリと笑みを返してきた。

しかしその瞳の奥には純粋な友好とは違う色が混ざっている。少なくともキングへ

イローはそう感じていた。

「マヤノ、先輩はもちろん——」

「んんー？ もちろん全力でやるよ。だってそっちの方が楽しいでしょっ♪ ハイロー

ちゃんも、そういう目をしてるしっ」

「ふふつ、そうですわね。いらぬ心配でした」

「別にいーよおー」

馬鹿な心配をしたものだと言を疎める。

キングヘイローにとってレースとは神聖なもの。全力で、全開で、お互いの意地をぶつけ合う場所。

手を取り合つて二人三脚でもするかのような関係はいらぬ。

お互いにつつかり合いながら切磋琢磨するからこそ前へ進める。

遠くで坂戸トレーナーがスタッフたちと話し合っていた。

直に始まるのだらうと察せられた。

——もう言葉は必要ない。

スタッフの一人という福山という男性から簡単な説明を受ける。

「芝コース、1700m、左回りのレースとなります。距離に関してはマヤノトップガンさんの次レースが中京1700mのダートコースなので、それを想定しています。芝なのはキングヘイローさんを慮おもんばかつてのことですね。ダートは砂が舞うなど、新入生が初めて走るには少々厄介なコースなので」

「ご配慮いただきありがとうございますわ」

「うんうん、マヤノも芝も楽しそうだなあーって思ってたからオツケーだよ」

「ありがとうございます。自分がフラッグを上げたらスタートです。では、位置に付いてください。内側がキングヘイローさん、外側はマヤノトップガンさんとなります」

「はい！」

スタツフは邪魔にならないようコースを区切っている内ラチを潜って向こう側にいく。

さすがに普通の人間がウマ娘のスタートに巻き込まれると危険との判断だろう。

福山はゴール板の方にいるスタツフに向けて旗を振り、準備完了を告げる。

どんな様子かは遠くで分かりづらいが、向こう側も了承したのだと察した。

スタツフはフラッグを下に構える。

「位置について——」

スタート前特有のピリピリした空気が肌を刺す。

遠くの観客席からも視線が集中しているのを感じる。

「よーい——」

グツと足を踏みしめ、全神経を前方に向ける。

聞き逃さないよう耳にも気を配ることは忘れない。

息を飲む。

春先の陽光が包み込むトレセン学園の一角で、やっと始まる。

「スタート！」

旗が上がり、スタートが告げられる。

「——っ!!」

その瞬間、ズドンという衝撃が少女の全身を襲う。

もう何度も味わっているスタート食後の空気抵抗だ。

ウマ娘は時速6、70kmでの走行が可能。しかも瞬発力もあるため、バイクのアク

セルを全開にしたときよりも強烈な負荷が襲い掛かる。

とはいえウマ娘なら誰もが慣れている感触だ。

意に介さず、進み続ける。

走り慣れた芝の上をキングヘイローの身体が前へと突き進み、マヤノトップガンの前を往く。

1バシン——およそ2.5mと規定されている差を付けることができた。

完璧なスタートと言っていていいだろう。

(このままぶつち切って、駆け抜けさせて貰いますわよ——っ!!)

自分の思った通りに状況が動いていると確信しかけたキングヘイロー。

しかし瞬時に異常を察知する。

風を、肌で感じた。

今、自分の身体が受けている空気抵抗ではない。

ふんわりと肌を撫でるような感触——しかし一直線に隣から突き抜ける意思を持った風。

異常の正体は何なのかはすぐ理解できた。

明るい栗毛の髪が後を引くように右側を過ぎ去っていく。

小さな身長に加え、首を下げた低姿勢の姿はまさに地面ストレスで、縫うように走っている。

——マヤノだつて簡単に負けないよ？

そんな言葉を掛けられた錯覚を覚える。

キングヘイローをあつさりとは抜いた突風——マヤノトップガンは3バシン差ほどを付けて前方を走っていた。

距離としては一軒家の端から端までより、もう少し前くらいの距離。

瞬足という他なかった。

（——ぐっ!? さすが先輩ということですか！ でも、まだ！）

両脚に力を込めて、あらん限りを力をつま先に集中する。彼女だって伊達にトレーニングを重ねたわけではない。

幼少期から自分なりの肉体を鍛え上げたのだ。

特に瞬発力にはそれなりの自信があった、のだが。

「縮まらない!?!」

自分が加速している自覚はハッキリしている。

全身を襲う空気抵抗は増していた。

自身の茶褐色の髪が激しく波打つ。

既に限界ギリギリのスピードでの疾走。

なのに距離が縮まらない。

自分よりも小柄な少女。しかし力強い脚で地面を蹴り上げ続けている。

それが意味しているのは簡単だ。

(確かにまだ3ハロン——600mを超えたばかり。でも、まだ速度が上げり続けるなんて!?)

かつて母親たちの前で自身の走りを見せた時もあつた。

あの時よりキングヘイローも成長し、動きにも磨きをかけた。

トレーニングは毎日欠かさない。

勉強だつて怠らない。

礼儀作法だつて真剣に取り組んできた。

彼女は常に全力で事にあたり、相応の成果を積んできたつもりだ。

もちろん自惚れているわけではない。

世の中、誰にでも自分より優れている者はいらるだろう。

マヤノトップガンという少女も、彼女なりの研鑽けんさんの日々があつたことは理解できる。

だがしかし、

(……)んなにも、開きがあるなんて)

レースは中盤から終盤へと差し掛かる。

左のコーナーを曲がり始め、身体は左へと傾く。

はっはっはつと息が上がり始める。

心臓は既に嫌な鼓動を上げっぱなし。

全身から汗が噴き出て、早くも溜まつた乳酸が疲労を訴えかけてきた。

普通ならもう少し余力があつたはず。

しかしキングハイローのスタミナが枯渇し始めていた。

なぜなら最初から全速力だったからだ。

そうしなければ3バシンドころか、圧倒的な大差を付けられて勝負にならない。

——やはり上には上がいるのか。
キングヘイローも馬鹿ではない。

世界が自分の都合の良いようにできているなんて子供染みた妄想はしない。
強者はあるべくしてある。

シンボリルドルフはその典型だ。

彼女の勝利の裏で、いったい何人のウマ娘たちが苦渋を舐めてきたのか。
そういった歴史もまた勤勉な彼女は学んできた。

だからこそ、努力は人一倍こなしてきたつもりだ。
自分がその一人にならないために。

それなのに、

(為すすべなく敗北する——それが私の運命だつて言うの!?)

既にゴールがある最後の直線——最終コーナーに到達しつつあった。
残りは5、600mくらいだろうか。

未だにマヤノトツプガンとの差は縮まらない。

いや、何とか3バシン差で維持できているというのが現状だ。
全速力を続けて脚も疲労状態。

振り上げる両手も徐々に上げるのが億劫になる始末。

——格の違いを見せてつけられて終わるのか。このキングヘイローが……キングの名を知らしめるなどと思っていた自身が。

全力で走っても未だに差が追いつかない。

「くそっ」と短く舌打ちしたくなりそうな^{じくじ}忸怩たる想い。

ジリ貧のまま良いところもないまま敗北。

それで終わるかと思われた。

しかし、

「っ!?!」

突如、歓声が沸く。

内心でびっくりしつつも、キングヘイローはチラリと声のした方を見た。

観客席からどよめきがしている。

何名か分からないがおそらく100名以上はいるだろうと思われる観客席。

なぜ彼女たちが驚いているのか。

分からないまでも、彼女の鋭敏な聴覚が風の音に混じった声を、何とか拾い上げる。

「あのマヤノトップガンさんに喰い付いたまま最終コーナーまで追いつけるなんて!」

「坂戸トレーナー直々に指導を受けている方に新入生が追従できるの!?!」

「どっちも凄く速いつ!」

他者の視線が自分に集中しているのを感じる。

そして称賛の声も多く混じった。

キングヘイローはそのとき初めて理解する。

そして薄っすらと口元が緩む。

——そうか、マヤノトップガンは強いウマ娘か。

——ならば自分が勝利すればどれだけ注目を集められるのか。

——自身の証明は勝つことでしかできない。

——だったら、やることは決まっている！

疲れている。状況は最悪。勝ち目などない。

到底届かないと思っていた状況。

瞳に光が戻り、歯を強く噛み締める。

理性が訴えかける弱気な感情全てを彼女は——キングヘイローは、意図的に遮断した。

そんな想いを何と表現するか。

「まだあああつ！　こんなところでえっ!!　負けるわけにはいかないっ!!!」

「うわわわ!!　ヘイローちゃんすっごーい!」

ぎゅんと一息に加速する。

驚愕するような声がマヤノトップガンから発せられた。

風を全身で受けて負荷が高まる。

しかし、それでも尚、前を駆け続けようと意地にも似た信念で走り続けた。

この瞬間のキングヘイローは面倒なことなど一切考えていなかった。

——負けず嫌いなだけだ。

そう自虐的な考えがよぎる。

本当にただ負けたくないという一念のみ。

身体が悲鳴をあげているはずなのに、何故か高揚感に包まれたまま、駆け続ける。

気付いたら、あんなに遠かった小さな背中では視界から消えていた。

右側を併走している雰囲気だけを感じる。

おそらく自身が出した全力——それは今、このレースで発揮できている。

最高速度を超えた走りができている。

無茶をしていると分かってはいるが止まらない。止められない。止まってはいけない。

いとキングヘイローは考えていた。

無茶をした先に何があるかも理解している。

しかし全力疾走の疲れか、それとも動き過ぎた反動での酸素不足か。

もはや脳内すらぼんやりと薄曇りがかかり始めた中で薄っすらと考える。

(……この程度の動きなら、身体は壊れることはない)

併走トレーニングではあるが、キングヘイローは確かにこのとき、自分の限界を突破できた走りができているという自覚があった。

ならばあとは勝利するのみ。

顔を上げ前方を見据えた。

無理やりにも腕を上げ、何度も訴える脚の疲労感を強引に振り払う。

気持ち前傾姿勢を取りながら、マヤノトップガンを抜き去って勝利する。

その栄光の道は霧がかかった脳裏でも描けていた。

そう脳裏では。

——ごめんね、ヘイローちゃん？

残り200m。

不意に語りかけるような声を聞いた。

全力で駆け続ける自身が本当の意味で、その声を捉えたかは分からない。

疲労が限界を突破した末の幻聴かもしれない。

ただ甘ったるい声がキングヘイローへと投げかけられたように感じた。

申し訳ないような、でも全力で今を楽しんでいるような弾んだ声。

——私も絶好調だから、先に行くよ。

届いたはずの背中。

勝てるはずだった背中。

しかし瞬時に抜き去っていく背中。

描いていた脳内の勝利への道は霧の中へと消えていく。

ただ栗毛の弾丸と化した少女がゴールへと駆け抜けていく姿だけは、ハッキリと両目で捉えていた。

☆

そんな2人のレースぶりを見ていた坂戸トレーナーは啞然とした様子で見っていた。

椅子から勢いよく立ち上がったことに他のスタッフが驚いているが気にする様子もない。

測っていたはずのストップウォッチを押すのすら忘れて二人を見つめている。

「まさか、そんな……まるであれは………」

震えた手を前を伸ばすような動作だった。

まるで別の光景を見ているような、そんな動き。

老いたトレーナーの目に何が映っているのかは分からない。

呼吸すら忘れかけていたほどだったが、ハツと意識を取り戻すと、先ほどの妄想を振り払うように坂戸は頭を振る。

「——いや、歳を取ると変なことを思い出すのはいけないのう。それに、アレはもう一人いないと完成しない。馬鹿馬鹿しい……本当に馬鹿馬鹿しい妄執じゃ」

「坂戸さん、なにか気になることでも？」

「……老眼でな、ちよつと良く見ようと立っただけじゃよ。さて、行くかのう」

坂戸の突然の行動に周囲のスタッフが怪訝な表情をしていたものの、いつもの好々爺した様子で適当に誤魔化する。

これはただの併走トレーニングに過ぎないと被^{かぶ}りを振る。

あんなものは何処にでもよくある光景。

どこぞのレースに関連付けるなど無茶にもほどがあつた。

そんな自身の考えをくだらないと一蹴しながら、坂戸トレーナーはゆつくりとゴール板を超えた二人に声を掛けるべく向かうのだった。

☆

「はあ、はあ、いやあーハイローちゃん凄かったねっ！ はふう……マヤノびつくりしちゃった。あと200mほど脚を溜めて使われたら危なかったよおー……はあっ」

「はあっ、はあっ……………」

汗をかき、運動直後で血の巡りが良くなっている頬を紅潮させたマヤノトップガンは無邪気な笑顔でキングヘイローを称賛する。

実際、タイミングさえ良ければ先にゴールしていたのはキングヘイローだった可能性はあった。

ただレース慣れしていない彼女では、いつ仕掛けるかというタイミングをまだ理解しきれしていない。

対してマヤノトップガンは既に6戦ほど真剣勝負のレースを行っている。

経験の差という他ないだろう。

称賛を受けているキングヘイローはただ膝を付いて俯いたままだ。

当初はすぐに立ち止まるのも身体によくないと、覚束ない足取りで周囲をフラフラと歩いていたが、現在は力尽きて両手を付いている状態。

汗の量はマヤノトップガンよりもかなり多く、酸素が足りないと肺がずっと空気を要求している。

しばらく応答のないまま息を落ち着けようとしていた。

そんなキングヘイローの傍にいた彼女だったが、不意に激しく上下させていた肩がゆっくりになっていく。

その様子に息が整ったのかと思つたマヤノトップガンが声を掛けた。

「……そろそろダイジョーブ？ ヘイローちゃん」

「ぐ——」

「ぐー？」

「ぐぐぐぐぐぐぐぐぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎつ！」

「ど、どうしたのっ!? なにかものすんごおーく、歯ぎしりしてるけど!？」

「悔しいから堪こらえてるだけですわっ！ 腸はらわたがぐりんぐりんいつてますのよー」

キングヘイローは負けず嫌いだった。

それも筋金入りの。

だからこそマヤノトップガンに一時とはいえ追いつけたとも言えるが、結局負けてしまった。

練習だろうが何だろうが、勝ち負けの付くのもので負けるととにかく悔しい。

それがどうしようもないものでも、凄く悔しくなる。

子供っぽいという自覚はあつたが、それでも三つ子の魂百までとでもいうのだろう

か。

こればっかりは生来のモノなのでどうしようもなかった。

しばらく蹲うずくまったままだったが、徐々に内心の炎も収まってきたのでゆつくりと立ち上がる。

マヤノトップガンに改めて向き直ると、少しだけバツが悪いように視線を逸らす。

そしてそのまま握手を求めるように手を差し伸べた。

「……その、ありがとうございましたわ。完敗、としか言えませんでした」

「ええー、全然そんなことないよっ。ヘイローちゃん凄かった！ 最後は追い抜かれると思っただもん」

「親以外の、地元の同年代には負けたことがなかったのだけれどね。……初めての敗北ですわ」

「それじゃあマヤノがヘイローちゃんの初めてを貰ったことになるんだねっ♪」

「……その言い方は誤解が生じそうなのでやめてくださいまし」

「んー？」

呆れつつキングヘイローが手を出すと、相手も小さなで右手を掴み、ぶんぶんと上下に振る。

握手というには乱暴だったがお互い特に気にした様子はない。

すっかり打ち解けた様子だった。

「それにしても、自分で限界の更に先を行けた感覚があつたうえで差を付けられるとはね。内容としては実力差を見せつけられたようにしか見えませんわ」

「でも次からは、その限界を超えた力を引き出せるようになるんでしょつ。なら、むしろもつと良くなるつてことだよおー」

「そ、そうかしら。……そうですわね、まだキングヘイローの伝説は始まつたばかり。幸先が良いということですわね！ おーつほつごほつごほつごほう!? ……ごほつ、う、運動直後の高笑いはやめた方が良さそうですわね……」

純粹な称賛に気を良くしたキングヘイローは気分が高揚していたこともあつて、高笑いをするも盛大にせき込む。

胸を抑えながら少し気分を落ち着けていると坂戸トレーナーがゆっくりとした歩調でやってきた。

「どうだねキングヘイローさん。全力で走つた気分と言うのは」

「爽快ですわね。それにマヤノ先輩と併せていただいてありがとうございます。また一歩自分の理想とする走りに近づけた気がします」

「マヤノもねえー、とおつても楽しかった！ また芝コースで走りたいなあー」

キングヘイローは礼儀正しく頭を下げる。心からの感謝だった。

マヤノトップガンも釣られたのか勢いよく頭を下げた。

そんな彼女たちに坂戸は穏やかな笑みを崩さない。

「そうか、2人とも得るものがあって良かったわい。……どうやら、少しくらいは頭の迷いが晴れたようじゃの」

「迷い? ……あ」

元々はキングヘイローのチーム選びに悩んでいた最中に、坂戸から併せトレーニングをしてみないかという話だった。

すっかりそのことを忘れていたことに苦笑する。

単純な自分が少し可笑しかった。

おかしかったついでに、こちらからも提案しようと考えてる。

「坂戸トレーナー」

「なんだい」

「もしよろしければ、そちらのチームへレヴアテイ〕に入らせてください。お願いします」
綺麗な姿勢で頭を下げるキングヘイロー。

マヤノトップガンと言う強者もいる。

長い歴史を誇る老舗という看板、チームは最大規模、スタッフと施設の充実、そして老練のトレーナー。

もう迷うことはない——このチームだと彼女の直感が囁いていた。

もし後で間違ったと思っても後悔はないだろう。

そんな彼女の申し出に、いち早くマヤノが喜色を浮かべてはしやぎ出す。

「ハイローちゃんも入ってくれるのっ!? マヤノはサンサーサンサー大賛成だよ! ねっねっおじーちゃん、決定だよね!」

「そのこと、なんじゃがな」

坂戸は少し悩んだ様子で口ごもる。

その様子にキングハイローは顔を上げつつ困惑する。

もしかして入部拒否かもしれないという可能性が沸いたからだ。

実際、チーム加入の判断をする権利はトレーナー側にある。

駄目と言われたらまだ振り出しに戻ってしまおう。

そんな不安な表情が出そうになったとき、坂戸は髭をなぞりながら口が開く。

「うむ、オツケーじゃ」

「わーい、おねーさんの加入だあー!」

「今の溜め、必要ありませんわよねっ!? あとおねーさんと言わないでくださいまし」

両手をバンザイしながらマヤノトップガンが無邪気に喜ぶ。

その横で不安になって損したと肩を竦めたキングハイローだったが、

「しかしだ、キングヘイローさん。その決定はあくまで保留としておいた方が良い」「保留、ですか？」

真剣な口調に戻った坂戸は保留という選択肢を用意してきた。穏やかな雰囲気とは違う。

細目の坂戸では瞳を見ても感情が窺うかがえない。

ただ本当に真剣な、しかし眉を下げて話す姿はどこか哀愁も感じさせる。

なぜそんな顔で話すのかキングヘイローには分からなかった。

「……とかく若者は一度した決定に固執しやすい。そうして自身の決断に執着した結果、後々になって間違いだったと気づく場合もある。特にその決定が大きければ大きいほど迷いと後悔は肥大してしまう。現に儂はそうやって自分の選択に、あとから大いに後悔してしまつたという若者を見たことがある」

「それは、チームの移籍という選択肢も忘れるべきでない、ということでしょうか？」
「そうだ。チームヘレヴァティンは歴史と規模はあるものの、やはり他のチームに比べて劣る部分も多い。特にキングヘイローさんは勝利への執念が強い。ならば強者が多いチームヘリギルを率いる東条ハナトレーナー——彼女の元で練習するのが最適だと儂は思つておる」

「……………」

「だから額面上は加入としておくが、本加入は冷静に考えてから決めて欲しい。老骨のくだらない拘りかもしれないが、頼む」

通常、強いウマ娘の加入はチーム側としては願ったり叶ったりで、もろ手を挙げて喜ぶのが普通だ。

実力者が入れば、他の者にも良い手本になる。

マヤノトップガンとキングヘイローがお互いに良い刺激になったのが良い例だ。

更にトレーナーはウマ娘の実績で評価されることが多いから尚のこと。

そしてキングヘイローは自身がウマ娘の中でも上位の実力を持っていると信じて疑わなかった。

実際、新入生の中でキングヘイローと肩を並べられる者は少ない。

だからこそ、彼女の加入を喜ぶどころか、暗にチームをすぐ離れても良い——そんな風に取りれる言動をする坂戸トレーナーの意図は分からなかった。

ただそこまで頼まれたら頷くしかない。

「……分かりました。まずは仮入部の気持ちで入らせて貰いますわ」

「ええー！ 本加入で良いと思うのにいー。おじーちゃん、普段はそういうこと言わないよね？」

「キングヘイローさんのことを考えてのことじゃ、分かってくれマヤノ。それにうちは

元々、移籍推奨のチーム。他の子も入ったり、他所へ移籍しているだろう?」
「ぶすうー……」

坂戸トレーナーの言動にさすがのマヤノトップガンも不信感を抱いたのか、不満そうな声を挙げる。

ただ論するような口調でも、唇を尖らせて無言の抗議をしている。

そんな彼女に対してゆっくりと頭を撫でながら、

「わかっておる、自分に付いていける速いウマ娘が欲しいのじやろう。今、他チームと交渉して有力そうな子の目星は付けておる。もう少ししたら一緒に走れるかもしれないから我慢してくれ」

「ほんとっ! 嘘ついたらハリセンだよおー! あと芝のレースしたい!」

「わかったわかった。次のダートが終わったら探しておこう」

「わーい」

「ハリセンって地味に痛いことしますわね……」

「それにしても」とキングヘイローは呟く。

たった一日なのに凄く濃い日だった気がした。

老練のトレーナーに、実力上位であろう先輩。そして老舗のチームに、規模だけはやたら大きい。

焦っていたはずなのに変化が激しい一日だった。

これからどうなっていくのか。

それは誰にも分からない。

しかし当初は焦っていたばかりの心境は穏やかな感情に様変わりしていた。
やっと始まるのだ。

トレセン学園での本当の戦いが。

ふうと軽く息を吐いているとマヤノトップガンと坂戸トレーナーが自身を見ていた。

そして小さな少女が満面の笑みを浮かべながら手を差し伸べる。

「ようこそっ、チームヘレヴァティンへ！」

「しがえない爺トレーナーじゃがよろしく頼むよ、キングヘイローさん」

「……ええ、よろしくお願ひしますわ。マヤノ先輩、坂戸トレーナー」

手を取り合ってそのまま歩き続ける。

笑顔で語るマヤノとそれに対応するキングヘイロー。

そして穏やかな表情で、それを見守る坂戸トレーナー。

彼女たちの物語は、静かに降り注ぐ夕陽の中、ゆっくりと始まる。

トレセン昔話と学園の怖い噂話

緑が生い茂る芝コースと異なり、サラサラとした砂地が広がる場所——ダートコース。ス。

観客たちは真剣勝負を見せてくれたウマ娘たちに声援を送る。

ウマ娘たちもまだゴールしたばかりで荒い息を吐きつつも、各々が反応を返す。

その中で特に多くの声を受けている少女が笑顔を浮かべながら観客たちに手を振り返していた。

「みんな応援してくれてサンキュの、ちゅっ！ この後のウイニングライブも是非見ていつてねえー！ マヤノのとびっきりのダンスを披露しちゃうよっ♪」

他の子よりも小柄ながら陽光に照らされて反射する明るい黄褐色の栗毛——ツーサイドアップとロングヘアの髪は非常に良く目立っていた。

人懐っこそうな笑みに人々も魅了されたのか口々に、「凄い子が出てきたな」「小さくて可愛い！」など称賛の声は止まない。

びよんびよん跳ねながらあちこちの観客に反応するサービス満点っぷりで、会場はほのぼのした空気が形成されつつある。

そんな様子に応援席にいたキングヘイローは驚いていた。

「……マヤノ先輩、凄いですわね」

「身体の基礎が仕上がってきたというところじゃな。7戦2勝だが、2位とは7バシン以上を付けての大勝。レースも最初は中盤に控えてラストは1位を捉えながら差し切る強い勝ち方じゃ。キングヘイローと併せた効果が早速でた感じだのう」

隣にいた坂戸トレーナーも大きく頷く。

2着以下を完全にちぎつての勝利。文句の付けようがないだろう。

「マヤノ先輩の戦法は先行か差し、と言ったところでしょうか」

ウマ娘のレース展開には大まかに4種類の戦法ともう1種類の特殊な戦法がある。

大体はレースが開始されてから道中の集団で、何処に自分が存在するかで呼び方が変わる。

今回のマヤノトップガンだと道中は集団の中央——中段に位置していたためキングヘイローは先行か差しだろうと考えていた。

「ふむ……ときにキングヘイロー。レースにおける戦法とはいくつあるか知っておるか？」

「もちろん把握していますわ。常に先頭かその横に付いていく『逃げ』。集団の中央から前方、あるいは2、3番の好位を位置しながらラストで追い抜く『先行』。集団の中央か

やや後ろに付きながら脚を溜め、足が疲れてきた先行集団のウマ娘を後ろから一気に抜き去る『差し』。そして集団の後方からゆつたりと脚を使いながら徐々に進出し、溜め切った末脚で相手をゴボウ抜きして勝利する『追い込み』ですわね。あとは特殊なパターンとして逃げの更の前に前を行く『大逃げ』というのもありますわ」

唐突な戦法講義に、キングヘイローは難なく言葉を返す。

彼女にとつては常識といつていいレベルの知識である。

坂戸トレーナーの元でトレーニングを開始して半月が経った。

当初はさん付けだったが「トレーナーなのだから呼び捨てでいい」というキングヘイローから申し出て以降、坂戸トレーナーは、呼び捨てで彼女の名前を言うようになっていた。

そんな優秀な教え子に坂戸は嬉しそうに眺を下げる。

好々爺然とした様子で坂戸が続きを話す。

「その括りでいうとマヤノの戦法は『自由自在』じゃ」

「自由自在——って、もしかして!?!」

「あの子は非常に器用な子でな。その日の気分で戦法を変えるんじゃないが、それがどれも当てはまるという空恐ろしいウマ娘なんじゃよ。天才肌なのだろう」

「逃げから追い込みまで何でもできるって、想像以上に凄いですわね……」

「本当にな。うちのチームになぜ来たのか不思議なくらいじゃわい」

以前の併走トレーニングで感じた違和感。

天真爛漫てんしんらんまんだがどこか母親たちにも似た雰囲気まを纏まとっていた。

もしかしたら想像以上の大物だったのかもしれない。

その事実には思い至るも、自身も負けてられないと彼女は密かに決意する。

どんな相手でも勝利してこそキングヘイローなのだから。

グツグツと足を踏みしめ、ちよつとだけ走りたくなつてしまうものの気持ちは抑えておく。

さすがにトレーナーの指示無しで動くわけにはいかなかった。

そんなキングヘイローだが、気にせず坂戸の講義が続いている。

「戦法については及第点じゃが、細かい差異もあるので注意するようにの。特に圧倒的ハイペースで『逃げ』のウマ娘の更に前を行く『大逃げ』は、見た目も派手でレースの華とも言われておる。不安定だが炸裂すると強力な戦法じゃ」

「ですが、その破滅的な逃げの大半は成就しないと思えますが」

「ん……確かにそうなんじゃが。まあ、今はまだいいかの」

「？」

坂戸の何かを匂わす言動にピクリと彼女のウマ耳が反応する。

この半月で多少なりとも彼の人となりを知っていったが、しかしこの老トレーナー——
—思わせぶりの態度が割と多い。

本人曰く、深く考えてから喋りたいとのことだったが、そのせいかたまに喋ろうとして止めたりすることもある。

(指導自体は納得がいくものなので良いのですけど……。知り合ってまだ半月ですし、
—おいおい知っておけばいいのかしら?)

マヤノトップガンなどは無邪気に信じるタイプなので坂戸の態度を気にすることは
—少ない。

毎日が楽しければ良いというスタンスのようなので、それを乱さなければ良いのだろ
—う。

ただ元々相手の態度や言動などを観察する癖がついているキングヘイローだとそう
—はいかない。

小骨が引つ掛かったように感じてしまうのだ。

仕方なく釘だけは差しておこうという結論になった。

「坂戸トレーナー、連絡事項があるならハッキリ仰おっしゃった方が良いかと思えますわ」

「ふむ、まあそうなんじゃが、こればかりは性分なのでな。ただマヤノが帰ってきた
—ら、その時に一緒に話した方がええじゃろうという判断だ」

「それならいいですけど……」

「済まんのう」

暗に喋る気がないとも取れる謝罪に、軽く溜息を吐いて追及を止める。

普段はウマ娘たちの好きなようにさせるトレーナーとしても有名ならしいが、どうにも自分の中の基準があるらしく、たまに頑固者になるときがある。

（まあ確定事項じゃないお話かもしれませんが、気にしても仕方ありませんわね）
適当なところで割り切る。

キングヘイローも話題ひとつでギスギスするような雰囲気は作りたくない。

そう考えて坂戸への視線を切ったところ、少し離れたところからせり上がってくる舞台を目撃する。

ウイニングライブを行うための特設ステージだ。

レースに勝利した者と2、3着のウマ娘たちは、ウイニングライブというレースにきたファンのために歌とダンスを披露する文化がある。

それがいつ出来たのかは分からない。

ただ昔からやっている風習という話だった。

今日は遠出をしていることもあり、ウイニングライブが終わって、マヤノを迎えないと帰れない。

これも後学とのんびりとライブの様子を見ていた。
弾んだ声でマヤノトップガンの歌も聞こえてくる。

『うーー☆ うまだっち♪ ~~~~~♪』

「……それにしても、改めて見るとせり上がってくる舞台装置つてとんでもないことをやってますわね」

壇上で踊っているウマ娘たちよりも、その下にある装置が気になってしまふ。

普段は邪魔にならないよう地下に格納されているというステージ。

トウインクルシリーズが行われるレースの会場では大体の施設が似たようなものを持っているというから驚きだ。

地方になるとさすがに維持費や建設費などの兼ね合いから、予めレース会場の近くに手作りの舞台があるらしいと、レヴァティ内の違うグループの女の子から聞いていた。

舞台上上がっているのは、本日勝利したウマ娘たち。

その中央には専用の青と白のドレス姿に身を包んだマヤノトップガンもいる。

彼女はウイニングライブが非常に楽しいらしく、笑顔を観客たちに振りまいていた。

そんな愛らしいウマ娘たちの姿に会場のボルテージが一気に上がり、歓声が一際大きくなる。

文字通り大地を揺らすというレベル。

今日は人が集まるような重賞レースはなかったはずだが、それでも客の入りは目算でも数万円ほどはいる。

邪魔にならないよう隅っこに退避していたはずなのだが、一足先に夏が来たのかと思うほどの熱気が立ち込めていた。

その空気の中で坂戸トレーナーはしみじみと話す。

「……………昔は、こんなに人が集まる行事になるとは思わなかったのう」

不意に横から声が聞こえた。

年老いたトレーナーの独り言。哀愁に満ちた声だった。

その声にキングヘイローが反応する。

「そんなに厳しい時代だったんですの？」

坂戸トレーナーがこぼした声。丁度良い機会と彼の人となりを探ることにする。

普段はマヤノトップガンが大はしやぎしているので、会話のペースを作りづらい。

別にそれはそれで悪くないが話題はなにかと脱線しがちだ。

しかし今の少女は現在、ウイニングライブ中。トレーナーとサシで話すには絶好の機会だった。

「ん？ ……まあ、そうじゃのう」

少女の言葉に一度黙るトレーナー。いつも通り、慎重に考えているのだと察せられ

た。

一度、言葉を区切った坂戸は思案気な表情で髭をなぞり、過去の記憶を掘り返す。

「ご飯一杯に沢庵たくあんと焼き魚」

「……どういう意味ですか？」

「ある日の一日の献立じゃよ。一食ではなく、一日に喰える量だ。当時はウマ娘に限らず、多くの者が腹を空かせてた時代だったからのう」

「戦後の頃、ということですか」

「うむ。東京大空襲で府中も焼野原になってしまつてな。物も少ないから昔は色々苦労したもんじゃ」

「物心ついた頃には広いだけの荒地という印象しかないがな」と苦笑いしながら語っている。

既に豊かなだった時代に生まれたキングヘイローにとつてはピンとこない。

ただ歴史自体は好きな方なので興味が沸いてしまう。

内容が内容だけに気を使いつつ、質問を続けることにした。

「そうすると、やはりその、トレセン学園も大変だったのでしょうか？」

「大変も何も焼け落ちてしまったからのう。餓死するウマ娘も続出しておつたし、皆日々を生きるのに必死だったよ。運び屋運び屋をするウマ娘も出るくらいだ」

「運び屋？」

「ウマ娘は荒廃した都市では物流の主力にもなっていたんじやよ。車と違って喰うものさえ貰えればいいしの。だから色々な場所で彼女たちが活躍していた。手紙を届ける者もいたから、ウマ娘専用の道路が出来ていたくらいじやよ。………中には農家と通じて物々交換した米を、闇市のブローカーに渡している者もおったから手放しに喜べない部分もあつたがな」

食料不足のせいもあつて当時、米は配給制だった。

下手に個人へ渡すと米の値段にも関わるため、違法だったということをぼんやりと思ひ出す。

当時を生きた人ならではの知識なのだろう。

興に乗ったのか、それとも会場の熱に当てられたからか、坂戸は当時を思い出すように饒舌な様子で語る。

「そんな腹が空いた者ばかりの時代で、食料に困っていたウマ娘たちの収入源がグッズ販売だったのじやよ」

「グッズ販売？　そういえば、会場では良く売っている光景をみますけど」

「それは昔の名残りみたいなものだの。俺の父もトレーナーだったんじやが空襲で仕事を失ったトレーナーとウマ娘たちが協力して、手作りのコースを作り、レースを開催し

ていた」

「……もしかして今のトレセン学園にある場所って」

「ああ、まんま手作りコースがあつた土地じゃよ」

「なるほど。とても勉強になりますわ」

「当時の新聞を調べれば分かるぞ。……まあ賭け事をするとな面倒ごとになるから、屋台で稼いだり、裁縫さいほうが得意なものはヌイグルミを作つたりと、今の前身になるようなことをやっていたが、なかなか大変だつたわい。まあ周囲の住民もみんな支えあつたから、なんとか成り立っていたのかもしれんな。ウマ娘と聞くとすぐサービスを始める太っ腹な店主も多かつた——たまにやり過ぎて人間の客から、自分たちにも飯を寄越せと、冗談交じりにツッコみを受けていたよ」

「ああ、それで地域振興組合が出来ますのね」

納得したようにキンググヘイローは頷く。

やはり当時からウマ娘にサービスをする店があつたのだろう。

シンボリルドルフとした会話を思い出し、知識が掘り起こされる。

その時代なら稼ぐためにウマ娘を集めようとする店主が出てきても仕方ないのかもしれない。

そう思っていた彼女だったが坂戸はというと、その発言にきよとんとしていた。

「……もしかしてウマ娘地域振興組合のことか?」

「? ええ、そうだと思っただけです。確か、ウマ娘に対する過剰なサービス合戦で地域経済が悪くなったと」

「——はっはっはっはっは! なるほど、なるほど」

「え、え、なんですか?」

突如として坂戸が大笑いしながら自分の膝を叩く。

おかしくてたまらないといった様子だ。

余りに可笑しかったのか、目の端に涙まで見せている。

そのことにキングヘイローは困惑してしまいが、「すまんすまん」と顔を崩したまま坂戸。

少し待ってくれと言わんばかりに老トレーナーは皺だらけの手で制しながら、息を整えていた。

「そりゃ勘違いじゃよキングヘイロー。あれは本当にただの善意でやっていたサービスよ。サービス合戦は単純にウマ娘の飯を食べる姿が見たいというだけなの」

「……でも、少しでも稼がないといけない時代だったのでは?」

「——孫や息子を失った者が多かったからな」

「あ……」

少し悪いことを聞いてしまったらどうか。

逡巡するキングヘイローだったが坂戸は気にした様子はない。

「まあ、別にどうこう言うことはないわい。あれはそういう時代だった。ただまあ、残されたもんは子供——せめて若い者たちだけは一杯飯を食わせたい、ただそれだけの想いでやっていたというだけ。……孫に小遣いをやりたがる老人がいるじやろう？ そう
いう感じだ」

「そういう感じですか」

「うむ」

最後に雑とも言える適当なやり取りを挟む。

別に気を使わないでいいと、雰囲気です語っていた。

その後、話題は自然に打ち切られ、2人ともウイニングライブをのんびりと鑑賞する。ちらりと横顔を覗くが、もう話すことはないといった様子だった。

坂戸といくらかやり取りをしたことで、何となく彼の人物像が描けてきた。

(……)苦勞なさったトレーナー、という感じのようですわね)

チーム(レヴァアティ)は健康管理に優れているという話があった。

おそらく幼少期の苦勞から、ウマ娘に対しても過保護気味になってしまふのだろう。のびのびとした育成方針を掲げているのも納得できる。

本人は凡骨トレーナーと自身を卑下していたがキングヘイローはそんな彼に対し、信頼しても大丈夫そうだと考え始めていた。

とはいえチーム選びは慎重にするようにとのお達しもある。

(リギルか、レヴァティか。ゆっくり答えを出すようにと言われてますし) すぐに判断するわけにもいかない。

最善を尽くし、最高の決断をする。

キングヘイローはそう自身を納得させ、今後に想いを馳せていた。

気付くとライブも終了していたのか、人がまばらになり始めている。

坂戸も分かっていたのか周囲をキョロキョロしながらマヤノトツプガンを探しているようだった。

「ヘイローちゃん！ おじーちゃん！」

甘ったるい調子の声が響く。

どうやらいつもの元気娘がやってきたようだった。

踊ったばかりのせいか頬を紅潮させている。

しかしレース後なのに疲れた様子はない。

そんな少女に2人は穏やかに笑う。

「あら、賑やかな子が来ましたわね」

「ほっほっほ、まったくじゃわい」

「んー？」

2人の様子に首を傾げるマヤノトップガン。

人差し指を口に当てながら、少し悩んだあと、

「2人とも仲が良い感じ？」

「さて、分かりませんわね。普通な感じかしら」

「そうじゃのう、いつも通りという感じじゃら」

「むむむ、打ち解けている気がするっ。マヤノも混ぜて、混ぜてっ！」

歩き出す2人の間に割り込むようにマヤノが入ってくる。

傍から見ればさぞ微笑ましい光景になっているだろう。

いつものフレンドリーさと賑やかさが展開され、先ほどの湿っぽい空気は完全に霧散していた。

どのみちあまり続けても気分がよくなる話題でもない。

キングヘイローは先ほどのことを忘れるように声を挙げる。

「さて！ マヤノ先輩も勝ちましたし、祝勝パーティでもやりましょうか」

「ほう、それはいいのう」

「いいの!?　じゃあじゃあ、特上寿司が食べたいっ」

「なかなか良いチョイスね。では行きましょう」

「……儂の財布だということを忘れんでくれよ」

「足りなくなったら援助して差し上げますわよ」

ヒラヒラとブラックカードを振って見せる。

こういう祝い事なら使っても文句は言われないうらう。

昔は昔、今は今。気にしすぎても仕方ない。

努めて明るく振舞いながら彼女たちは歩き始めた。

栗毛を翻しながら早く行こうと騒ぐマヤノトツプガン。

それを呆れた様子でキングヘイローが見つめる。

さてこれから行こうか——と思った矢先、トレーナーの携帯がおもむろに鳴り響いた。

着信音なのか古めかしい演歌が流れる。

そのことに気付いた2人は立ち止まり、坂戸を見つめる。

水を差された気分だったが人数が多いチームヘレヴァテイ〜だ。

彼に連絡がくることも多いのは知っていたので、用事が済むまで待つことにした。

プガンだけで練習することが多かった。

一緒に走るメンバーが増える。

自分の周辺は更に賑やかになりそうだった。

☆

マヤノトップガンのレースから一週間ほど経ったある日のこと。

6月になり、梅雨特有のジメジメした湿気の多い日々が続いている。

授業が終わり、現在は昼休み。

しかしキングヘイローは教室で少しくだっていた。

「雨は多いし、湿気が多いし、更に暑いので都会は本当に面倒ですわね……」

雨は好きじゃないいうえに暑い日も苦手だった。

しかも元は北海道暮らしだったため、余計にちよつとした気温の上昇でも気が滅入る。

自慢のウマ耳もへたってしまった。

机に突っ伏しながら顔だけ、外の方に向けて眺めてみる。

一言でいえば曇天。厚い雲が府中の空を見事なまでに覆いつくしていた。

さりとして雨が降るかと思えば、たまに降ったり止んだりの繰り返し。

雨が長続きすれば多少は冷えるはずだが、中途半端に雨水が蒸発するため不快指数は上がりっぱなしだ。

微妙に不快な日々に、心がストレスという炎でじつくり炙^{あぶ}られているのを感じていたとき、横合いから声を掛けられた。

「キングヘイローは、梅雨が苦手みたいだねえ〜」

「むしろ好きな方が珍しいでしょう……セイウンスカイさん」

「まあ確かにここまで曇りだと嫌だねえ。たまには青空が見たいよ」
相変わらずゆるい口調で喋るのは近くの席にいたセイウンスカイ。

ライバルではあるが、雑談くらいなら日常的にしている。

会話相手であるセイウンスカイは、左の前髪には黄色い花のアクセサリーに、右のウマ耳には薄緑のカバーを付ける少々変わったファッションだ。

その自慢の耳も連日の湿度が高い日々には敵わなかったのか、困ったようにくの字に折れている。

ウマ娘の頭部の耳は意外とデリケートだ。

感情がストレートに反映されやすいのもそうだが、雨や砂が入るのを嫌う者も多い。

キングヘイローも普段から青い耳カバーで、そういったゴミが入らないようにしてい

たのだが。

「こんだけ湿気が多いと蒸れて仕方ありませんわ。まったく許可が降りるなら秋まで、避暑地にでも暮らしていたいわね」

「ほんとだねえ」

時折、耳カバーを外しながらパタパタと振る。

湿気を逃すにしては雑だが、やらないよりはマシだ。

昼食も既に取ったし、やることはない。

いや、探せばあるのだが、それをする気力がガッツリ削られているという方が正しいか。

「いい加減、晴れて欲しい……つて、あら？」

「——ん？ お、おおう、ちよつと雲がなくなってくれるねえ」

そんな願いが届いたのか、厚かったはずの雲の隙間から青空が見え隠れしていた。

席を立てて換気用に分け放たれた窓に近づくと、涼やかな風を感じる。

まだ湿度の高さはあるものの外ならが気持ちよさそうにも見える。

（そういえばレヴアティの拠点であるビルまでの屋外通路つて、屋根が付いてましたわね……ベンチも確かあったはず）

普段通っている通路はレヴアティの関係者以外はあまり通らない。

そして今は昼休みなので、ビルへ行くウマ娘は皆無のはず。

緑が生い茂る木々の下を屋根付きの通路が潜るようにして建っているため、意外と穴場なのだ。

席に戻ってカバンを探ると、暇つぶし用の本が一冊ある。

「どうしたのキングヘイロー」

「折角、晴れ間が見えてきたんですから、外で読書も良いと思ひましてね」

「また雨が降っても知らないよ〜?」

「ふふん♪ 絶好のポイントを知っているから平気ですわ。それでは」

セイウンスカイとの会話を早々に打ち切ると、さつそくとばかりに動き出す。

まだ午後の授業まで時間はたっぷりある。

清涼な風を受けながらする読書はさぞ気持ちよいだろう。

久しぶりに良い気分になれそうだと思ひながら、彼女は目的の場所へと歩き出した。

「なるほど、そういうこともあったのね」

雲の合間から日差しが降り注ぎ始めた昼の一時。

キングヘイローは気分よく読書に勤しんでいた。

木々がそよ風に揺らされ、葉音が囁くように騒ぐ場所はとても気持ち良い。

本は図書館から借りたトレセン学園の近代史。

過去にあった様々な出来事を取りまとめており、非常に興味深い内容だった。授業までの時間を気にしつつも次々とページをめくる。

中にはトレセン学園に限らず、過去に活躍したウマ娘などにも触れていた。そうして集中して読んでいたが、一度栞しおりを挟んで休憩する。

授業で勉強したこともあつて多少だが目に疲れを感じたからだ。

そのまま何気なしに周囲を見渡す。あたりに人気はない。

やはり自分の考えていた通り、良い穴場だと考える。

良い気分転換が出来ていると微笑んでいた。

「自然の中で読書……とても優雅で、有意義な時間の使い方ですね」

一度目を閉じ、目を休ませる。

新緑の匂いが漂っていて、とても安心できる空間だ。

そして息を吐いて目を空けると読書の続きをしようと再度、本を開いた——のだが。

「——っ！——っ」

「？ なにかしら？」

何処かで悲鳴みたいなものが聞こえた気がした。

しかし周囲を見ても誰もいない。

空耳かと思ひ、視線を落とそうとしたところ、

「勘弁してくださいっすよおー！」

「はっはあ！ それを決めんのは俺だあ！」

「……何をやっているのやら」

どうやら少女が二人——遠めなのだが小柄そうなウマ娘たちが走っている。

かけっこでもしているのだろうか。

「子供ね」と呟く。

自分が関わることはない。

適当に無視して本を読み進めるつもりだった。

しかし、

「うちは用事があるんで帰ってくださいってばあー！」

「おめー速えじゃねえか、ちよつと競争に付き合えよ！」

ピクンと耳が反応する。

静寂の中で他者が奏でる不協和音。眉間にシワが寄り始める。

「ひい……ひい……もうギブっす！ 無理っす！」

「限界超えろー！ そんなんじゃオリンピックに行けないぞー！」

「トレーナーでもないウマ娘に言われても知らないっすよー！」

ピク、ピクン。

幼い子特有の甲高い声が響き渡る。普段ならまだ許せる範囲。マヤノトツプガンのような友人なら別にいい。

しかし特に親しいわけでもない人物が、喚き散らしている場合を許せるほど寛容でもない。

ただ突風みたいなものだし、もう少し待てば他所へ行つてくれるかもしれないと我慢する。

「マジでリームーつす！ シースーつす！」

「無理でも寿司でもねえぜ！ オラオラ、ダツシユしやがれえ!!」

「誰か助けてくれーつす！」

「ヒヤツハー！ 誰も助けなんてこないぜ！」

「ぎゃああああ、追っかけてこないでー！」

ブチン、と何処か切れる音がした。

堪忍袋の緒が切れるという表現があるなら、まさにそれがキレた瞬間だろう。

近くにあった円形の道をハムスターよろしく延々を走って騒がれたのだから、キングヘイローにとっては堪らない。

無言で立ち上がる。

元々ストレス解消も兼ねて読書していたのに、散々邪魔されたのだ。

最近の不快な日々も重なっていたせいかなキングヘイローはかなり気が立っていた。当の騒音をまき散らす、二人に向かって叫ぶ。

「その騒音製造機!!」

「ひゃあ、ごめんなさいっすー!」

「おわ!? いきなり大声出すなよっ」

騒ぎの原因である首謀者を睨みつける。

一人は前髪で両目を隠した少女——青いゴーグルを付けていてかなり小柄だった。キングヘイローと同じ茶褐色の鹿毛。ロングヘアーで綺麗に切り揃えられた姫カット。体格はマヤノトップガンより更に小さい。

追いかけられていたのか、涙目で頭を押さえている

もう一人もなかなか小柄だ。そちらはマヤノトップガンと同じか少し上くらいだろうか。

黒髪で同じくロングヘアーの少女。ただ髪は乱暴に後ろで結んでおり、ほつき帯みたくなっていた。

見るからに小生意気そうな雰囲気を放っている。

一度はキングヘイローの怒声に引いていたようだが、落ち着いたのか反論してくる。

「どこのクラスか知らねーけど——」

「黙りなさい」

反論などいらぬとばかりにシャットアウトする。

この手合いは会話させると面倒だ。

さっさと終わらせた方がいい。

「だから——」

「反論は、ハイかナムかハウダかのいずれかだけ受け付けるわ」

「それ全部ハイじゃねーか!」

「あら、アラビア語や台湾華語も知っているのね。まあそれはどうでもいいのだけど、私は静かに読書していたいから、さっさと帰ってくれないかしら」

「てめえなあ」

「——」

「——っ!」

無言の睨み合いが続く。

後ろでは状況が見えない目隠れの少女がオロオロと二人を交互に見ている。

そんな膠着した状態がずっと続くかと思われたが、最初に折れたのは黒髪のウマ娘の方だった。

ちっ、と舌打ちをすると目を逸らす。

「けっ、興が冷めちまったわ。あばよ」

つまらないとばかりに手を振りながら、片手はポケットに突っ込んで去っていく。

そして視界から消えてなくなるまで睨みつけた後、大きく溜息をついた。

「はあっ……とんだ昼休みでしたわ」

揉め事は好きじゃないが、つい怒ってしまった。

しかし校内であれほど騒がしくされたら注意の一つもしないといけないだろう。

人気がないとはいえ、普通の人間だって通行する道だ。

疾走したウマ娘と衝突すれば、両者ともにタダでは済まない。

間違ったことを言ったつもりはなかった。

とはいえ、完全に読書をする空気も消え去っている。

もう教室に戻った方がいいだろう。

そう考えながらキングヘイローは本を片手に去ろうとしたのだが、くいつと袖を引っ張られる。

「あ、あのー！」

「……なに？」

「あ、ありがとうございます！ お姉さん凄いですね」

頭を下げてお礼を言う少女。

ただキングヘイローは難しい顔をしながら、相手にも注意することにする。

散々大騒ぎしていた片方は彼女なのだから。

「別に。それより貴女も貴女よ」

「え、何がっすか？」

「その様子だとそこら中を走り回っていたんでしよう？ 他人とぶつかったらどうするのよ。相手にも迷惑が掛かってしまうわよ」

「そ、それは本当に申し訳ないっす……ただ、あの子、笑顔で追っかけてくるし、めっちゃ怖いからどうしても逃げたくて」

オドオドとした様子だったが、本当に申し訳なさそうに謝る少女。

小さいながら礼儀はちゃんとしているようだった。

さすがにマヤノよりも更に小さい女の子を苛めるような言動を叩くのも気が引いてしまう。

仕方なく軽く息を吐いて、アドバイスをすることにした。

「いいこと？ 何で追われてたか知らないけど、ああいうのは調子に乗ると再現なく鼻が伸びていくものよ。今度出会ったら、適当に蹴っぽってでもして、天狗の鼻を折ってやりなさいな。反撃する姿勢を見せれば、あの手の輩なんてすぐ逃げていくでしょう」

昔、キングヘイローにやたらとちよっかいを掛けてきた男子の撃退方法を教える。

もちろん本気で蹴ると不味いので手加減は必要だが、痛い目を見ないと分からない子供というのは何処にでもいる。

生意気そうな少女だったが、似たようなタイプだろうと考えていた。

しかしアドバイスをした相手は驚いたように両手をぶんぶんと振る。

「え、えええ、それは無理っすよ！ あれゴールドのやべーやつっすから、むしろ関わりたくないレベルなんすよ！」

「ゴールドの………なに、その頭が悪そうな名称」

オーバーアクションを取りながら否定する青ゴールドの少女。

見た目は切り揃えた前髪にゴーグルが掛かっているという不思議な出で立ち。

内気そうにも見える風貌だが、口は達者なようだった。

そしてゴールドのヤバイ奴とは一体何なのか。

校内の噂についてはそこまで詳しくないので、聞いてみると相手はポツポツと話し始めた。

「……知らないんすか？ トレセン学園で、ゴールドって名前が付く連中にとんでもないやつが多いんすよ。例えばさっきのはステイゴールド——校内でやりたい放題の小さな暴君っす。その場の思い付きで、いろんな奴に絡んでいく札付きのワルっすよ」

「まあ、小さいけど確かに面倒そうな子ね。……まさか、それ以外にもいるの?」
かなり面倒そうなウマ娘だったが、そんなのが他にもいるとは思えない。

自分の周辺のクラスにはそんな問題児はいなかったはずだと思いつく。

しかしキンググヘイローの予想を裏切るかのように、目の前の少女が身振り手振りを交えながら話す。

「それがいるんすよ! 次にゴールドシチー。トレーナーの命令ガン無視で、群れるのが嫌いな孤高の狼。見てくれは尾花栗毛っていう金髪っぽい髪色の超美人さんなんすけど、言い寄ってきたやつを蹴り一発でノックアウトしまくつてるとの噂もあるつす。しかも必ずといっていいほど、遅刻するやつでついたあだ名が登校時間にちなんで『午前十時の女』!。朝帰りかよってやつつすよ!」

「それ卒業できる授業日数は取得できているのかしら……?」

トレセン学園も一端の教育機関なので授業がある。

当然、授業を受けなければいけない。

高校課程と大学課程が存在しており、希望者はエスカレーター式で大学課程へと進むことができる。

普通のウマ娘なら大学課程を経たあと卒業して何らかの仕事に就くのだが、サボっていては不可能だろう。

ただしレースの遠征などは公休扱いで、通常の学校に比べれば必要な授業日数は緩い。

ゴールドシチーという少女がどれだけサボってきたかは分からないが、キングヘイローの印象としてはギリギリだろうといったところだった。

目の前の青ゴグルの少女は、なぜかヒソヒソ話をするかのように小声になる。

いちいちアクションを取るのが好きな子なのかもしれない。

相手の身長が低いので、少し屈みながら聞く体勢を作る。

「それが奥さん。授業日数や単位はやばかったららしいんですけど、不思議な力が働いてなんとか大丈夫だったとか。それも含めてやべーやつす。そして最後にゴールドシツプ。個人的にはコイツが一番危険なやろーつすよ！」

「奥さんって……いえ、それより、そのゴールドシツプというウマ娘は何がやばいの？」
今までチームやレースのことばかり気にしていた。

しかし身近な危険があることも考えなくてはならない。

興味が沸いたというより、知っておいた方がいいと考えるようになっていた。

少女はバットでも振るような動作をする。

「そのゴールドシツプというウマ娘、かなり奇行が目立つらしくてトレーナーの指示が
無視は当たり前。なぜかルービックキューブを持って校内を徘徊するわ、特定の人物

に襲い掛かるわ、あげくの果てに河原の土手でハンマーを振り回してたとかいう超危険人物つす。絶対、関わらない方が身の為つす！」

「そ、それは確かに危ないわね……」

ルービツクキューブは別にどうでもいいが、ハンマーを持っているのはさすがにおかしい。

仮に校内で振り回していたら間違いなく刑事事件ものだ。

というより屋外で振り回しても良いものではない。

そんな人物が同じ学園に通っているかと思うと少し怖くなる。

しかし何か理由があるのかもしれない。

誤解である可能性もあるし、そうあつて欲しいとの思いから、もうちよつと聞いてみることにした。

「……ちなみにハンマーを振り回して何かしてたのかしら」

「詳細は不明つすけど、去つたあと土手にはハンマーで埋め込まれたらしい丸太が何本も発見されたとか。後になって『土手に丸太を埋め込まないでください』という意味不明な看板が立つたらしいつす」

「よく分かつたわ。確かにヤバい奴ね」

「はいつす、ちよーヤバい奴つす」

真顔のまま速攻で断言する。行動の意味が理解できない。

キングヘイローのなかで、危険人物トップⅢと題して3名の名前をきっちり記憶しておく。

なぜそんなことをするのか理由が窺いしれないが、奇行に走るような人物の脳内を理解しろなどどだい無理な話だ。

1＋1＝2という風にキングヘイローは理路整然としないと気が収まらない。

会話してもおそらく分かり合うことは難しいだろう。

ただ変わり者が多い学園なのかもしれないが、命の危険があるのは洒落しゃれにならない。

(マヤノ先輩にも、それとなく教えておいてあげましょう)

静かにそう決意する。

好奇心が強い彼女だから危ないところに行ってしまう可能性もある。

他にもそういう噂があるウマ娘がいるのだろうか。

内心で気になってきたところ――

キーンコーンコーンコーン！

鳴り響くのは昼休み終了まで5分前だと告げる鐘の音。

顔を上げて校舎の方を見る。

十分クラスまで間に合う距離だが、急がないといけないうらう。

「授業が始まってしまいわね」

「急がないと不味いっすね。それじゃ、うちはこれにて失礼しまっす！」

「あんまり走らないように！」

「分かつてるっすよお姉さん！」

そんなことを言いながらあつという間に去っていく少女。

結局、あの少女は何だったのか分からずじまいだったが。

「まあ今気にすることでもないわね。さっさと戻りましょう」

キングヘイローも小走りに校舎へと戻っていく。

今日の夕方には新しいウマ娘がやってくると坂戸から連絡を受けていた。

面倒事には注意しよう——そんなことを考えながら午後の授業を受けるために戻っていった。

三人目のメンバーとキングヘイローの疑問

「——で、貴女がレヴァアティの新規メンバー、と」

「いやあ、どもつすどもつす。まさかお姉さんも同じチームなんて、世間も狭いつすねえ」

呆れた様子で腕を組んでいるキングヘイロー。

目の前には昼休みに出会った少女。

特徴的な青ゴーグルに、茶褐色の前髪がそれを覆い隠すようにしている。

耳には白と緑の縞々ラインが入ったウマ娘用の耳カバーを付けていた。

パツと見の姿は内気そうな出で立ちだが、それに反比例するかのような明るい口調。

人懐っこい容姿そのまんまのマヤノトップガンとは明るい雰囲気という共通点は

あつても、見た目は大きく異なっている。

一風変わったウマ娘という様子だった。

場所はチーム「レヴァアティ」の拠点である貸しビルの一階。

時間は今日の授業が終わって練習時間が始まるまで、まだ余裕があるといったところ。

新入りが来るとあつてキングヘイローは早めにビルへ訪れていたが、坂戸とマヤノトップガンはまだ来ていない。

いつも通りの癖で、すぐ練習ができるように半袖とハーフパンツスタイルの体操着に着替え終えたところ、例の新入りが来てしまったという状況だった。

昼に遭遇した生徒が、今日から入部する予定の生徒と同一人物など出来過ぎている。

ただ偶然というのもおかしい気がしたキングヘイローが「もしかして」と声を漏らす。「確かあのあたりの道はレヴアティへ行く道以外は、あまり利用しないと考えると……」
「あ、お姉さん察しいいっすね！ 実は昼休み中にちよつと下見しようと思つていたんですよ。レヴアティってチームの活動場所が分かりづらいつすし」

案の定というべきか。

実際、当のキングヘイローもマヤノトップガンに誘導されなければ滅多に足を運ばない道。

初めてレヴアティに来たときも困惑するくらいだった。

「……やはりね。ということとは昼間に騒いでいたのも」

「たぶんお察しの通り。道中で例のゴルドのやべーやつに補足されたせいで、逃げ回つてたというオチつす」

チームヘレヴアティへの道はちゃんとした道はあるものの特徴的な施設があまりな

い。

草木があるばかりなので、自然と使用するのは関係者に絞りやすかった。

たまに業者が利用する場合はあるものの、昼に活動する企業の多くは昼食にあたる時間のため、時間带的にもやはり利用するものは少ないだろう。

そのことを知っていたキングヘイローが静かに読書をしていたところ、自分が入部する予定のチームを下見するために来ていた少女が、ステイゴールドに絡まれて騒ぎになったという図だ。

種を明かせば偶然性が強いとはいえ、なるほど筋は通ると納得する。

青ゴーグルの少女は首を傾けて顔を覆っている前髪の隙間から、ニカツと笑顔を浮かべて握手を求めてくる。

「まあそんなわけで、今日からよろしくっす!」

「ええ、よろしくお願ひしますわ——私はキングヘイローよ。長く感じたらヘイローと呼ぶといいわ。貴女の名前は?」

それを握り返しながらキングヘイローは名前を名乗った。

それに相手も応じる。

「うちの名前はツインターボっす! これからよろしくっ。でも怖いのは苦手なんで、ご指導ご鞭撻はほどほどでお願いするっす」

「それはトレーナーの領分だから直接お願いすることね」

人差し指を口元に当てながら苦笑する。

ツインターボと名乗った少女は相変わらずオーバーアクション気味にコツンと自分の頭を叩きながら、「あちやくそれもそつすね!」と笑う。

マヤノトップガンといい、目の前の少女といいやたら明るいウマ娘に縁があるようだった。

トレーニングなどはどのみちトレーナーが来なくては始まらない。

そして当の坂戸トレーナーは、他のスタッフと会議をした後でやってくる。

普通ならそれまでは事前に渡されたメニューをこなしておけば良かったのだが、新しい子が来るという予定の関係で、今日は全員が集まったあとに細々とした連絡事項が渡される予定だった。

もう一人のメンバーであるマヤノトップガンは当直とのことで、遅くなるという話も聞いている。

しばらくはツインターボと一緒にのんびり待つしかなかった。

現在はいつものビル一階フロアの隅っこにある休憩所にくつろいでいた。

「……そういえば、最初に会ったときから疑問があったのだけけど」

無言で待つても仕方ない。

しかしお互い何も知らないので話題も提供しにくい。

そんな空気のなか、キングヘイローはちよつとした疑問があつたので、この際だから聞いてみることにした。

「? なんすか? 気になることは遠慮なくズババーつと言つてもらえると助かるっす」

「では遠慮なく言わせてもらおうと——その『つす!』つて口調は素なのかしら?」

最初に出会つた時から不思議だつた。

後輩っぽい口調といえどそれまでなのだが、日常でそこまで強調する人もいるかというとなない。

別に他人の口調をどうこう言える立場ではないのだが、やたらと『つすつす!』連呼されるのをキングヘイローは地味に気になつていた。

その言葉にツインターボは両手を頭の後ろに組んだままあつけらかなとした様子で、
「あーそれはうちが後輩キャラをウリにしているからつすね。つまりワザとつす! す
!」

「キャラつて……なんだかあつさり和白状しましたわね」

「別にそれほど隠しているわけじゃないっすけどね。ただまあお姉さんみたいに火の玉

ストレートで聞く人も珍しいっすね。普通はそういうキャラなのかなーって流してくれるっすし」

キャラ作りの一環であるとあっさり話すツインターボに、キングヘイローは呆れ気味だ。

ただ気になるのは、なぜそんなことをしているのかということ。

「普通に話してもいいのではなくて？ 同じチームだし、変に隠し事しなくても大丈夫よ」

「ん〜……そういうのとも、ちょっと違うといいますか。ちょっと聞きたいんですけど、お姉さんのうちの見てくれてどう思うっすか？」

「見てくれといいますが……」

何が言いたいのかイマイチ要領を得ない。

目の前の少女——ツインターボの特徴といえば、青いゴーグルと長い前髪でそれを覆うように伸ばしているロングヘア。ただパツと見の素顔は純朴そうな少女だ。

美人顔のキングヘイローと子供らしさと愛らしさが同居するマヤノトップガンと比較しても遜色ない美少女。

口さえ開かなければ清楚なお嬢様としても通るものだろう。

残りの特徴といえば、マヤノトップガン以上に低い——おそらく130cm台である

うかなり小柄な体格。小学生の高学年でも、ここまでの低身長はなかなかいない。

観光地なら子供料金で通つても、間違いなく誰も文句を言えないレベルだ。

ただ体格などはデリケート話題なので、分かりやすい方から聞いてみることにした。

「そうね、青いゴーグルとかかしら。日常的に着用する子は珍しいと思うけれど」

「おつとそつちにいったつすか。これに関してはレース用と普段使い用の両面つすね。

一挙兩得、一石二鳥、二兎を追う者は一兎をも得ずつす」

「言いたいことは分かるけど、最後の諺は間違いよ」

「あれまつす」

立て板に水と言わんばかりにペラペラと喋るツインターボ。

キングヘイローの指摘にも、気にした様子はなくおどけた調子でゴーグルをピンとはじく。

「ゴーグルは今現在もずっと着用中だ。」

「蒸れないのかな？」という疑問も沸いているが、そこら辺まで指摘しても仕方がない。とりあえずと続きを聞いてみる。

「とりあえずレースは分かるけど、普段もそのゴーグルつて必要なのかしら？」

「うゝんなんと言つたら良いつすかねえ……。不肖、このツインターボ——実はレースが大の苦手なんすよ」

「そうなの？ 社交的だし、むしろ目立つことが好きなようにも見えるけど」

「ウイニングライブでわーきゃーするのは好きっすよ。観客もツイーターボのことも見ながら笑ったり、笑顔で声援を送ってくれるので好きっす。……ただ、それ以外の要因がありましたってねえ」

「要因？」

「試合前の他のウマ娘たちの視線っすよ。こう闘志メラメラで『殺つてやんぜ！』みたいな空気がちよー苦手なんす。針のムシロ状態で、あれだけはムーリーっす。しまいには普段のウマ娘の視線も気になってしまうんで、普段から前髪を伸ばしてゴーグルも付けて視界を狭めるようにしてるんすよ。ものもらいを防ぐ意味もあるっすけど」

肩を両手で抱くような仕草をしながら身震いをする真似をしていた。

レースを実際に体験していないキングヘイローにとつてはあまりピンとこない。

他人の視線は集めたい性分なので尚のことだった。

マヤノトップガンとの併せトレニングのような感覚だったら、むしろ闘志が湧いてくるだろう。

「その感覚は正直よく分からないけど、そういう方もいますのね………ん？」

「どうしたんすか？」

「いえ、ふと疑問が……ちよつと待って。うん、少しだけ待って頂戴」

頭に手を当て深く考える。

何か大きな見落としがある——それも割とつい最近にも遭遇した出来事。

最初は喉に小骨が刺さったような、何とも腑に落ちない違和感だった。

当たり前のようにツインターボとレースの話をしているという事実疑問が大きくなる。

相手は小学生並みの小さい女の子。

そんな相手が普通にレースについて語っているということとは。

「あ、あのつかぬ事をお聞きしてよろしいですか？」

「どうしたんすかお姉さん。そんな震えた指でうちを指して」

「……………もしかしなくても先輩じゃありませんの」

「あれ？ 分かってて接してたんじやないっすか？」

「ああ……………またこのパターンですか……………」

ズーンという効果音が付きそうなテールに突っ伏してしまう。

マヤノに続いて、またしても年下に見せかけた先輩の登場だ。

ついでにお姉さん呼びも一緒。

いや、違和感は確かにあったとキングヘイローは思い直す。

問題があったならともかく普通に円満解決でのチームの移籍。入ってすぐ移動した

い 新入生なんて、あまりいないだろう。

普通に考えればチームに入ってそれなりに経ってから移籍しようと考えてははずだ。

そのことに思い至らず、何となく下級生に対して接するような態度で話していた事実
に恥ずかしくなってくる。

「ど、どうしたつすか!?! いきなりテーブルに突っ伏して平気つすか、体調大丈夫つすか
!?!」

「い、いえ別に。ただてつきり後輩か何かかなと思つて接していたので……申し訳あり
ませんわ」

「あーそういうことつすか。別に良いというか、むしろ後輩キャラを前面に推している
んで先輩扱いされると違和感あるんすよねえ」

「しかし——」

「気にしない方がいいつす。というか、ツッコんで欲しかったのは、この低身長のことの
方つすし」

そう言いながらツインターボはぺしつと自分の頭を叩く。

彼女からするとそういうった関係はあまり気にしないのかもしれない。

マヤノトップガンといいフレンドリーな先輩ばかりだった。

ただキングヘイローからすると母親の教育もあり、上下関係はきちつとすべきという

考えが念頭にあるのだが、どうにも先輩にあたる方々が軒並みそれを気にしない。

(どう対応するかは今後の課題にするしかありませんわね……)

言葉はもつともらしいが結局のところ問題の棚上げだ。

しばらく接しながら臨機応変に対応するしかない。

そう考えつつ、彼女が言った低身長について聞いてみる。

「それで、その……身長が低いことに何か問題があるんですか？」

「いやあく別にデリケートな話題ってわけでもないんで、気にしなくていいですよ。ただこんなチビツ子ななりなんで、先輩や同年代からやたらとマスコツト的な扱いをされるのがあって」

「ええ」

「それでうちも別に子供扱いするなーみたいなの反発するキャラじゃない。なら後輩っぽい振る舞いした方が軋轢あつれきもないし、先のゴルドみたいな厄介事に巻き込まれても割と庇って貰えるわけで、損が無いわけっす」

「ああ……なるほど、得心いきましたわ。確かにそれなら分かります」

ツインターボなりの処世術ということなのだろう。

納得いったようにキングヘイローは頷く。

先輩ながら小柄な体格のマヤノトップガンも他のウマ娘たちやファンのウケが良い

という。

本人の社交性やプライドも関係するが、気にしない質なら反発しない方が楽というのも納得できる。

また小学生みたいな姿の体格的に不利であろう少女が、精一杯頑張つてレースを駆け抜ける姿は、弱い者が努力するという王道ストーリーにもなっており悪くない。

(日頃からそういう後輩気質な態度を取っているなら、肩肘を張るような対応は苦手なのかもしれないわね)

やはり納得がいくのは良いものだ。

心に変なしこりが残らなくていい。

河原で丸太を埋め込むような理解できない行動をするタイプと違って、気兼ねなく接することができる。

昼間の噂話を思い出しながら、うんうんと頷いているとツイインターボが「それに」と話す。

「……同部屋の子も後輩言葉が可愛いって褒めてくれるっすからね。止める理由がないっす」

「? まあ同じ部屋の方もいいというなら、尚のことということですね。とりあえず普通に接するようにさせて貰いますわ」

「それでお願ひするつす、ヘイローお姉さん」

「……頼みますから、その呼び方だけは止めてくださいまし」

「えー、お姉さんオーラぶんぶんなのにつす」

若干引つ掛かるものがあつたものの、お姉さん呼び阻止の方が重要だったのでキツチリ釘を差す。

先輩から姉呼ばわりなど変な噂が立つたら溜まつたものではない。

マヤノトップガンといい、なぜそうまでして呼びたがるのか分からない。

少し肩を下げながら溜息を吐いていると、入り口から底抜けに明るい声が響いてきた。

「やつと終わったよおー当直。ヘイローちゃんいつる……て、あれっ?」

「どうやらマヤノ先輩が来たようですわね」

「あつ、もしかして新しい子!」

正面玄関から入ってきたマヤノトップガンは目ざとく見慣れない来訪者を見つける。

喜色を帯びた声を上げながら、いつもの俊敏な動きで一気にキングヘイローたちがいる休憩場所まで一息に詰め寄つた。

傍目からは黄褐色の栗毛の残像が左右に動いたと思つたら、すぐ目の前にニッコリ笑顔で立っている状態だ。

梅雨の匂いがくつついてきたのか、ふわりと草木の匂いが後を引いた。

相手の不思議な行動にはさしものツインターボも困惑気味だ。

そうして一周し終わった彼女は正面から、新しい入部者の顔を覗くと。

「わざと後輩っぽい振る舞いしてる？ 演技？」

「ちよいと奥さん、この方いきなり見破ってきてるんすけど、どういうことですか!？」

「だからなぜ奥さんなのかしら……」

あつさりとツインターボの後輩キャラを見破ってくるマヤノトップガンに驚愕していた。

ただ、どういうことと言われても説明しようがない。

おそらく彼女の嗅覚が何かを察知したのだろう。

あるいは天然キャラゆえに人工的な、演技臭さでも感じ取ったか。

「まあ、マヤノ先輩はマヤノ先輩だからとしか言えないわね」

「マジっすか。恐るべしマヤノ先輩っす」

「先輩ってツインターボちゃんの方が先輩さんだよね？」

「更に見抜かれてるっす!」

「ちよ、ちよと待ってください。ツインターボ先輩ってマヤノ先輩の更に上なの？」

「うん。だってシニアクラスのレースで見たことあるし、マヤノたちはジュニアクラス

だから確実に上だよおー？」

「至って普通の理由だったつす、ガツデム！」

マヤノのもっともらしい指摘にオーバーアクションで驚くツインターボ。

キングヘイローはキングヘイローで、小学生染みた姿の新入りが自分たちより更に上の先輩であるという事実には少し引いていた。

トレセン学園には大別して二つのクラス——ジュニアクラスとシニアクラスがある。

ジュニアクラスは入学してからトレーニングを重ね、一番上の歳になると東京優駿——と日本ダービーや菊花賞などのレースに出走できる。

年齢制限があるため、一生に一度しか挑戦できない重要なレースだ。

対してシニアクラスは、そのジュニアクラスが行うクラシック戦線のあと、自動的に上がるクラス。

ダービーなどのジュニアクラス限定戦でレースはできないが、天皇賞などの別の格式あるレースに出走できるようになる。

ツインターボがシニアクラスということは、キングヘイローにとっては最低でも歳が2つ以上離れているということも意味していた。

また教育課程も変わってくる。

「ということはツインターボ先輩は大学課程を履修中ということですか？」

ジュニアクラスを終えれば高卒扱いとなる。

そしてシニアクラスになれば大学生扱いとなり、それぞれ専門の分野を習うことができる。

ただしキッチンと単位を取らないと卒業はできず、また単位取得の難易度は比較的高い。

入試さえ通れば楽と言われる日本の大学と異なり、入ってからが難しいと言われるアメリカの大学がモデルケースとされているのが大きかった。

入学時期がバラバラだったり、長期間大学を離れることも良しとする気風も同様だ。そんなトレセン学園での大学課程。ツインターボは笑顔で答える。

「そつすよ。うちは医療学科を専攻してゐるつす。将来は見た目、小学生ロリ女医としてメスを振りまわすつすよ！」

「それを実際にやったら将来着る服は白衣じゃなくて、縞々の囚人服になりますわよ」
まるで殺陣たてを行うかのように振り回す動作をするツインターボに突っ込みを入れる。

それ以前にサイズが合う白衣があるのかすら疑問だ。
特注すればいいだけだがキングヘイローの頭の中では、白衣を引きずりながら歩く姿が目につく。

入院しているお爺さん、お婆さんから飴玉を貰っている光景が容易に想像できて苦

笑する。

「その目は分かっているっすよー、お医者さんごっこでもするのかって言いたいんすね！」
「さすがにそこまで考えていませんわよ……：そういうえばマヤノ先輩は大学課程はどうされるんですか？」

「ん、マヤノのこと？ どうしよっかなあ」

「露骨に話題転換してくるっすねえ……」

「はてさて勘繰りすぎだと思えますわね」

「じとーっす」

ジト目のツイインターボを余裕の表情で流しながらマヤノトップガンの方に話題を振る。

女三人寄れば姦しいとはまさにこのことか。

初対面ではあるが人懐っこい少女が2人に、話の舵を切るのが得意な1人とあつて話に花が咲いていた。

悩んだ素振りを見せたマヤノトップガンだったが。

「うーんやっぱアイドル学科専攻かなあー。歌って踊るのが好きだしっ♪」

「ウイニングライブ中心の課程っすね。トレセン学園やレース関連の学科と二分する人氣課程っす。お姉さんはどうなんすか？」

「だからお姉さんは止めてくださいと……まったく。そう……そう、ですわね。私は――」

ツインターボから投げかけられた質問。

すぐ答えることができるはずなのに。

――私は何を目指しているのだろうか？

ふとした疑問が彼女の口の動きを止めていた。

まるで死角から殴られたような錯覚を覚える。

レースに勝利してキングヘイローの名を知らしめる――それは絶対条件。

しかしその後は？

何になりたいのか、何者になりたいのか。

レースだけを見据えて生きてきたキングヘイロー。

(私は……私は?)

自信を持って、胸を張って、言えるはずだ。

何事にも全力で取り込んできたのだから、選択肢は多く持っている。

ずっと努力し続けてきたのだから。

しかし答えることができない。

なぜか気安く答えを出してはいけない気がした。

同時にハッキリとした答えは既にあつた気がした。

——そうだ、あのときの。マヤノトップガンと走つた光景にこそ意味がある。もう自分の行くべき道筋は知っているはず。

突如として答えに詰まつた彼女に相對する二人の少女は不思議そうな顔を浮かべる。

その感情のままキングヘイローが口を開こうとしたとき、

「済まんのを、今来たぞー！ 新入りさんは来ておるかのう」

「あ……」

「あ、はいっす！ ツインターボ只今参上っす！」

「マヤノもいるよおー！」

「……………全員いますわよ、トレーナー」

遅れてやってきた坂戸の登場でそれも霧散してしまふ。

他の二人も元々雑談の延長だったのだろう、話はそこで終わった。

キングヘイローもいつもの様子に戻り、頭を軽く振つたあとトレーナーの元へと歩いていく。

胸に溜まるもどかしさを感じながらも、彼女は持ち前の強い意志で、はつきりとしな
い感情を有耶無耶にする。

『レースに勝利することこそ絶対』

そう愚直に信じ続けてやまない理由。
まるでしがみ付くような想いを内心に残したままだった。

チーム〈レヴァティ〉始動

「さて、一通り自己紹介は済んだわけじゃが」

初老の男性——坂戸トレーナーはいくつかの資料を捲る。

目の前には3人のウマ娘が直立した状態で立っていた。

キングヘイロー、マヤノトップガン、そしてツインターボ。

新たなメンバーを加えて坂戸率いるチーム〈レヴァティ〉の本格始動といったところだ。

自己紹介は既に終わっている。

終始にこやかな坂戸に騒がしいマヤノとツインターボ。

それを暴走しないようにキングヘイローが抑えたり、ツッコミを入れただけの雑談会場になってしまっていたが。

そして挨拶も終わり、坂戸から連絡事項が言い渡される。

「まずは——ツインターボ」

「はいっすー!」

「今年は学業と私事に専念したいということでもいいんじゃない」

「それでお願ひするつす。もちろんトレーニングには出るつすけど、大学課程も色々難しいんで一年目は単位取得に専念しておきたいつす。大逃げつす！ それに今年は外せない用事もあるので……」

「……そうか。ふむ……なら、レースは組まないようにして、時間も空けるように調整しておこう。レヴァティはのんびりゆつくりが基本じゃからな」

そういつて穏やかにツインターボへと語りかける坂戸。

その言葉にツインターボは申し訳なきように頭を軽く下げる。

なにかしら事情があるようにも見えた。

横目にそれを観察していたキングハイローだったが。

(……あまり首を突っ込まない方が良さそうね)

短期間ではあるが彼女の人柄は把握できた。

お気楽なお調子者といった風の彼女だが、先ほどと違って静かだった。

用事というものがどんなものかは知れないが、事情があるのだろう。

坂戸も彼女の用事というものが何なのかを理解している様子。

彼がいつも以上に言葉を選んで喋っていることも考えると、これこそ正にデリケートな話題だ。

平時は気になる話題なら飛びつきそうなマヤノトップガンが無反応なのも考えると、

気にしないの方がいいと判断した。

トレーナーはツインタローボとの会話を終わるとキングヘイローへと向き直る。

「次は……キングヘイロー」

「はいっ!」

「まず健康診断の結果とスポーツ管理栄養士からウマ娘仕様に調整した献立が届いた。アレルギーもないというし、好き嫌いも無視して三食全部を任せるとのことだが、ええんじやな?」

「はい、それをお願いしますわ。勝利のために手は抜かない主義なので」

トレセン学園の食事は基本的に三食バイキング形式だ。

普通の学園と違ってかなり太っ腹だったが、学園側もウマ娘たちのグッズ販売などで儲けている。

そういった利益は学園の維持や運営、そして食事などに還元されていた。

また食べる量については基本的に生徒たちの自由にさせている。

ただチームヘレヴァアティの特色として管理栄養士が考案した献立の食事を用意して貰えるというものがあつた。

他チームでも実施しているとあるが、健康管理を第一とするチームとあつて外せない要因なのだろう。

しかし、そこは年頃のウマ娘。中には好きなものを食べていたいという子もいる。

あくまで希望制なので好きに食べたい子は一、二食だけ献立を頼んだりなど、各ウマ娘たちの自由にさせていた。

ただキングヘイローからすると実家では、出された食事をキッチンと食べるだけだったので、むしろ献立を考えてくれる方が楽という考えもある。

勝利に執着するなら食事も気にしなくてはならないし、ならばプロの栄養士が考えた食事を頂くのが合理的。

彼女からすると断る理由がなかった。

「ふむ、分かった。では献立は食堂の者に連絡して作るようにしてもらおう。さて、それでは健康診断についてなんじやが」

「……はい」

坂戸が幾分か眉間にシワを寄せながら資料を読んでいる。

どこか悪いところでもあったのだろうか。

初日のカフェインによる寝不足という失態はあったものの、それ以降で体調管理にミスはない。

我ながらはしやぎすぎたとキングヘイローは自省していた。

ただ常に自分の体調が完璧だと把握できるわけではない。

何かしら隠れた怪我や病気の可能性が否定できないだけに、健康診断の結果を見ている坂戸の様子に不安を覚えてくる。

「ふくくくむ……うん、うん、なるほど。いやしかし……でも、これなら……あるいは先に」

「あ、あの坂戸トレーナー、何か問題があったのでしょうか？」

「うむ？ ああ、済まん済まん。今後の予定も組み立てていたせいも、長く考えすぎたみたいなのう」

「こう言っただけですが、自分の健康診断の資料を片手に難しい顔をされると不安になりますわよ」

「そうだそうだ、おじーちゃん遅いぞおー」

「茶化さんでくれマヤノ。爺はゆつくり考じじいえんと物事が疎かになりがちなの。……それでキングヘイロー、結果に関してなんじゃが」

「……はい」

途中でマヤノの茶々が入ったものの、ゴクリと生唾を飲んで結果を待つ。

妙に神妙な坂戸の態度に、肩に力が入ってしまう。

もしかして重大な問題があったのか——そんなことが脳裏をよぎるが。

「——至って健康体じゃったよ」

「坂戸トレーナー、その勿体ぶった前振りをする癖は改善してくださりませんか!」

入部の時もそうだったが、なぜこのトレーナーは変に不安を煽るのか。

キングヘイローは脱力しながらがつくりと肩を落とす。

常に完璧な体調管理を心掛けているので、良かったといえれば良かったのだが心臓に悪かった。

氣勢を削がれた気分で次の言葉を待っていると相手が事情を話し始める。

「いや、済まんかったな。しかし正直なところ驚いているんじゃないよ」

「驚いている?」

「うむ」

坂戸の言葉に首を傾げる。

健康ということだが、そこまでおかしな結果なのだろうかと疑問に思う。

「僕のチームの方針ではな、まず負担の少ないトレーニングと健康管理でレースに十分耐えられる土台を作ることを一番に重視すべきという考えのもと指導しておる。レースは最悪、死亡事故が発生しかねない過酷なものじゃ。だからその発生確率を極力下げ、最悪事故が起きても軽傷になるよう、肉体を頑丈にしていく方針だ」

「理屈は分かりますわ。けれど話の流れを見るに私の健康状態に問題なかったと捉えているんですが……」

「うむ。だからこそ問題なさすぎるのが問題なんじゃよ」

「……すみませんぜんもんどう禅問答はさすがに習ってないので」

意味が分からないとキングヘイローは怪訝そうな表情になる。

さすがに坂戸も悪いと思ったのか、「済まん済まん」と頭を掻きながら弁明する。

「少々言い回しが悪かった。つまり骨密度などを始めとした土台がキツチリできておつたことに驚いておつたんじゃよ。レヴァティが実施しているトレーニングの第一段階を既にクリアできるだけの素地があることにな。……何か実家でやっておつたりするのかの」

「実家……ああ、そうですね」

坂戸の言わんとすることをやつと理解する。

トレセン学園へ入部する者の多くはトレーニングらしいトレーニングを積んでいない状態でやってくる人が多い。

中には自分なりに鍛えているウマ娘もいるだろうが、住んでいる環境によっては満足に走れない者だつて出てくる。

特にトレセン学園が近所のない都会などは、事故を防ぐためにウマ娘が走ることを制限する条例が存在している自治体もある。

そういつた能力の基礎が玉石混交のウマ娘たちの中で、キングヘイローは自分が恵ま

れた環境にあったことを思い出す。

「実家に私設のトレーニングコースがあつて、ゲート訓練など基本的な技術は既に習っていました。結果はそのせいかもしれないわね」

「ふうむ……もしや食事なども管理されていたりするのかなの」

「ええ、そうです。お母様——ブレーヴお母様が若いときに、体調管理などで苦勞なさつたということで、私に同じ目に遭わないうよう知り合いの栄養士の方をよく呼んでいたんです。プロが考えた献立が毎食だされていたので」

「なるほど、なるほど。……幼少期から、か」

一度言葉を区切る。坂戸はペンを片手に何かメモを取りながら難しい顔で思案していた。

悪いことではないと思うので、今後の予定でも立てているのだろう。

マヤノやツインターボは真面目な雰囲気を感じてか二人の様子を見ているだけだった。

再度、坂戸トレーナーが確認するように聞いてくる。

「……確かウイニングライブの振り付けなども完璧なんじゃやな？」

「もちろん。テレビで気軽に曲やダンスは見れますし、そちらは専門の方を呼んで幼い頃から作法を習っていたので完璧にこなせますわ」

「健康良し、土台良し。第一段階の馴致じゆんちも良し……うむ。これなら……いけるか。キングハイロー」

「はい」

「本来なら半年から一年間は、ゆっくり調整していく予定だったが変更じゃ。年内でのレースデビューを目指し、トレーニングは第二段階より開始する。マヤノとの併走トレーニングも積極的に行ってもらうが良いか？」

「第二段階……いえそれよりもレースデビューですか!？」

第二段階の内容の詳細は不明。

しかし大きくステツプアップしたということだけは何となく分かった。

更に今年からデビューできるのだという坂戸の言葉に思わず驚く。

まだ心の何処かでふんわりと、来年にでもなるのだろうと考えていたせいもある。

だが聞き間違いではない。事実、喜色を帯びた声が隣から聞こえてきた。

「うわー凄い凄いハイローちゃん! マヤノと一緒にトレーニングだあー!」

「マヤノ先輩も第二段階……トレニングをしてらっしゃるの?」

「うんっ♪ 一年くらいはゆっくり走ったり、ゲート練習とかばっかりだったけど、最近坂路とかプールとか色々やってるんだよっ」

マヤノトップガンの言から察するに基礎練習をみっちりこなしたということなのだ

ろう。

堅実な坂戸らしいとも言えた。

「レヴアティではウマ娘たちの状態に合わせて、第一段階から第三段階に分けてトレーニングを実施しておく。第一が基礎、第二は発展、第三は強化といったところじゃ。徐々に負荷を増やして丈夫に、そして強いウマ娘になるよう調整するといったところかの」

「そして私は第二段階からトレーニングを実施するということですね」

「うむ。第一を施す必要がないほど基礎が出来上がっておる。念のため経過は見ていくが……経験上、大丈夫だろうというのが儂の見解だな」

よし、と静かに拳を握りしめる。

将来のために様々な基礎をこなしてきた成果。他者よりも大きく前進できることに内心喜んでいた。

やはり努力はするべきだと気持ちを新たにしているキングヘイローを他所に、坂戸はマヤノトツプガンへと顔を向ける。

「そしてマヤノトツプガン」

「はーいー！」

「芝のレースがしたい、じゃったな？」

「うんつ。ヘイローちゃんと走ったときの感触がとても良かったし、一杯走りたいたいなあーって」

「ふむ……だったら良いレースがあるぞ。長いコースで観客も大勢来る舞台じゃ」「大勢？」

キングヘイローの右側にいたマヤノは首を傾げる。

釣られるようにトレードマークのツーサイドアップの髪が傾く。

坂戸は大きく頷くと、

「土台は完璧に仕上げた。芝適正もキングヘイローを抜き去った二の足からも潜在能力を伺わせるものがある。三冠ラストの栄光——秋の菊花賞に照準を絞るぞ！」

「お、おおー?!」

「菊花賞つすか!、いいつすね!」

「菊花賞……皐月賞、日本ダービーに続く最後の三冠ウマ娘にとって大一番であるGIですわね。しかし難しいAルートの方ですが大丈夫ですか?」

日本における三冠ウマ娘を決めるレース。

それは一生に一度しか挑むことができない栄冠だ。

その三冠には俗称だがA、Bに分けられる二種類の三冠があった。

一つはAルート——皐月賞、日本ダービー、菊花賞の三つを狙う三冠ウマ娘。

距離が長く、過酷なレースとなるこのルートは真の強者が集まる三冠とされ、一般的に三冠といえばこちらの方が格が上とされる。

記録にも『三冠ウマ娘』ときつちり残される栄誉だ。

何よりもこの三冠に含まれる日本ダービーに勝利することはウマ娘に限らず、トレナーが一生に一度は夢見る何物にも代えがたい栄光。

誰もが勝利を望んで止まない文字通り別格のGIだ。

そしてもう一つがブルー——桜花賞、オークス、秋華賞の三つのGIを勝利することと得られる三冠ウマ娘。

ただしこちらは距離が4000〜6000mほど短くなり、一般的にAルートの三冠と比べ、格が一段落ちると言われている。

記録には三レースの頭文字を取って『三冠ウマ娘(OOS)』という注釈が加えられる。

またAとB両方の内、合計三レースを優勝することで『変則三冠ウマ娘』と呼ばれるものもあった。

これらは名称は違うものの、それでも栄誉であることには違いない。

そうそう簡単に達成できる記録ではないため、どちらの三冠を取っても一定の名声は得られる。

ただ坂戸がなぜ難しい方を選ぶかだけは気になっていた。

「簡単な話じゃよ」

「簡単な話、ですか？」

「そうだ——ずっと努力してきたマヤノトップガンなら菊花賞に勝利できる可能性は十分にある。それを信じないでトレーナーを名乗れるか、ということだ」

「……失礼いたしました。当たり前前の質問でしたわね」

キングヘイローは頭を下げる。

確かに簡単な話だった。

困難な道か、簡単な道か。どちらを選ぶのかと聞かれれば、挑戦者なら迷う必要なんてない。

勝つつもりで戦うのは当たり前なのだ。

そして当のマヤノトップガンも、普段の無邪気な笑顔を引っ込める。

坂戸をじっと見つめ問いかけた。

「おじーちゃんは勝てるかと踏んでるんだよね？」

「……僕はG I ウマ娘を輩出したことはない。しかし、マヤノの才能なら十分に勝機はある、と踏んでおる。何より——」

普段の様子とそこまで変わらない。

しかし淡々とした口調ながら老人の声には少しだけ熱が帯びているようにも感じる。

それは彼なりの勝算があるということを表していた。

「いかな過酷であつても生き抜けるウマ娘を育てる——それがチームヘレヴァティじゃ。『強いウマ娘が勝つ』と言われる菊花賞なら十分に狙える。それにマヤノは地力があり、それは他のウマ娘たちと比べても決して劣らない。GI無しのレヴァティが奇襲を仕掛けるなら絶好のレース、勝機と見なくてなんとする」

ハッキリと坂戸は断言する。

勝てる戦いだ。勝機があるだと。

GIウマ娘を輩出できていなかったトレナーの言葉。

それを重いと見るか軽いと見るか、どちらかは一目瞭然だった。

普段の曖昧な表情はそこにはない。

決意を秘めた初老のトレナーに、マヤノは言葉を反芻するかのように目を瞑った。

彼女の内心は分からない。

ただ思うことは、

(……マヤノ先輩はやはり先輩、ですわね)

勝利を目指す立派なウマ娘。やるときはやるのだという意思がそこにはあつた。

マヤノトップガンは口角を上げながら満面の笑みを作る。

普段の無邪気な少女の顔ではない。猛禽類のような、獰猛さも窺える闘志だ。

「……そこまで期待されたら答えないわけにはいかないよねえー？ いいよ、マヤノ全力で頑張るっ！」

「気負いは禁物じゃぞ。まずは二週間後にあるロイヤル香港JCT、そして更に一カ月後にあるやまゆりステークスで重賞に出走できるだけのランクを上げる。あとは重賞勝利を狙いつつ、菊花賞の出走権をもぎ取る。そしてツインターボ、キングハイロー！」

「は、はいっすー！」

「はいっ」

気合の入った坂戸の声に少し戸惑いながらも答える二人。

初老のトレーナーは目を見開きながら告げる。

「菊花賞は3000mの過酷なレースを行わなくてはならない。そのためのトレーニングとして、併走トレーニングを行う。最初の1200mはツインターボとマヤノで併せ、そして続けて残りの1800mをキングハイローとマヤノで併走する。名付けてWロケットトレーニングじゃ！」

「……W併走トレーニングでよろしいのではなくて？」

「ツインターボ作戦も良いネーミングだと思うっすよ！」

「そこは……ほれ、気合を入れるためのノリみたいなもんじゃ」

思わずツッコミを入れてしまったキングハイローに、ノリで続くツインターボ。

予期せぬ指摘に珍しく坂戸が動揺する。

温和ながらも普段は落ち着いている人の困った表情を意外に思いつつも、ひとしきりみんなで笑う。

そんな一騒動が終わった後は、GI勝利を目指すための特訓を開始するために動くのだった。

☆

レヴァティの練習時間となった芝のコース。

以前と同じ観客席も付いている場所で一同が揃っていた。

坂戸は資料を見ながら話す。

「準備運動のあとはスローペースでコースを左回り、右回りに3周ずつ。そのあと流しながら左右のコーナー走を10本ずつに、あとはゲート練習を20本。身体が温まってきたら、大まかな流れを把握するためにWロケットトレーニングを手を抜いて実施する。ただマヤノの直近のレースは中京の芝2000mコースだから今日はあくまで動きを覚えるための練習みたいなものじゃ」

「「はー」」

「キングヘイローのレースに関して練習の仕上がり具合によるが、おおよそ10月あたりに出走予定と思っておいてくれ。距離は無難にマイル〜中距離あたりで様子見とあったところじゃ」

「分かりましたわ」

「儂は少し席を外す。先ほどの練習メニューが終わる時間になったら戻るの、練習だけ始めておいてくれ。終わっても儂が戻ってこなかったら小休止とする。キングヘイローが音頭を取ってやるように」

「私は後輩なんですが……」

困ったような表情を浮かべるキングヘイロー。

先輩がすべきなのではないかと言いたげだったが坂戸は苦笑いしながら、

「しかしまとめ役には向いておる。これから後輩が増えるかもしれんし、今のうちに慣れておく方がええ。何事も経験が大事だ」

「それでも腑に落ちませんが……はあ、まあ分かりましたわ。それがトレーナーのご指示とあれば——マヤノ先輩、ツインターボ先輩！ 行きますわよ！」

「はーい♪」

「はいっすー！」

腰に手を当てやれやれといった様子の少女。

ただ他者に指示するのが慣れていいのか、ハキハキとした口調でマヤノたちを先導しながら走っていく。

名家の令嬢とあってその姿は本人が思っている以上に様になっている。

マヤノトップガンは気合が入ると自分のことばかり考える傾向があり、ツイインターボはそもそも今日来たばかりなので頼みづらい。

スタツフに頼んでも良かったが、同じウマ娘が音頭を取ってくれる方が集団の動きは良くなる。

キングヘイローのような責任感を持って動いてくれる人材がいることに内心、感謝をしながら坂戸はトレセン学園へと歩き出した。

「さて、と。うちの子たちが頑張ってるんじや。儂は儂で動こうとするかのう」

トントンと腰を叩く。

若い頃と違って老いた身体は疲労も溜まりやすくなってしまった。

しかし60を超え、70も遠くないぽんこつでも頑張らねばならないという使命感も抱いている。

足取りはゆつくりのまま、坂戸は目的地へと目指すのだった。

そんな坂戸が目指したのはトレセン学園の一室。主に学園関係者の部屋が連なる区

域である。

白磁の廊下を歩いた先で、とある一室に目を向けるとゆっくりと扉を開く。

内部は机やパソコンが並び、壁際には過去の資料が納められている、青いファイルなどがズラリと並んでいた。

「ん？ ああ、坂戸さんか。お疲れ様です」

「お疲れ、穂田さん。そちらは今年どうかね？」

他チームのトレーナーと挨拶をしながら軽く雑談をする。

ここはトレーナーたちに与えられた部屋の一つだった。

チームを立ち上げた者には部室などトレセン学園から活動場所を与えられているが、そちらはウマ娘たちのスペースという意味合いが強い。

他チームとコースの使用時間の相談やトレセン学園に申請する遠征や訓練計画など、交渉や書類仕事もあるためトレーナー同士が近い場所にいる方が何かと便利だった。

坂戸と穂田と呼ばれたトレーナーがにこやかに会話する。

「うちは良い子が入ってきてくれましたよ。マイペースなウマ娘のようだけど素質は十分ある。来年のクラシック戦線が楽しみですわ」

「それは羨ましいばかりだのう。うちは目ぼしい子はおらんんだ」

キングヘイローたちを低く見積もっているわけではない。

軽いジャブのようなものだった。

しかし相手はニヤリと笑うと、

「はっはっは！　ご冗談を。昨今は精力的に動いているそうじゃないですか。聞きましたよ、キングヘイローの件。他チームが虎視眈々と狙っていた有力なウマ娘を、横からかつさらったとか」

「……耳が早いとう。しかしそれはうちの子が偶然、誘ったもんですから別にスカウトしたわけじゃない。それに当人に移籍はいつでもして良いと伝えておりますから、そちらに行く可能性もあるかもしれんよ。彼女も上昇志向が強いので、希望すればうちが止める術はないのでな」

「ほう——それは面白い話ですね」

一見穏やかな様子だが探り合いも忘れない。

ウマ娘が互いにライバル視するように、トレーナーも他チームの動向を注視している。

あまりドロドロした関係とまではいかないまでも、やはり自分のチームに所属しているウマ娘を勝たせたいのがトレーナー心理だった。

ただし、坂戸がもたらした情報は真実だが、全ては伝えていない。

キングヘイローが希望するならリギルだということ。

しかしそれは話さない。

一から十まで全て伝えるほど坂戸はお人好しではなかった。相手も全てを信じているわけではないだろう。

トレセン学園で長くトレーナー業をしている坂戸が、喰えない男だという話は周囲にも知れ渡っている。

領きながらも深く思考を巡らしている様子だった。

それも含めての駆け引きともいえた。

坂戸の話した事情を興味深く聞いていた穂田は、「そういえば」と声を漏らす。

「移籍といえばチーム〈ヘリギル〉で動きがあったそうですねよ」

「それは気になる話だのう。事情を聞いても？」

「……良い話も聞けましたし、少々お耳を拝借してもいいですか」

「もちろん」

先ほどの話のお礼なのか、穂田は快く受ける。

練習時間とあって室内に他トレーナーの姿はあまりいない。

しかし小声で話すということはそれなりに有力な情報なのだろう。

「——ジェニユインというウマ娘がいるじゃないですか」

「ふうむ、確か今年の皐月賞で一着、先日の日本ダービーで二着だったウマ娘か。リギル

所属の子だったと記憶にあるが、何かあったのかのう」

黒髪が美しいウマ娘だと聞いていた。

臆病との噂もあつたが、既にGⅠ勝利を果たしており、今年のトウインクルシリーズを特集する番組では、よく名前を聞くことが多くなっている。

そんな子に何かあつたのか。非常に興味を惹く内容だ。

「それが、どうも今後のレースの予定について東条ハナトレナーと揉めているそうなんですよ」

「……おハナさんか。しかし、それは毎年の風物詩みたいなどころもあるから分からんな。あの子は腕は良いし、ウマ娘の体調を常に気遣う良いトレナーだが、相手が意志を全て汲み取れるかというところでも難しいところでもある」

東条ハナ——トレナー間ではよく話題に挙がりやすい敏腕トレナーの一人だ。

女性で若いながらその手腕をいかに発揮し、学園最強とまで呼ばれるようになったチーム〈ヘリギル〉の名伯楽。

常に最善を尽くす人柄ではあるが、それ故に指導しているウマ娘と意見の喰い違いから衝突することも少なくない。

穂田は頭を掻きながら「確かに」と頷く。

「まあ強いウマ娘は総じてアクが強い傾向にありますし、チーム〈ヘリギル〉は自然と良い

子たちが集まってくるとなれば苦勞も絶えないでしょうなあ」

「それでも羨ましい限りだわい。レヴァアティも少しはおこぼれに与かりたいもんじゃ」

「そういつて、レヴァアティもウマ娘たちが自然に集まるチームでしょう。こつちからしたら羨望の眼差しですよ」

「分かってて言っているなら皮肉が強すぎるのう」

「おつとこりゃ失敬」

坂戸の苦笑いに相手も手のひらを縦に挙げながら軽く詫びる。

片や年間最多勝やGⅠ勝利の常連チーム。片や未勝利戦で勝つか負けるかを競うのが精一杯の弱小チーム。

虎の群れと羊の群れを比較されても困るといったところだ。

それでもウマ娘たちが集まるのは、さすが老舗チームといったところか。

脳内でリギルについてのメモを取りつつ締めくくる。

「揉めているとなると怪我か、あるいは出走予定のレースで意見の食い違い、というところかのう。長年チームを見てきたが、多くがそれで揉めることが多い。それに確か……サイレンススズカ、だったか。かなり独特な雰囲気を持つウマ娘と記憶しているが、そちらの扱いにも困っておるといふ噂じゃいな」

「ああ、そういえばそつちもありましたね。どちらもトラブルの末の移籍となるか分か

りませんが、秋のG I戦線もチーム同士の駆け引きが激しくなるかもしれませんね」
「うむ。さてと、仕事に戻りますかな」

そこで話は終わり、互いのデスクワークに戻る。

先ほどの話が本当かどうかは不明だが、噂話というのは広がりやすい。

女の子特有のネットワークを駆使すれば、レヴァティにも遠からず情報がもたらされるだろう。

何しろ人数だけが多いのだから。

時間が経てばおのずと真実が見えてくると考えながら書類をまとめて立ち上がり、そのまま部屋を出て歩き出す。

「はてさて、普段ならリギルについてはいつものことと流しても良いが、今回ばかりはレヴァティにも関係してくる。マヤノの実力はまだ周囲にさほど広まっておらんが……ふむ、奇襲すべきか、あるいは」

レースひとつとっても悩みが増えていくもの。

厄介だなど思いながらも、それを考える坂戸の顔はどこか笑顔だった。

マヤノと並び、他のメンバーたちのことも合わせて考える。

「ツインターボはうまく溶け込めそうじゃし、時間はまだある。とすると片づけるべき件は、キングヘイローの方か。どうにもマヤノと併せたとき以降のキレが鈍くなってい

る。原因がイマイチ掴めないが、一つ一つ問題点を修正していかねばならんな」

いくつかの出来事を思い出し、やるべきことを並べていきながらのんびり肩を回す。歳と共に硬くなっていく身体をほぐしながら、腕を組んでひと伸び。

必要な書類をまとめ終わり、雑事は済んだと判断した。

キングハイローたちももうじき渡したメニューが終わるだろう。

坂戸は温和な表情に戻ると、ゆつくりとした歩調で彼女たちが練習するコースへと戻っていった。

☆

坂戸がやり取りをしていた一方、キングハイローたちはというところ。

「レヴァティが就職斡旋もやっているチームって初耳なんですけど……それって大学側がするべき仕事でなくて？」

「いやでも、実際やってるっすよ」

「マヤノはよく分からないけど、お姉さんたちがよくやってくるのは聞いてるかも？」

「通りメニューが終わり、小休止の時間となっていた。」

三人とも体操服の出で立ちで芝の上に座っている。

足を開いて柔軟をしながら雑談タイムをしているなか、ツインターボがレヴァアティにやってきた理由を聞いたところ、意外な事実を知る羽目になったという流れだった。

むむむと眉間にシワを寄せながら口もとに手を当てるキングヘイロー。

不思議なチームと前から思っていたが、更に謎が増えた事実を考え込んでしまう。

そんな彼女にツインターボは「それに」と続ける。

「レヴァアティの入部特典も魅力的つす。ぶっちゃけアレがあるから、人がめっちゃ集まりやすいんすよ」

「入部特典……？ ああ、確か近所の温泉や銭湯スパの年間フリーパス券でしたっけ」

「そつす！ お肌の気になる年頃のウマ娘からしたら、超魅力的なご褒美つすよ！」

レヴァアティに入ったときに渡されたチケットを思い出す。

坂戸の説明では、疲労回復のために最低でも月1、2回は温泉に入るようにとされていた。

「トレーナーですし、ウマ娘の体調管理の一環なのだろうという印象しかなかったのだけれど」

「のんびりやらせるチームで、入部特典付き。更にいくらか就職の口利きもしてくれる——トレセン学園に入ったはいいいけど、頑張り過ぎない程度に学園を楽しみたい子はこぞって集まるということっすね」

「……レースでの勝利を目指す私からすると、それはちよつと眉を顰めひそたくなりますわね」

「そこは人それぞれ、ウマ娘もそれぞれです。誰しもレースだけを人生の目標にするわけでもないっすよ、お姉さん」

「お姉さんは余計だけど……まあ何となくカラクリは見えてきたわね」

そう言つてキングヘイローなりにレヴァティというチームを理解し始める。

要はチームのスタンスがレース至上主義というより、学園生活を楽しみたい者向けに寄っているのだ。

ツインターボの言ではないが、確かにレースだけが目標ではないというのは分からないでもない。

トレセン学園では学食がバイキングで毎日、食べ放題など普通の学園ではあり得ない破格待遇だ。

もちろんレースに何回かでなくてはならないという制約はある。

しかしそれも、世界各国で開催されるウマ娘たちのレースは、国民的スポーツエンターテインメントという大舞台として名高いのだから、むしろ喜ぶだろう。

そんなスポーツに憧れてやっつては来たものの、右も左も分からなかつたところにレヴァティという移籍推奨の手軽な腰掛けが用意されたら、なるほど確かに集まりやすい

のも領ける。

入部特典目当てなら更にウマ娘が集めやすい。

トレーナーも複数人が用意され、各人のやる気や実力、相性などでグループを形成すれば居心地が良いだろう。

ただ疑問もまだ残っている。

(そんな人に人が集まるならマヤノ先輩クラスのウマ娘が来てもいい気がするんですが……)

いくらやる気に欠けるとはいえ、チームへレヴアテイの成績は非常に悪い。

ツインターボから仕入れた噂話では、『レヴアテイに欠けているのは才能とやる気』などとも囁かれていたと聞かされていた。

トレーナーの問題かと考えても坂戸という人物はあれで、キングヘイローが知る限りかなり有能な人物にも見える。

口に手を触れ、深く思考を巡らしていく。

——まだ何か事情が隠されている。

そう結論付けた。

レヴアテイに在籍し続けるかの判断はまだ付いていない。

キングヘイローは自身の名を知らしめるために、勝利への最短ルートを構築し続ける

と心に決めている。

正々堂々、ライバルたちと競い合って勝利する。

そのための手段ならいくらでも手を打つ。レースのあとに後悔は残したくない。

ただ考えすぎてもすぐに結論が出る話でもなかった。

今日はこのくらいいいだろうと、一応の納得を得ると大きく息を吸う。

そしてゆっくり息を吐きながら内々に考えていた余計なものと一緒に霧散させた。

「……とりあえず今日の思考はここまでね。まずは今という時を精一杯、頑張ることが私にできる最善。努力し続ける者にこそ榮譽は与えられるはずだわ」

「ヘイローちゃんはまだ大人っぽいことを呟いてる……」

「? 何か言ったかしら?」

「ヘイローちゃんはやっぱり大人っぽいなあーって思ったただけだよっ」

マヤノの元気な声に首を傾げる。

まだまだ脇が甘いキングヘイローであった。

「腑に落ちませんわね……?」

「うちもなんなくキャラが掴めてきたっす」

「——おーい、今戻ったぞー。準備ができていようだから所定の位置について、特訓を始めてくれ」

「あ、はい、分かりましたわ!」

坂戸の声に反射的に答える。

余計な思考は一度、蓋をしておいて今やるべきことに集中し始めた。

その後、ツインターボの快速に驚かされたり、3000mを走つてもなお健脚を誇るマヤノトップガンに驚かされたものの、トレーニングを順調にこなしていった。

ただ気になったのは、とある日の出来事。

6月末で徐々に晴れの日が多くなっているのを感じる。

蒸し暑さに、道路の上に陽炎が揺らぐ。キングヘイローにとっては嫌になる季節だ。

そんなある日、坂戸から声を掛けられる。

「時にキングヘイロー」

「はい、なんででしょうか?」

その日も練習をしようと外へ出かけようとした矢先だった。

坂戸の手にはメモ帳のようなものとペンを持っている。

マヤノたちと並走練習をした日とは別の日、坂戸が唐突に質問をぶつけてくる。

「夏が近づいて最近、暑くなってきましたがおるが大丈夫かの」

「……正直いえばキツイですわね。泣き言を言っても仕方ないと思っっていますが、これ

「ばっかりはなかなか」

忌々しげに外を見つめる。

レヴァアティの拠点である貸しビルの外には燦々とした太陽の光が降り注いでいた。さんさん

室内は冷房が効いているが、一旦外へ出ればあつという間に汗が湧いてくる。

ただでさえレヴァアティの場所は学園から遠い。

練習前にも夏服が汗を吸い込んでしまうほどだ。

身体もだるさを訴えかけている。

持ち前の理性で抑え込んではいれるものの、鬱陶しいことに変わりはなかった。

「なるほどのう……」

「何かあるんですの?」

「いや、アンケート調査みたいなもんじゃ。他の者にも色々聞き取りしていな。今後

の予定にも関わってくるが、まだどうなるか分からん」

「……予定というと夏合宿とかかしら」

夏は多くのチームが合宿を行うという。

秋に向けてライバルたちを追い抜くために各自が更なる努力を重ねる季節。

キングハイローも密かに心待ちしていたイベントでもあった。

「それもある——」が、予定は未定というところじゃ。とりあえず質問は以上だから練習

に行つて良いぞ」

「分かりましたわ。……ちゃんと決まつたときには連絡をお願いします」

「もちろん、その時はキチンと伝えておくぞ」

「忘れないとは思いつつもしつかり念押しをする。」

夏は目前。レヴァアティに所属する各々はしつかりとトレーニングを重ね、準備を怠らない。

マヤノトップガンとキングヘイローのレースも着実に近づいていた。

いっぱい食べる君が

夏——家族連れは海に、山に、海外にと多くの人々が頻繁に移動する季節。教室から見下ろす府中の道路も気持ち交通量が増えてきている。

一般車もいれば、トラックもいた。

照り返す太陽はひたすら白い輝きを放ち、容赦なく大地へと降り注ぐ。

田舎と違い、セミの鳴く声あまり聞こえないことを覗けばまさに夏真っ盛りな状態だ。

そんな暑さが大挙してくる季節に対してキングヘイローはといえば。

「あ、あ、あ、あ……つ、い……」

教室の机で見事突っ伏していた。

梅雨の時と同じようにウマ耳はへたれ、力尽きている様子も一緒。

ただしうだるような暑さは、周囲に取り繕う余裕さえ奪っていた。

日本特有の湿度と温度のダブルアタックに、都会特有の熱を溜めこむアスファルト。建物が多いせいか、自然の風も弱く、本日は無風状態。

汗が噴き出てきて仕方がない。

冷房はあるにはあるのだが、教室を冷やすにはパワー不足で日差しが直撃するキングヘイローの席は地獄の様相を見せていた。

「さしものキングヘイローも暑さには敵わないみたいだねえ」

「……府中の夏を舐めてましたわ……うう」

涼しげな口調で近所のセイウンスカイが話しかけてくる。

とはいえ彼女もしつとりと汗が流れ、白を基調とした夏服にも薄っすらと肌色が見え隠れしていた。

時計を見ると既に正午。教室内には3分の1程度のウマ娘しかいない。

昼食の時間なので食堂に向かうべきなのだが、人混みひとつとってもわずら煩わしい。

残っている二人は申し合わせたわけではないが、共に時間をズラそうという思惑だった。

そんなのんびりとした時間の使い方をしている二人を他所に、タツタツタツという足音が右手廊下側から響いてくる。

そして教室前で止まったかと思うと突如として廊下側の扉が開かれた。

やってきたのは小柄な女の子。

「やつほ……って、あれ、もうみんな食堂いっちゃった？」

「やあウララ。残念ながらうちの授業は早めに終わってねえ、一足先に食堂に向かっ

ちゃったよ」

「あれっ、そうなんだ。折角、みんなと一緒にに行こうと思ったのになー」

「……また騒がしい方が来ましたわね」

暑さに負けるどころか張り合おうとさえしている騒がしい桃色少女。

髪も瞳もピンク色の一風変わったウマ娘——ハルウララだ。

両手を腰に当てて見るからに元氣澆刺はつらつといったところ。

クラスは違うのだが、人懐っこい性格で良くいろんなクラスに顔を出しては、話しかけてくる。

コミュニケーション能力においては学園でもトップクラスなどと噂されているほどだ。

そんな彼女が、机に突っ伏していたままのキングヘイローに気付く。

「キングヘイローちゃんどうしたの？ 体調悪いなら保健室ついてこっか？」

「……ただの夏バテですからお気になさらず、ハルウララさん」

覗き込むように見てくるウララ。

悪意があるわけではなく、純粋に心配しているのは分かるが、あまり顔をアップで見
てこられても困る。

その不躰ぶじつげな視線に目を細めるが咎とがめることはしない。

トレセン学園に来る前だったら、イライラから強めの言葉がひとつたつ付いて出たかもしれないが。

(良くも悪くも騒がしい先輩に比べたら、まだ大人しい方ですし……)

下手人はマヤノトップガンとツインターボだ。

最初にマヤノトップガンと出会った時点で、賑やか耐性なるものが付いたような自覚があるが、ツインターボで更に強化されたなどキングヘイローは内心で思う。

三人が揃って既に一カ月以上が過ぎていた。

先輩なので授業があるうちに会おうことは少ないが、トレニング中はもちろん一緒。

大騒ぎしやすい二人にキングヘイローがツッコミを入れ、タイミングを見計らったかのように坂戸が割って入るといふ関係が出来ていた。

そんな日々を送っていたのでハルウララくらいの相手に目くじらを立てる気にはならなかった。

「それにしても、こんなに暑いのに元気一杯ですわね」

「うん！ だって毎日が楽しいからね！ トレセン学園に来る前は不安だったけど、今はもう授業もトレーニングも大好き。暑いのも、なんかこう賑やかな日が近づいてくるようでワクワクしてくるし」

「実際、賑やかなのは間違いないね。ウマ娘のメイクデビュー戦は早い季節だと夏頃開催されるから、どんどんレースに出ていくことになるよ」

「そうですわね……メイクデビュー、か」

メイクデビュー戦は一戦もレースを行ったことがないウマ娘限定のレース。

日本ダービーと違い、格式などはまったくないが新しいウマ娘を見ようとコアなファンが足を運ぶレースでもある。

条件が同じなだけに圧倒的な実力を持つウマ娘が他者をぶつちぎって勝利したり、若々しい拙いレースながら必死に競い合う姿など様々だ。

中には将来、GIを取るウマ娘同士がデビュー戦でかち合うと、ちよつとした語り草になることもある。

どちらにせよ一生に一度しか挑めないレース。

キングヘイローも10月に予定されているレースのために鋭意、調整中だった。

そんな話の流れから、ふと気になったことが口について出る。

「そういうえば、ウララさんとセイウンスカイさんはデビュー戦は決まっているのかしら」「ウララ？ うーん、こっちはまだ未定かなあ。たぶん来年になると思う」

「私もまだかな。来年かもって聞いているよ。そういうキングヘイローは？」

「さあどうでしょう。割と近いうちに走ることになるかもしれませんがね」

ふふんと腰に手を当てて微笑む。

期日は明確にしなかったが、暗にデビューが近いことを告げる。

ライバルより先んじていることが少し嬉しかった。

当然、聞いていた二人はクラスメイトのデビューが近いことを理解する。

「えー、キングヘイローちゃんいいなあ。私も早く出たい！」

「ふくん、先に聞いというてデビュー日は明かさないとか良い度胸してるねえ」

咎めているわけではないが、からかう様な口調でチクリと差してくる。

しかしキングヘイローは気にした風でもなく、どこ吹く風という様子だ。

「出走日はトレーナーに決定権がありますし、守秘義務というものですわ。それにどう

せ貴女もそう遠くない時期に出れるでしょう。態度に出ていますわよ」

「えっ、セイウンスカイもそうなの!？」

「……いやあ、どうだろうねえ。出れるかもしれないし、出れないかもしれないし」

一呼吸置いた後に返事を返してきた。

掴みどころがない少女ではあるが隙はある。

キングヘイローよりは遅いが、かといってデビュー時期がかなり遅れるということも

ない。

クラシック戦線には仕上げてやってくるだろうと当たりを付けていた。

不敵な笑みのキングヘイローに、温和だがどこか裏を残しているような態度のセイウンスカイ。

バチバチと見えない火花が散っていた。

そんな静かに闘志を燃やしていたところにハルウララが声を上げる。

「ねえねえ二人とも、お昼の時間がなくなっちゃやし一緒にご飯食べない?」

「確かに食堂はもう空き始めてる時間かな」

「……食べるなら二人で良いのではなくて? 私は静かに食べたいので」

静かに席を立て歩き始めるキングヘイロー。

同年代とは話にしても慣れ合いはしたくない。

いつかライバルになるのだから、ほど良い距離感を保ちながらいる方が良いと考えていた。

その様子に苦笑いを浮かべるセイウンスカイ。

彼女の在り方に異議を唱えることはしなかったのだが、今日に限っては別の存在がそれを許さなかった。

「じゃあ一緒に食べようよ! そっちの方が楽しくなると思うし!」

「え、ちよ、ちよつと手を引つ張らないでくださいな!」

「ほらほら早く行かないとお昼時間が無くなっちゃうぞ。セイウンスカイも早く行こ

うっ

「急がなくても、まだ時間はたっぷりあると思うけどねえ」

キングヘイローの手を取ってハルウララが走り出す。

いきなり動き出した彼女に困惑な表情を浮かべながら連れていかれていく。

手を振り払っても良かったのだが。

(……マヤノ先輩と同タイプの方ですし、これは断つてもたぶん強引に連れて行かれま
すわね……はあ、仕方ないから付き合いますか)

無邪気なだけに一度これと決めたらテコでも動かないタイプだ。

人知れず溜息を吐く。

今日の食事は賑やかになりそうだった。

キングヘイローの食事は基本的に管理栄養士が考案した献立に沿っている。

食堂では『レヴァティ、キングヘイローです』と答えれば、調理師が元から予定されていた料理を作ってくれるという流れになっていた。

また、それは坂戸の訓練計画にも連動しており、料理の多寡で今日のトレーニングがおおよそ予想できる程度には慣れていた。

テーブルに座り、お盆の上に載っていた料理の数々を降ろす。

「……今日のトレイニングは激しくなりそうね」

主菜は和風おろしハンバーグだが、それが三つも皿に載せてある。

さらに全てのハンバーグに半熟卵が載せられていた。

基礎代謝と消費カロリーが高いウマ娘ではあるが、各人によつて食べる量は大きく違う。

それこそカツ丼一杯で済まず子もいれば、文字通り山盛りで食べる者もいる。

今回の献立を見るに身体の基礎はできている判断して、筋肉を更に増やす方向なのかもしれない。

タンパク質が多めな料理の時点で、それなりに強めのトレイニングが予想できた。

ハンバーグ三つに、卵三つの時点でボリウムはあるが、副菜も揃っている。

森のバターとも呼ばれるアボガドとキャベツやニンジンが混じったサラダ。

味噌汁にはしいたけ、ワカメと疲労回復効果もある刻んだタケノコ。

最近、健康効果を取り沙汰されているメカブに、絹豆腐、梅干し、漬け物など多種多様だ。

ご飯は大盛り気味だが、それ以前に茶碗ではなく、丼ぶりに大盛りというスペシャル仕様。

梅干しの果肉を混ぜた炊き込みご飯——夏バテ対策の一環と分かるだけに、プロの方

も分かっているのだろう。

お盆と一緒に添えられたメモには『ご飯、お代わり二杯までOK』の文字。夏バテ気味ではあるものの、香り高い料理の数々に感謝するしかない。

とはいえ、

(……)これ、さつさと食べないとお昼が終わってしまうわね)

目の前のセイウンスカイもこちらの料理の量を見て若干引いているのが分かる。

ハルウララは「おおすぎー」と笑うだけでスルーしていたが、同年代から見てもかなり多く見えるのも仕方ない。

「——それでね、それでね」

「ええ、そうね。はむ……はむ……」

「よ、よく食べられるね。大食い大会みたいだよ」

「はむ……残すわけには、はむ……いけませんもの、んぐんぐ……」

水も飲みながら強引に飲み込む。

対面に座っているハルウララに対して、適当に相槌を打ちながら料理を頬張っている。

ハルウララには悪いが話してばかりだと食事が終わらない。

重い昼食ではあるが必要なカロリーなのだ判断してキッチンと食べる。

ホカホカと湯気が漂う味噌汁を啜り、タケノコなどを齧^{かじ}っていく。触感を楽しみながらハンバーグを一口——醤油と大根おろしに、肉汁が混ざってやはり美味しい。

ご飯を口にすれば梅干しの酸味と一緒に白米の甘味が口に広がる。更に胡麻のドレッシングをかけたサラダを口にし、一息。腹が膨れていくのを感じながら、トレセン学園の料理は美味しいなとぼんやり考えていた。

そんなマイペースに食事を楽しんでいたキングヘイローだったが、セイウンスカイから声を掛けられる。

「ちよつとキングヘイロー」

「あら、何かしら。ゆっくり食事を楽しんでいるのだけだ」

「ウララちゃんのマシガントークを流すマイペースっぷりはなかなか凄いけど、後ろにお客さんが来ているよ」

「あら？」

ちよいちよいとキングヘイローの後ろを指差している。

それに釣られるように後ろを振り向くと、一人の女性が少し困ったように眉を下げながら立っていた。

見るとチーム（レヴァアティ）に所属している先輩の一人だ。

ただインターボやマヤノトツプガンではなく、他所のグループで練習をしている女性。

たまに連絡事項を伝えてくる女性だと記憶していた。

「申し訳ありません食事に集中していたもので……えっと、確かヒシヨウマル先輩、でしたわよね」

「ああ、いいよいいよ。ちよつとセレブっぽい雰囲気で気後れしちゃっただけだし。それより坂戸トレーナーから連絡事項を伝えてくれて言われててさ」

黒髪の女性は手を左右に振りながら気にしないでとジェスチャーする。

可愛いより綺麗といった様子で、左のサイドテールが特徴的か。

レヴァアティでは最年長の一人で今年、卒業予定だという。

サバサバとした印象でニコニコした軽い様子を崩さないウマ娘といった感じだ。ただ重要なのはトレーナーからの指示。

どんな内容かと身構えていると。

「マヤノトツプガンちゃんの場合は終わつたばかりだけど、ランクが上がるから重賞に向けて調整し始めるんだって。今回は2000mを何本か走るから、体調に気を付けるようにと」

「ええ、もちろん気を付けますわ」

あれから予定していた2レースで、それぞれ1着と3着に入っていたマヤノトップガン。

順調な滑り出しで次はGⅡ——日本ダービーなどのGⅠと呼ばれる格式高いレースに続いて、2番目にランク付けされている重要なレースに出走予定だった。

これに勝利するか、上位に付けければ菊花賞への道が大きく開かれる。

そのためにも万全を尽くさなければならぬ。

能力の高いキングヘイローは彼女の練習相手として期待されていた。

「あと夏合宿には筆記用具や宿題一式とかも持っていくようにつてのも言われてる。たぶん合宿先で勉強会するかもしれないから、購買で買うなら早めにつてさ。場所によつては買い物も碌にできないからね」

「宿題ならすぐに終わらせませんが……まあ、了解しました」

トレセン学園も夏の間は暑さもあつてか授業がなく、長期休講となる。

宿題は出されるがキングヘイローはさっさと終わらせるつもりで、渡された教科は既にやり終えていた。

ただトレーナーの指示ではあるので、とりあえず返事だけはしておく。

「あとは——食事の量がきついかもしれないけど、何とか食べるようにつてさ」

「少し胃袋にはきませんが……何とか食べておきます」

「連絡事項はそれぐらいかな。それと……練習、頑張つてね。みんな応援してるから」
「? ええ、もちろん。常に勝利を目指して最善を尽くす所存ですわ」

「……ふふつ、あなたのその言葉は眩しいなあ。じゃあね!」

ウインクをするヒシヨウマルは手を振りながら去っていく。

意味ありげな笑みではあつたか、キングヘイローにはその真意は分からない。

少し間だけ去つていった先輩の後ろ姿を眺めていたが。

——キーンコーンカーンコーン——

5分前の予鈴が鳴り響く。

そのことを頭で理解した瞬間、急いでテーブルに向き直る。

対面にいたはずの二人はおらず、遠くの方で食器を返却していた。

ハルウララが大きく手を振りながら、

「キングヘイローちゃん先に戻つてるよ!」

「じゃあねキングヘイロー。間に合うといいねえ」

「貴女たち一言くらい声を——いえ、それより早く済まさなくては! はぐはぐはぐ!」

飛びつくように皿を持ちあげ、残り三分の一度になつている料理を食べ始める。

先輩と話していたとはいえ、小突いて知らせるくらいはあつても良かったのではない

か。

そんな不満はあったものの余計なことをしている暇はない。後で文句の一つでも言ってもやろうと心に決める。

食べきれない場合、今日の練習でガス欠に可能性があった。

少なくともマヤノトップガンとの併走トレーニングは、キングハイローにとつてまだかなり苦しい。

坂戸が本格化し始めたと言った通り、彼女との練習は常に汗が滝のように流れるほどだ。

無理はしなくていいとも言われているが、並んで走っているとついつい本気を出してしまう。

実力を付けるための丁度良い手本でもあるので、むしろ願ったり叶ったりではあった。

しかし生半可な食事量では今日の練習が無駄になりかねない。

早く胃に納めなければと一人早食い競争状態になっていたとき、不意に頭上から影が差す。

誰かが通つたのだろうかと気にせず食べていたのだが。

「……あの」

落ち着いた、それでいてどこか底知れぬ雰囲気を感じさせる声が耳に届く。
しかしあと3分。

顔を上げる暇さえない。

「ふあい、はむ……ふあに？ 食べるので忙しいのだけど？」

「……食べきれないなら、手伝おうか？」

「お生憎様、はむっ、今日動くのにつ、あむ、必要なエネルギーなのでっ、はぐはぐはぐ
！」

どうやら料理が多すぎて困っているのだと思われたらしい。

しかし自分で食べないと意味がないため、料理を口に放り込みつつ断った。

相手も無理強いするつもりがなかったのかあっさりと引き下がる。

「そうか……よく食べるんだな」

何故か満足そうな声こわね音で気配の主は去っていった。

結局、顔を確認する余裕もなかったので、誰なのか分からない。

しかし気にしている暇はない。

「——これで、終わり！」

最後に残ったハンバーグを飲みこむ。

時計を見る余裕のないまま、急いで食器を返して教室へ向かう。

最終的にはギリギリで授業に間に合うことができたのだった。

練習もいつもの通りに、マヤノトツプガンやツインターボに振り回されつつも無事に終える。

話はそれで終わったかに見えた、が。

ウロウロ、ウロウロ。

大量の料理をお盆に載せた少女が食堂をフラフラと歩いている。

それを横目で観察していたセイウンスカイはのんびりとした口調で話す。

「……あの芦毛の人、最近よく見かけるなあ」

「他人を観察してる暇があったら自分の食事に集中した方がよろしいのではなくて。食べきれなくても私は貴女を颯爽と置いてきぼりにしますわよ！」

「あはは、この前のことはごめんってば」

流れでまた別の日も一緒に食べていた兩名。ハルウララは別の友人たちと談笑している。

ジト目のキングヘイローに、苦笑いを浮かべる目の前の友人。

他所は他所だと当の芦毛の人物に関しては特に気にしなかった。

そうしてキングヘイローたちの近くに、芦毛の髪が特徴的なウマ娘が大盛りの料理を持ち、フラフラと彷徨う光景がしばらく目撃されたとかされなかったとか。

夏合宿！行先は――

7月中旬となり、夏季休講期間となったトレセン学園。

自由に使える時間が増えたことで必然的にできることから多くのウマ娘たちが動き出す季節でもある。

ある者はデビューを目指し、ある者は皐月賞、日本ダービーの連戦した身体を癒しつつ菊花賞を目指す。

夏は力を蓄える大切な時期だ。

そしてキングヘイローもまたウマ娘の一人として行動する。

トレセン学園に、道路を一つ挟んで先にあるチームヘレヴァティの拠点である貸しビル。

正面には白いワゴン車が止まっており、キングヘイローは自分の旅行カバンを載せていた。

「……これで全部ですわね」

「いざゆかん夏合宿！ 楽しみだねえーヘイローちゃん」

「前のチームでは夏合宿は遠出しなかったから楽しみます！」

女三人寄れば姦しいといった風に賑やかに話す3人。

主に騒がしいのは2名だが、場が華やぐことには変わりない。

チームへレヴアテイの夏合宿。今日はその当日だった。

茶褐色の髪を気分良く払いながら空を見上げる。

いつものように暑苦しい空だがちよつとした旅行だからか不思議と嫌になる印象も少ない。

程よい大きさの胸を張り、これからの合宿に想いを馳せる。

「この合宿で更なる実力を身に着け――そしてライバルたちと一気に差を付ける。楽しみですわ」

「ハイローちゃんも真面目だなあー。もっと楽しくしてもいいと思うよっ」

ニツコリ笑顔で万歳をするマヤノトップガン。彼女なりに意見を出すときの癖のようだ。

しかし先輩といえどもこればかりは譲れない。

「夏合宿ですわよマヤノ先輩。遊びではないんですから――」

人差し指を立てながら注意する。

夏は地力を付けるための大切な期間。多くのウマ娘たちが秋や冬、そして春に向けて動き出す。

キングヘイローからしたら他チームに水を開けられないよう努力しなくてはならぬ。
い。

遊んでいる暇などなかった。

しかしそんな彼女の言葉にツインターボが疑問そうな表情で指摘する。

「あれ、今回は勉強メイン合宿って聞いてたつすけど」

「ターボちゃん違うよおー。みんなゆつくりじつくり、観光地で遊ぶ合宿だよ。おじーちゃんが確かそう言ってた!」

「え、まさか……ちよつとトレーナー。夏合宿ってトレーニングのための合宿ですわよね?」

なぜか三者三葉の意見に分かれてしまう。

それぞれの意見が、勉強、観光、合宿となっているのは明らかにおかしい。

キングヘイローは近くで別スタッフと話していた坂戸に聞いただと。

「いや、みんな正しいぞ。今回はそれぞれが別の目的で合宿を行う予定なんじゃ
目的が違うとあつさり事情を話した。

「別の目的?」と誰かが疑問符を上げる。

その言葉に坂戸は再度、頷いた。

「まずキングヘイローは夏合宿で地力を底上げすると共に弱点の克服に入る」

「弱点、ですか? 心当たりがないのですが……」

自惚れているわけではないがキングハイローも地道に努力し続けてきた過去がある。パツと見の至らないところは塞いできたつもりだ。

もちろん足りない部分を挙げればキリはない。

マヤノトップガンとの併走トレーニングでも碌に先着したことがないのは確かだ。

とはいえ明確に弱点と言えるような自覚はない。

それ故の眩きではあったのだが、相手は違つたようだった。

指先を一つ立てると、

「まずお主は暑さに弱い」

「うっ、それは――」

最近、夏バテ気味だったことを突かれ声が詰まる。

体質的なものだとしてスルーしていたキングハイローだったが、老練のトレーナーには見逃せない事項なのだろう。

「別にウマ娘に限らず人間だって暑さに弱い者はおるじやろう。しかし夏場のレースだつてあるのだ。そこを曖昧にしたままにしてはいかん。最善を求めるといふのなら尚のこと見捨てておけんわい。だから今回の小笠原諸島の特訓でキツチリ修正してもらう」

「だからあの質問をしましたのね……」

先月やっていたアンケート調査なるものの内容だ。

「夏がきついか」という趣旨の質問に若干バテ気味なのを話していたことを思い出す。さすが抜け目がないと言うべきか。

坂戸の話は続く。

「二つ目に、雨に弱い」

「うう……」

反論できず呻いた声しかでない。

正確には雨と一緒にくる雷の方が苦手だが、練習中に雨が降るとやる気が無くなるのも確かだった。

「梅雨の時期も嫌がっておつたろう。潜在的に雨に打たれることが苦手だと判断した。これから行く小笠原は夏場とあつて雨が多い。特訓を通じていくらか雨の中で走ることに慣れてもらおうぞ。そして三つ目——」

「まだあるんですの……」

「あるから言っておる——砂に、あるいは泥もかの。汚れを被ることも集中力をなくすじゃろう？」

「それは、その、やっぱり汚れるのは嫌と言いますか」

「……キングヘイローはお嬢様暮らしだったから仕方ないかもしれないが、レース中は例えどんなことがあっても勝利の執念を失ってはいかん……心の炎は決して絶やしてはいかん。それは一流のウマ娘同士が戦うとき、必ず差となってしまう。いつも綺麗なレースが出来るわけではない。時には泥を被つてでも——そう、例え見てくれが酷くたって、泥だらけの手をしていったって、勝つてこそ浮かばれるものもある」

「……はい」

反論はできない。むしろ当然のことだと同意する。

キングヘイローにとつて耳の痛いことではあつたが、勝利を目指すならそういったメタル面も気を配らなくてはならない。

坂戸の指摘は的確で、自然と見て見ぬフリをしていた部分を突いていた。

(……これがプロトレーナーという職業の方々ですのね)

ウマ娘では分からない部分を的確に見抜く能力。

トレーナーになるにはライセンスが必要だ。

普通の部活の顧問などと違って専門の資格を有する者たち。

両親が自分たちが教えるより、トレーナーに習った方が良いというわけだ。

知識、情熱、経験、才能など幅広い能力を持たなくてはウマ娘のトレーナーになどなれない。

その狭き門を潜った一人が彼なのだろう。

キングヘイローには連絡し終えたと判断したのか、ツインターボの方へ向いていた。

「ツインターボは事前に伝えていた通りじゃ。既に看護師国家試験を通過しているヒリュウマルに勉強を教えて貰いなさい」

「了解です！ ヒシヨウマル先生、お願いしますっす！」

「ふふっ、まだ本職になっているわけでもないし、お手柔らかに頼むよ。ワタシも資格を持つてるだけだし」

左のサイドテールを弄りながら苦笑いしているのは、今回の合宿に帯同することになったヒリュウマル先輩だった。

チームヘレヴァティンは指揮している各グループのトレーナーの判断によって合宿先が違う。

本来はヒシヨウマルも彼女が所属しているグループと一緒に動くべきだったのだが。

「すまんな、ヒシヨウマル。本来ならお主も自分のグループに行かせたかったのじゃが……」

坂戸の要請で今回は特別に一緒に合宿となっていた。

スタツフがいけないわけではなかったが、さすがに医療課程を専攻しているツインターボの先生役になれるものは少ない。

すまなそうに謝るトレーナーに対し、手を横に振りながら彼女は気にしないでとジェスチャーする。

「いえいえ坂戸さんには長いことお世話になりましたし、どのみち後は単位を取って卒業するだけなので気にしなくていいですよ。二週間もタダで南のバカンスが楽しめるんで儲けてーやつです」

「それでもスタッフの仕事を任すんじゃないから、合宿が終わったあとに相応の報酬は渡しておくぞ」

「トレーナーの報酬は豪華なものが多いですから期待しておきますね」

悪戯っ子の笑みでそう返すヒリユウマル。

彼女なりに合宿を楽しもうとしているようだった。

そして最後になったのが、

「マヤノトツプガン」

「んー? おじーちゃんどうしたのおー?」

キングハイローと坂戸の長話に飽きていたのか、物珍しくワゴン車をびよこびよこと覗いてたマヤノトツプガンが振り返る。

白のTシャツに短パンというラフな格好だが、少女らしい愛くるしさは変わらない。

夏の光に反射するように栗毛が輝いていた。

「今回の合宿なんじゃが」

「うん」

「完全休養ということで遊んでてよいぞ」

「遊ぶのは良いんだけど……走るのは？」

「駄目じゃ。レース続きで知らず知らず、疲労が蓄積しておる。今回は肉体の回復に重

点を置く」

「……どうしても？」

「どうしてもだ」

「おじーちゃんのケチっ」

上目遣いで坂戸に頼むもにべもなく断られる。

ブスーとわざとらしく頬を膨らませていた。

しかしそんな彼女の様子をキングヘイローはおかしく思う。

「普段から楽しいことには目がないのに、珍しいですわねマヤノ先輩」

「そういえば、そつすね。いつもはうちと一緒にはわちやわちやしてそうなもんですが」

「ターボ先輩も自覚あるなら、少しは落ち着いてくださいな」

「藪蛇っす！」

相も変わらず青いゴーグル姿のツインターボが大袈裟に驚くがスルーしておく。

問題は件のマヤノトップガンだ。

普段の彼女なら合宿と聞いて一も二もなく喜ぶのが常だ。

実際、先ほどまでウキウキした様子だったはずだが、今の様子は明らかに不満を持っているようだった。

キングヘイローたちの言葉を聞いていたらしく、マヤノが反応する。

「……だつてさー、折角レースもノリノリで勢い付いてるんだよ？　ここは一つ、みんなで楽しくドカーンと練習して菊花賞に向けて動いた方がいいんじゃないかなあーつて」
「まあ、気持ちには分かりますが」

もしかしたらキングヘイローやツインターボと一緒に走れることを楽しみにしていたのかもしれない。

遊ぶことは遊ぶが、練習もキツチリやるつもりだったのだろう。

普段から天真爛漫なマヤノだが練習に関しては存外、真面目だ。

休憩時間は騒いではいるものの、かといっていい加減にやるわけではない。

むしろ菊花賞のこと聞いて以来、更に真面目に取り組んでいるといつていい。

キングヘイローが先輩と呼ぶ大きな理由の一つでもある。

高い素質を持ちながらも、それに胡坐を搔くわけでもなく、キチンと練習できるのがマヤノトップガンという少女の魅力の一つだった。

ただそんな彼女に坂戸はキチンと指摘することを忘れない。

「……初のG I挑戦を目指しているとあつて気合を入れるのは良いが、少タイレ込み過ぎじゃ」

「そうかなあー……」

「そうじゃ。小笠原諸島の父島は直線も少ないし、全力ダツシユはできない——そもそもウマ娘が走る速度も制限されておるが。まあ今回はゆっくり海を楽しんだり、料理を楽しむとええ。いくつかのグループも小笠原を合宿先にしておるから、一緒に遊ぶこともできるぞ。要望があれば近くの島を観光できるよう手配するから我慢してくれい」

「むむー………むー、分かった」

渋々と引き下がる。

彼女なりに思うところはあるのだろうが休むこともトレーニングと思ひ直したのかもしれない。

坂戸が手を叩いて注目を集める。

「よし、行くぞ。小笠原へは船で丸一日ほどかかる。酔い止めも持ってきたから苦手な者は申し出るようにな。……運転は頼みます、高梨たかなしさん」

「分かりました」

高梨はレヴァアテイのスタッフではなく、学園専属の運転手だ。

彼が運転席に座り、坂戸は助手席の扉を開けて乗り込む。

出した車を戻す人員も必要なため、高梨がそれを担っていた。

昨今は高齢ドライバーの事故が多発しているということで、高齢のトレーナーはウマ娘の安全の確保のため、基本的に運転はしない。

キングヘイローは後部座席の扉をスライドさせて開ける。

「さて、乗り込みますか」

「マヤノは窓側! ヘイローちゃん一緒に座ろうっ」

開けた途端、先ほどの不機嫌さはどこへやら。マヤノトツプガンが早いモノ勝ちとばかりに乗り込んだ。

それを呆れたように肩を竦めながら、

「はいはい、分かりましたわ。ヒシヨウマル先輩とツインターボ先輩もそれでよろしいですか?」

「席にこだわりないっすから良いっすよ。うちらは後ろの方へいくことにするっす」

「そうしよつか。それじゃあ奥いくね」

メンバーの中で一番背が高いヒシヨウマルが後ろの座席へ行き、ツインターボも続いて乗り込む。

中央窓側はマヤノトツプガンが陣取っていた。

キングハイローも乗って車のドアを閉める。
全員がシートベルトをしたのをバックミラーで確認した高梨が、車を静かに発信させた。

坂戸率いるチームへレヴアテイ————小笠原諸島へ向け出発。

☆

東京湾のようなドブ色の海とはまったく別物の世界。

白い日差しが燦々さんさんと照り付け、甲板にいるキングハイローへ降り注ぐ。

しかし海上とあつてか吹き付ける潮風が丁度いい具合に暑さ中和していた。

眼前に広がるのは空をそのまま映し出したかのように深い青色の海。

ボニンブルーの海を進んでいた船が目前に迫っていた小笠原諸島——その中で主にホテルや住宅などが立ち並ぶ父島へと近づいていた。

「暑いけど……まだ、大丈夫ですわね。良い風景だわ……絵描きがいれば、風景画にして欲しいくらい」

左手でひさしを作り、空を仰ぎ見る。

快晴の二文字が思い浮かんだ。

一面の青空、一面の海――に浮かぶいくつかの島々。

夏合宿には違いないがまるでバカンスにでも来たような錯覚を覚える。

トレーニングはまだ始まってはいないものの、この風景を見ただけでもお釣りがくる気がした。

ただ誰もがその光景を楽しめるわけではないらしく、

「うっぶ……気分悪いっす」

「暇だよ……」

「先輩方は風情がないですわねえ」

酔い止めを飲まずとも余裕と豪語したツイスターボは船酔いで轟沈中。部屋で休めば良いものを、負けた気がするという謎理論で甲板に来ていた。

マヤノトップガンは最初こそはしゃいでいたものの、代わり映えのない風景に飽きたのか、日除け用のパラソルの下でぐだっている。

坂戸とヒリュウマルは合宿の打ち合わせらしく、船内で会議とのことだった。

「それにしてもお姉さんは酔い止めを飲まなくても、うっぶ……余裕綽々っすね……」

「私のお母様が海外出身ということで、祖母に会うために海外へ旅行へよく行っていたもの。飛行機は危ないからということで、船での旅がメインだったから、こういう揺れ

は慣れたものよ」

「思った以上に、ブルジョワな理由つすねえ……」

お姉さんにツツコミを入れるか逡巡したが、さすがに相手もグロッキーなので指摘するのはやめておいた。

その後は特に問題らしい問題もなく、小笠原諸島、父島へと無事上陸を果たす。

三階建てのこじんまりとしたホテル『シユ・ラ・フロンティア』に到着した一行。

真横には細い道と木々がアーチになっている道があり、独特の風情があった。

内部は白を基調とした床と壁。冷房が効いていて汗が徐々に引いていくのを感じる。

坂戸が従業員と話しながらチェックインを済ますと三人は別々の部屋へと案内された。

「相部屋ではないんですのね」

「二週間じゃからな。一人部屋の方がリラククスできるじやろう。もちろん暇なときは互いの部屋に行っても問題ないぞ」

キングヘイローの疑問に坂戸が答える。

長期間とあつてか彼なりの配慮なのだろう。

それぞれの室内へと入っていったマヤノトツプガンとツインターボが同時に喜色を

帯びた声を挙げる。

「うわーっ、カーテン開けると海が広がってるっ! 風が気持ちいい♪ ハイローちゃんも入ってみなよ!」

「全員個室とか豪華っすねえ」

その言葉にキンググヘイローも自分に割り当てられた部屋へ入る。

清潔感のある白壁に、本来は二人用なのかベッドが二つ。

トイレとバスが併設された個室と冷蔵庫。もちろん冷房もある。

だが何より目の前の景観だろう。

ホテルのすぐ裏は山なのか木が生い茂っているが、逆は道路を挟んで海が広がっている。

何もせず、飲み物片手に眼前の風景を楽しむだけでも良い時間潰しになるかもしれない。

「とはいえ、やるべきことをしなくてはなりませんね」

ドアを閉めるとキンググヘイローはおもむろに衣服を脱ぎ棄て、やや日焼け気味の肌を晒す。

既に健康的な小麦色へと変化し始めているが、特に気にすることなく白と赤の体操服に身を包む。

上は半袖、下はハーフパンツだ。

それから麦わら帽子を被り、旅行カバンの中から小さなリュックを取り出す。

坂戸から事前に用意するよう言われていた品だ。

指差し確認を済ませると彼女は再度、自室から出る。

「坂戸トレーナー、準備が出来ましたわ」

「……今日は別に休んでもいいんじゃないぞ」

「既に船内で丸一日身体を休ませました。これ以上は身体を動かさない方が毒だと思いません」

「出発前に少し強めにトレーニングをしたはずだが……まあ、キングヘイローがそういうなら良いか。ヒシヨウマル、準備はできておるか」

「はいはい。できてますよートレーナー」

坂戸が声を掛けると随伴出来ていたヒリユウマルが姿を現す。

体操服姿のキングヘイローと違って、女の子らしい黄色を基調とした半袖とスカートに麦わら帽子。

向日葵を背景にすると良く似合いそうな出で立ちだった。

「着いたところすまんが、キングヘイローに随行してルートの確認を行ってくれ。ルートは整備された道路じゃし、240号線をぐるりと回るだけだから、迷うことはない」と

思うが念のためにな。僕はマヤノトップガンとツイインターボの面倒を見るから頼んだぞ」

「了解です。……それじゃ立ち話もなんだし、さっそく行くっか?」

「無理言つて申し訳ありませんヒシヨウマル先輩……ではトレーニングに行つてきます」

「うむ。無理はせんようにな」

坂戸の声を背に受けながらキングヘイローとヒシヨウマルはホテルを出発したのだった。

テクテクと歩いていく二人のウマ娘。

島民もさすがに珍しいのか、彼女たちとすれ違ふと後ろの尻尾をまじまじと見る者が幾人かいた。

ただ元々視線を集めても気にしない身。

府中に比べれば振り返る人数が圧倒的に少ないこともあつて特に問題はなかつた。

――しかし、別の問題が発生していた。

黙々と歩く二人。何かするわけでもなく、ひたすら真夏の太陽の下を歩いていく。

「……トレーニング、ということだったのですが」

「うん？ どうしたのかなキングヘイロー」

「いえ、ふとした疑問が……」

そう言いながらリュックを担ぎ直す。

中にはわずかに塩を混ぜた水2リットルとお菓子数点。

迷ったときのためのGPSに、不審者がいた場合の警報器。

更に遭難したらいけないからと、なぜか渡された未開封のマヨネーズ。

山歩きに行くわけでもないのにかなり慎重なのか色々持たされている。

それはそれで重しとなっているので良かったのだが、腑に落ちないのが現状だ。

ルート確認という意味では歩いていくのが問題なわけではない。

だが二人がやっているのは、延々と島の道を歩くだけの作業。

それはトレッキングというよりも、

「これウォーキングではありません？」

「ウォーキングがトレッキングだよ」

「……本当に？」

「マジです。ほら指示書に書いてある」

「本当に書いてありますわね……あのトレーナーは何を考えているのかしら……」

『約12kmのルートを2時間ほどかけてゆっくり歩くように』などと書いてあるト

レーニングメニュー。

一般人が毎日行うならとても健康的な内容だが、キングハイローはウマ娘だ。

本気を出せば自動車を追い抜くこともできる強靱な脚力を有している。

こと足を使うことに關しては、並の負荷ではまったく意味がない。

何より距離が短いため手を抜くならぬ、足を抜いても2、30分もあれば余裕で走破できる距離。なぜこんな生易しい内容なのか疑問しかない。

ただ日差しが強いのも確かで、十分なポテンシャルを出せる状況でもない。

時折、タオルで汗を拭いながら歩いていると、ペラペラと資料を読んでいたヒリユウマルが声を掛けてきた。

「あ、もう一つあった。『夏の暑さに慣れるトレーニングだから毎日午前と午後、2時間ずつ歩くように』だったよ」

「そういうことなら納得ですが。他にはありますか?」

「午後は歩いたあと、浜辺で――うわ、物凄く練習メニューがあるよ」

「ちよつと貸してください……ふむふむ、なるほど」

ヒシヨウマルから資料を受け取ると何点か記してあった。

砂場では短距離ダッシュ、シャトルラン、タイヤ引き、水泳等々を予定していようだった。

またラジオ体操や、筋トレ、スクワット、もも上げなど徹底的に下半身を苛め抜く内容も含まれている。

他にも細かい部分も記されているが更に、

「特記事項、と」

最後のページあたりにメモ書きのようなものがあつた。

——キングヘイロー用トレーニング特記事項——

一つ、雨天中止は台風及び大嵐がこない限り、全てのメニューを必ずこなしておくこと。

二つ、リュックの中身は日を追って重量を増やして行う。

三つ、強い日差しの下で常時行動させ、暑さへの耐性を養う。またキングヘイローの部屋のみクーラー使用禁止。

四つ、雷雨発生時は特殊なトレーニングを準備。

以上の内容を実施し、弱点克服の叩き台とする。

ヒシヨウマルに渡してあるということは、キングヘイローが読むことも想定しているのだらう。

細かいことは書かれていないが大体の内容を察することができた。

そしてあっさりと先ほどの評価を覆す。

「――どうやら思った以上に考えてますのね。とりあえずぬるい気はしますが、納得のいく内容なので安心かしら」

「え、ええ……それでもかなり多い気がするけど。キングヘイローつてもしかしてドM？」

「痛いのはお断りです。と言いますか、勝つためのトレーニングなら努力をしないにこしたことはありませんし、マヤノ先輩たちは更にトレーニングを重ねていきますわよ」

なぜかヒシヨウマルが引いているが、キングヘイローからすればまだ手ぬるいレベルだ。

今回は弱点克服を重点に動いているので仕方ないのかもしれない。

普段の練習ならマヤノトップガンなどかなりの練習量をこなしているし、ツインターボも同様である。

だからこそ、このメニューも当然のものと考えていたのだが、ヒシヨウマルは違う感想を抱いたようだった。

「これが本気用のメニュー、か。……坂戸トレーナーも本気なんだね」

「どういふことですか？」

「——ううん、何でもない。ほらさつきと行かないと」
「……そう、ですね」

ヒシヨウマルはどこか憂いを帯びた表情を覗かせるがすぐひつ込めてしまう。いつもの癖で、すぐ感知してしまったが問いただすのは止めておいた。自分よりも付き合いが長いので思うところがあつたのかもしれない。結局、言葉少なくなったあとは淡々とウォーキングを行うだけだった。

その後、数日間は代わり映えない日々が続く。

ツインターボはヒシヨウマルに指導を受けながら勉強を行い、マヤノトップガンは日々、他のグループと遊びながら休養を楽しむ。

そしてキングヘイローはというと。

「——よし、休憩10分！ 憩分後に、もう一度シャトルラン10分じゃ」
「ぜえ、ぜえ……は、はいっ……ふう」

精一杯、息を吸い込み肺に酸素を送る。

日差しで身体がほてっているが、手近にあつたペットボトルの蓋を開け、乱暴に頭へ掛けて身体を冷やす。

自慢の髪や肌、砂が盛大に被っているが気にする余裕はない。

トレーニングはなかなかハードな様相を呈していた。

スパルタとは言わないまでも、キングヘイローのギリギリを狙った絶妙な強度が多い。

ただ元から身体の頑丈さが自身の特徴の一つ。

何度も呼吸を行っていると次第に息が落ち着いてきた。

「はあ……ふう、良い天気ですわね……」

手に持ったままのペットボトルをそのまま口元へ運び、少しずつ水を口に含む。

うがいをするかのように口内に馴染ませながら胃へと流し込んでいく。

飲みすぎると盛大に腹が痛くなる。

二日目にやらかした失敗を思い出しながら体調を整えていた。

横合いから坂戸の声が聞こえる。

「……息の戻りが早いほう」

「伊達に昔からトレーニングを重ねていませんわよ」

苦笑いしながら返答する。

キングヘイローのちよつとした特徴として『疲れてもすぐ回復する』というものが

あった。

健康第一のレヴアテイの方針に、お嬢様ながら健康そのものの身体が合致していたの

かもしれない。

トレーニングを通じて更にその傾向は強まりつつあった。

「ふうむ……そうか。………うーむ、そうか」

「どうかしましたかトレーナー？」

「……いや、すまん。考えすぎててな。休憩時間が既にオーバーしておったわい」

「駄目ではありませんか。さつきと走りますわよ」

「………本当に元気じゃのう」

立ち上がってすぐ定位位置に戻り、再度トレーニングを開始していく。

普通の合宿の風景。

何事もなくそのまま日々が過ぎていくはずだった――

――のだが。

合宿も一週間が経とうとしていた頃。

それは突然やってきた。

「ハイローちゃん、いる？」

「マヤノ先輩？ どうかしましたか」

時刻は既に夕食を終えた夜のひと時。

耳に届くのは虫の音と、海のさざ波。あとは時折吹き付ける風が木々を揺らすだけ。薄闇のぼんやりと街灯が灯っているのが眼下に見える。

暑さ克服の一環としてクーラー禁止令が出された自室。

地味にサウナ化していたので、キングヘイローはのんびりベランダで涼んでいた。

その彼女の隣室であるマヤノトツプガンがベランダ越しに話しかけてきていた。

暗闇で表情は窺えない。しかしどこか決意を秘めた声に思える。

「……ヘイローちゃんには話しておきたくって」

「話しておきたいことですか？」

「……うん」

普段の楽しげなことはどこへやら。

視線を向けるが彼女はベランダの手をかけたまま、海を真つすぐ見つめている。

その様子にただならぬもの感じたキングヘイローもまた同じ方向に向き直った。

何分か、そのまま静かな間が空く。

そして真面目な雰囲気のまま少女はおもむろに口を開いた。

「トレーナーのこと――おじーちゃんのこと、後悔の話」

唐突にも思えるマヤノトツプガンの告白。

彼女の真意は薄闇の中、まだ窺い知ることはできなかつた。

後悔だけで終われない

「……後悔とはまた不穏な言い回しですわね」

いつになく神秘的な雰囲気のマヤノトップガンに対し、キングヘイローはそう切り返す。

夜の帳も降りた小笠原諸島、父島のホテルでの出来事。

静かな夜なら声が響く——というわけでもない。

さすが日本より遙か南に位置する離島とあってか、全方位からの波の音が周囲を静かに包んでいる。

また夏の夜に大挙してくる虫の音も彼女たちの会話を、程よく内緒話をしやすい範囲に狭めていた。

どちらも部屋の明かりは付いてはいない。

レヴァティの備品として持ち出された蚊取り線香をペランダに焚いていたおかげか、煙たさと引き換えに虫が近づくと気配もなく、二人の邪魔をする者たちは皆無だった。

「そうかなあー？ おじーちゃんって寂しそうにしてるなあーって思うけど」

「付き合いの短い私ではそこまでは感じ取れませんわ。ただ思慮深い方だとは思いますが

が

言葉を選びつつ、オブラートに包んだ物言いに留める。

少し抜けている点や言葉足らずな時もあるが、キングヘイローの印象としては『老練さに見合った観察眼と知識を持つトレーナー』というのが第一にくるだろう。

合宿初日に自身の弱点を事前調査からキチンと見抜き、改善策を提示できる点からもその能力は理解できる。

なぜ分かったのかと後に聞いたところ、

『多くのウマ娘を指導していけば自然に身に付くトレーナーの基本技能じゃよ』

と苦笑いをしながら答えていた。

それが本当なのか、ただの謙遜なのかは分からない。

しかし短い言葉ながらも、積み重ねてきた研鑽の足跡を窺わせるものだった。

そんな老トレーナーの坂戸だ。

年老いた分、多くの出会いと別れも経験したと察せられる。

マヤノの言う寂しさなるものも、そこまで深刻なものなのかという疑念があった。

そんな彼女は星の瞬く夜空を見上げながら話す。

「マヤノはさ、昔は身体が弱くて病院に行くことが多かったの」

「……今の元気な姿とはまったく違いますわね」

一呼吸おいて考えたあと返事をする。

元氣一杯とはいえ、小柄な体格のマヤノだ。身体が弱かったという告白も納得がいく。

とはいえ素直に同意するのも悪いかと思ひ、お世辞込みの言葉だ。

それを察しているか分からないが、相手は苦笑いしていた。

「あはは、そうかも。でも、うーん……身体が弱いというか、ちよつとだけ表現が難しいかなあー。無茶をし過ぎる体質というのかな？」

「無茶？」

「うん。ほら5月のときにヘイローちゃんと学食で再開したときや、ターボちゃんがレヴアティに初めてやってきたときに、どっちともマヤノの動きに驚いていたでしょ？」

「ああ、あの急加速ですわね」

頭で考えるより脚が先に動く癖のことだろう。

無自覚かと思っていたが、どうやら自覚があったようだ。

ただそれが身体が弱いという話とどう繋がるのかがイマイチ分からない。

「マヤノからすると普通に走り寄ってるつもりなんだけど、周りはそう思ってくれなくてねえ……。危ないから手加減しなさいってよく怒られてたんだ」

「衝突すると危ないのは事実ですから、仕方ないことですわね」

「むうー、ハイローちゃんのいけず」

「事実は事実ですもの。でも、それが身体が弱いのと関係あるのかしら。現在の元気なマヤノ先輩と同じように思えますけど」

「ううーん……マヤノからすると、よく分からないんだけどね。おばーちゃんが言うには『身体が出来てないのに脚が早すぎるのがいけない』って言われてた」

「脚が早すぎるのがいけない？　いえ、それより、そのおばーちゃんとはどなたですか」「あつごめん、そこ抜けてた」

てへつと笑うマヤノトツプガン。

『おばーちゃん』と言うのが誰かは分からない。

しかしその名称を読んだ時の彼女の言葉には親しみがこもっていた。

坂戸に対しておじーちゃんと呼称することといい、年上に対して甘えたがりなのかもしれない。

彼女の話は続く。

「病院で知り合った人でね、マヤノの体調をよく気遣ってくれたおばーちゃんなの。一緒に遊んでくれたし、ウマ娘に関する知識も豊富らしくて、色々とアドバイスとか貰ってたんだ」

「なるほど……」

「うん。名前をね——坂戸京子さかどきょうこって言うらしいの」

「坂戸京子……坂戸？ それって——」

一度、口に呟いたが、聞きなれば苗字が混じっていたことに気付き、再び復唱する。

佐藤や鈴木などと違い、あまり聞きなれない類の名前だ。

マヤノもそれが分かっていたらしく頷く。

「ハイローちゃんが思った通り、おじーちゃんの奥さんだよ」

「……そこで話が繋がっていきますのね。坂戸トレーナーとは昔からの知り合いだったと」

なるほどと頷く。

マヤノトツプガンは坂戸トレーナーとは昔からの知り合いであった。

それなら事情を知っているのも理解できるといふもの。

キングハイローはそう考えていたのだが。

「ううん、おじーちゃんとは知り合いじゃないよ。知っていたのはお婆ーちゃんだけ」

「え？ でも奥様と知り合いならトレーナーとも……」

「お婆ーちゃんは長期間入院してたけど、マヤノは一日か数日間だけだからおじーちゃんとは直接話す機会がなかったんだよ。お婆ーちゃんが、おじーちゃんにマヤノのことを話していたらなら別だけどね。ただおじーちゃん、トレーナーさんだから昼間はトレ

セン学園だし、他のウマ娘さんと一緒に遠征に行くことも多いし。夜に面会に来ていた
ようだけど、マヤノは寝てる時間帯が多くねえー……」

「ん、んんー……ちよつと待っててくださいまし。少し整理しますわ」
「? うん、いいけど」

少し頭がこんがらがってきていた。

キングヘイローは腕を組んで思考を張り巡らせる。

マヤノはトレーナーの後悔した話——出来事を告白しにきた。

そしてマヤノトツプガンはトレーナーの奥さんと過去に病院で知り合っているが、ト
レーナーとは直接面識がある訳ではないという。

現在はまだそこまでの話だ。

「出会った経緯は分かりました。ですが初めに仰った後悔の話というのは結局のところ
どうなのかと」

「あー、うん。そうだよね。まず、そこから話さないといけないよねえー……」

途端に歯切れが悪くなるマヤノトツプガン。普段の彼女の態度とは大きく乖離して
いた。

先ほどから引つ掛かっていたが、どうにも言いづらそうにしている風にも取れる。

話したいけど言葉にするのを戸惑っている、ということだろうか。

「言いづらい話なら、ここでお開きにしても良いと思いますわよ。無理に話してもよくないかと」

「……ううん、やっぱり言うよ。たぶんいずれ話さなきゃいけない時がくると思うから」
キングヘイローの申し出を聞くも、相手は意を決した様子で断る。

遠くの海の風景を見つめながら彼女は話し始めた。

「おばーちゃんと知り合ってマヤノは色々楽しかったの。病院って検査ばかりでつまらないからさ。おばーちゃんはマヤノのようなウマ娘に真摯に向き合ってくれて、無理のない走り方とかのアドバイスもしてくれた。そのおかげか体調を崩したり、怪我をすることも少なくなったの」

「……ええ」

ポツリポツリと語られる思い出話。

どこか遠く離れた空を眺めながら話しているようにも思えた。

「それで旦那さん……おじーちゃんも凄腕のトレーナーさんだっというから、もうびつくり。いつかトレセン学園に入学して頑張っちゃうぞーってよく二人で話してたの。病院の夕陽を眺めながら」

「……………」

「マヤノって休みがちだから友達も少なくなっさ。たまーに休み時間とか追いかけてこ

できても、他の子は追いついてこないし、本気で追いかけてしようとすると子どもほとんどいなかった。……そんなのただ走ってるみたいで凄くつまらなかった」

「……………」

「同世代がそんな感じだから、余計おばーちゃんにはよく懐いていたなあ。お話も一杯聞かせてくれて、昔のウマ娘さんの名レースとか古いテープで見ながら解説してくれてた。『この子は普段一人でいるのが好きなのに、世話焼きのせいによく騒動に巻き込まれてたー』って裏話とかね。……………本当に、一杯教えてくれた。だけど——」

そこでマヤノの声のトーンが落ちる。

悲痛に満ちた声だ。

静かに聞いていたキングヘイローだったが、話の流れから次にくる言葉を何となく察することができた。

「……おばーちゃんが死んじやつたんだ。マヤノが元気になつて病院に行くことがあまり無くなつてきた頃に」

「それは……悲しいですわね」

予想できた言葉に、無難に返すしかできなかった。

表情は見えない。ただ人懐っこいマヤノに襲った悲劇は筆舌に尽くしがたいものがあるのかもしれない。

「もっと、いっぱいいっぱいお話するつもりだったんだ。昨日と今日と明日と、未来の話をついて。マヤノは馬鹿だったんだよ、無邪気に毎日が変わらないって信じてた」
幼い頃というのが、どの程度の年齢だったのかは分からないが、非常に辛い経験だったのは容易に把握できる。

老人が病院に長期入院しているという事実——健康な者が入院しているわけがない。何かしら病などを患っていたのだろう。

長期の入院をしていたということは、それほど健康者とほど遠い健康状態のはずだ。

ただ幼いマヤノにそれを予測しろというのも酷な話だ。

キングヘイローができることは静かに耳を傾けることだけだった。

「たぶんずっとずっと後悔してる。言いたかったことか言えなかったことか、たくさん」

生きている以上、誰もがいつかは亡くなってしまふ。

ただどちらにせよマヤノの心痛を慮るなら、それ以上踏み込んで言えるわけがなかった。

「久しぶりにおばーちゃんに会おうって思ってた、病院へ行ったの。その時かな、初めてトレーナーさんを見かけたのは」

「坂戸トレーナー、ですか」

「うん。おばーちゃんの個室に、お医者さんとか普段見ない大人とかが一杯いたんだ。人が集まっていたから少し怖くて、扉からそつと覗いてね。……………それで聞いちゃったの」

「聞いた？」

「…………おじーちゃんはこう言っていたの」

彼女が言葉にしたのは、老人の酷く後悔した言葉だったという。

——間違えていた。

——大切に扱うあまり儂は多くの若者の未来を犠牲にし続けたのか？

——それをヘラヘラと笑いながら他人に披露するなんてとんだピエロもいいところだ…………つ！

——決して諦めなかった…………あの子に儂は、儂は、なんと詫びれば…………いいのか…………つ。

マヤノから語られたのは言葉。

老人が慟哭しながら最愛の女性が息を引き取った場所での嘆き。

普段の温厚な姿からは程遠い——いや遠くて当たり前なのかもしれないが、激しい感

情の発露があったという。

あまりにプライベートな話題だけに、聞いてしまっても良かったのかと戸惑ってしまふほどだ。

「その話を聞いてから言うのも何なのですが、それは私が知ってしまったても良いのかしら……」

おそらく坂戸に聞いても話したがらない類の出来事だ。

それをマヤノの口から聞いてしまっても良いのか。

本人が話すまで待った方が筋は通るのではないかという疑念。

しかしマヤノはゆっくりと首を横に振った。

月光を浴びたままの、マヤノの艶やかな栗毛は僅かに揺れる。

開いた口調は真剣なものだ。

「ハイローちゃんは知ってた方がいいと思う。たぶんおじーちゃんが自分の夢を託しているのが、きつとハイロー……ううん、キングハイローってウマ娘だと思うから」

「……私が？」

「たぶん、だけどね。おじーちゃんも平等に接しようとしてるみたいけど、ハイローちゃんに対しては妙に肩の力が入ってる気がするもん」

「それが事実かはともかく、実力など総合面で言えばマヤノ先輩の方が遙かに先を行っ

てますけどね」

「あはは、ありがとうおー♪」

キングヘイローは負けず嫌いではあるが実力は素直に認める主義だ。

目の前のマヤノトップガンという少女は、現時点の自分より何段も上のステップにいる。

ツインターボとキングヘイローがバトンタッチ形式で行った併走トレーニングでもそうだ。

長距離もイケるらしく、3000mを走り続けるマヤノに追いつるのが精一杯。

日を追うごとに彼女の実力が花開いていくのを感じている。

だからこそ、まだ発展途上であるキングヘイローよりマヤノトップガンの方に期待を寄せるのが普通だろう。

二人の実力差を目の当たりにして、どちらに軍配が上がるかすら分からないほど目が曇っているトレーナーでもない。

「——ただ、ね」

笑い気味の声は静かにトーンダウンする。

譲れない想いがあった。

「マヤノはG Iに勝ちたい。絶対に勝ちたい。おばーちゃんと約束したんだよ、凄いう

マ娘になってみせるって。身体の弱かったあの小さなウマ娘が、こんなに成長したんだぞーって、お空の向こう側にいるおばーちゃんに伝えたい」

「ええ」

「おじーちゃんも、たぶんG Iを勝ちたいって凄く思ってる。だからその想いも叶えたい。そうすればきつと、みんな笑顔になってくれるって信じてるから」

「そうですわね」

「マヤノも、おじーちゃんも……もしかしたらおばーちゃんも。みんな後悔しているのかもしれないから——だから決着を付けたいの。後悔だけで終わらせたくないから」

「G Iに勝つことで、ですか」

「うん。レースに勝って、区切りをつける。ね、簡単でしょ？」

実にシンプルかつ明瞭な方法。

レースに勝つことで自分なりの決着を付けたい——それがマヤノトップガンの想いだった。

他人から見ればそんなことかと笑われるかもしれない。

しかしG Iに勝つという事実は、ウマ娘に限らずトレーナーたちにとって悲願の一つだ。

誰もが栄光を掴めるわけではない。

数百、数千人のウマ娘の中で、GIの榮譽を得られるのとは極わずか。夢の舞台はそれほどまでに遠く険しい道のりだ。

だからこそ大舞台で勝利することができれば、誰もが諸手を挙げて抱き合い、歓喜に包まれる一大イベントとなる。

騒がしくても強くなろうとする少女。

いい加減なようで真面目に取り組む姿勢。

しかし幼き頃の哀しみが、彼女に勝利への渴望を与えた。

表向きだけ見れば天才的な実力を持つウマ娘。

しかし裏を返せば。

(血は繋がっていないなくても孫が祖母に孝行したいような、願ひ続けた想いなんでしょう。

……たぶん私も、きつと同じ)

坂戸京子とトレーナーに対して精一杯の御礼をしたいという純粹な想い、願ひ。

それがマヤノトップガンを突き動かし続けてきた源泉なのだろう。

——偉大な両親が胸を張って自慢できる娘でありたい。

キングヘイローが真摯にトレーニングに励み続ける大きな理由の一つだ。

そしてマヤノトップガンも細部は違えど、胸に秘める決意に差異はない。

初対面のときは相性が悪いタイプかと思ったが、意気投合するのも早かった。

それはもしかしたら根っここの部分が同じだったせいなのかもしれない。

分かったのなら話は早かった。

（――ならば、これ以上の話は蛇足ですわね）

もうこれ以上、悲しい話題をする必要はないだろう。

だからキングヘイローは笑みを浮かべることにした。

いつも浮かべている不敵な笑みだ。

「……凄いウマ娘というのも曖昧ですわね。もう少し明確な目標を立てた方がいいですわよ」

「あはは、そうかもっ！ でも、そういうヘイローちゃんだって『キング』の名を知らしめるって割とよく分からない言葉だよおー？」

「き、キングはキングですわ。王の名を広めるのは、それだけで意味がありますもの！」
「やっぱりあいまいい！」

話は終わりだとばかりに茶化すと、マヤノも乗っかるように茶化し返してくる。

互いにどう反応するか理解しているという雰囲気。

すっかりいつもの空気だ。

もとより共に辛気臭い雰囲気は苦手なタイプ。

深刻な表情を浮かべるより、前を向いて歩いた方が建設的というものだ。

この話を真に終わらせる方法はたった一つ。

とてもシンプルで簡単な方法。

「マヤノ先輩」

「うん？」

「勝ちましょう、レヴアテイでのG I初勝利。来年以降は私がバンバン勝つて見せますから、今年の一発槍はちよつと悔しいですがお譲りします」

「うんっ、譲られました！ ……これからもよろしくね？ ヘイちゃん♪」

「へ、ヘイちゃん？ なんですかその珍妙な名前は」

マヤノはキングヘイローの方に満面の笑みを向けながら、不思議な愛称を呼んだ。

戸惑う彼女に気にすることなく彼女は弾んだ声で言う。

「ヘイローちゃんを短くしてヘイちゃん♪ みんなヘイローちゃんって呼ぶし、マヤノだけの呼び方が欲しいなあーって。マヤノのことも、親しみを込めて『マヤちゃん』って呼んでも良いよ♪」

「先輩に対する呼び方は後日の宿題として。せめて、こう……その挨拶みたいな呼び方以外に、もうちよつとありませんの？」

あまりに安直な気がしたので提案するとマヤノも思案気な顔で悩み始める。

「むう？　ならキンへちゃん？」

「更におかしくなっているような……」

「じゃあローちゃん？」

「何故か分かりませんが、水着を着たとても幼い少女に対する呼び方になっている気がするのではよつと」

「ならソングへちゃん！」

「どこぞの未開の部族みたいな名前ですわね……」

「ことごとく変な名称を思いついてくる。」

普段から考えていたのだろうか様々な愛称を提案してくるが納得のいくものは少ない。

最終的に肩を竦めながら、

「……分かりましたわ、ハイちゃんが良いですわよ」

「わーい、よろしくねハイちゃん♪」

「まったくマヤノ先輩には敵いませんわね」

押し切られる形で新たな愛称を名付けられた。

キングヘイローからすると珍妙極まりない呼び方ではあるがマヤノは至って上機嫌だ。

「ハイちゃん」

「なんですの」

ベランダの柵越しにマヤノはグツと拳を突き出してくる。

小柄な体格ゆえか、少しだけ足をプルプルさせていた。

「また改めてよろしく——絶対に勝とうね」

「ええ、よろしくされます——負けるつもりなんてさらさらないのだから」

ふつと笑うとキングハイローも拳を突き出してコツンと突き合う。

いつかの柔らかい手による握手ではなく、硬い拳による挨拶だ。

形は違えど、いや違うからこそ、前よりもずっと親しみを感じる。

月夜に照らされた小さな約束。それはささやかながらも、お互いを認め合う力強さが

あった。

期待の新星

マヤノトップガンとの一件があつたもののすぐ合宿が終わるわけではない。

相変わらずツイインターボは勉強に勤しみ、マヤノトップガンはトレーナーの言いつけ通り安静にしている。

そしてキングヘイローは決意も新たに特訓を行つていた。

黙々と足を踏みしめて道路を歩いていく。

背中にはリュックの重みがあり、初日と違つて両肩に食い込むレベルの重さになつて
いる。

坂戸が用意していたトレーニング計画に沿つて徐々に重量が増しているのだ。

ただその重みはむしろ喜ばしいところ。

暑いトレーニングかと思つたが、夏の暑さとダルさの中で長時間行動するのは地味に負担が掛かかっている。

表面には現れない内側の土台——筋肉などが変化していく気配を日々感じていた。

（軽度のトレーニングをひたすら行う……激しい動きがなくても疲れるものですわね。それにしても——）

茶褐色の髪がバサバサと乱暴に揺れ、風の強さを物語っている。

「——っ!? ……ふう、嫌な天気ね」

小粒の雨が頬を濡らす。

雨に慣れるトレーニングの一環として傘はささない。

レインコートなどで極力、雨に打たれる感覚を覚えるよう言われていた。

まだ着用していないが土砂降りになったら着なくてはならないだろう。

空を見上げる。

天気はあいにくの小雨混じりの曇り空。薄暗く、ぶ厚い暗雲が全天を覆うように広がっている。

先ほどビクンと反応したのは遠くでゴロゴロと雷鳴が聞こえたからだ。

父島にある山々をウォーキングしていくコースは、キチンと舗装されているので歩くだけなら支障はない。

坂を上って眼下の海原を見下ろす。

波が高く、嵐が近づいていた。さすがに極端な悪天候でのトレーニングは安全上の理由から実施されない。

明日は外のトレーニングを中止し、特別訓練が用意されていると言い渡されていた。

「さっさと終わらせて、通常のトレーニングに戻りますか」

負担が増えているとはいえ、歩くだけのトレッキングではやはり物足りない。

キングヘイローは足早に悪天候の山々を歩いていき、その日の練習に励むのだった。

☆

次の日。

ホテル『シュ・ラ・フロンティア』の一室——交渉の末、特別に貸し切りとなった談話室の一室にて、坂戸は腕を組みながら言う。

「——本日は外が悪天候のため、キングヘイローに関しては特別メニューに取り組んで貰う」

「と、特訓はいいんですが——びやう!?!」

「ヘイローちゃんはほんと雷が苦手だねえー」

「本日は荒天ナリーっすね」

外出できないのでホテルで暇潰しするしかない一同。

先日のヘイちゃん呼び宣言をしていたマヤノトップガンはなぜかいつもの呼び方だが、キングヘイローがそれを気にする余裕はない。

坂戸の説明を聞くために両耳に神経を集中してはいるが、時折響く雷鳴にビクビクし

てばかりだ。

「ウマ娘というものは通常、人間より聴覚などの感覚器官に優れておる。そのため雷鳴などといった大きな音を苦手とする者は存外多い。しかしそれをそのままにしているのは、レースでの観客たちの歓声に集中力を乱される可能性がある！ よって本日のメニューは——」

ホワイトボードにきゅつきゅとマジックペンで書いていく。

雷鳴が轟く中、坂戸が提示した特訓が何だったのかというところ。

「……レース鑑賞会？」

きよとんとした表情で呟く。

ホテル内とはいえ、身体を動かす特訓かと思つたら想定外の範囲外の内容に困惑気味だ。

しかし坂戸は真面目な顔付きで頷く。

「チームヘレヴァティンが戦後以降、ずっと収集し続けてきた往年の名レース集じゃ。キングハイローには、それをじっくり鑑賞しながら、今後のトウインクルシリーズについて想いを馳せるようにしてもらおう。全神経を集中させながら、もし自分がレースに出場していたらという仮想トレーニングを脳内できっちり行おうじゃ」

「……雷雨で気が散って仕方ないんですが」

気力で維持しようとはしているが、時折雷鳴が轟とどろいており、頭部のウマ耳がビクつくくらいには驚いている。

「それを闘志でまくり返すというのが今回の主旨じゃ。キングヘイローは儂が見てきたウマ娘たちの中でも、抜きんでた勝利への執念と向上心がある。そのメンタリテイは非常に有用じゃ。なので名レースの鑑賞で闘志を滾ころらせ——」

「——苦手な雷が気にならなくなるよう調整していく、ということですか？」

「そういうことだ。弱点を克服すれば、お主に残るのは闘志というメリットだけになる——できるか？」

「できる、できないではありません。やれ、と仰るなら意地でもやって見せますわよ。……それがキングヘイローなのだから」

確認するように聞いてくる坂戸に対して、一度溜め息を吐きながらも答える。

「精神論に根性論を重ねたような内容ではあるが、理には適っていると受け取っていた。」

もとよりキングヘイローの弱点と呼ばれるものはメンタル面での脆弱性が目立つ。

同時に勝利を目指して貪欲になれる性格が弱点を大きくカバーしている側面もあった。

そういつた強い光があつたゆえに、弱い部分が影のように小さく、裏に潜んでいたと

言ってもいい。

「勝利への最短ルートは何が何でもこなしてみせる。眉唾な部分もありますが、きつちりやつて見せます」

「よく言った。これをこなせなくてはG Iなんぞ夢のまた夢だからな。……名勝負の視聴でキングヘイローの闘志を掻き立て、雷が気にならなくなるよう視聴特訓する——

—名付けて『熱血！ 名試合 de 克己心トレーニング』じゃ！」

「内容はともかくネーミングセンスだけは壊滅的すわね……」

至って真面目な顔で変な特訓名を語る坂戸に対して、呆れたように腰に手を当てながら呟く。

自身の言葉が届いてなかったのか、坂戸は手を叩きながら部屋の入口——テレビとは反対方向に顔を向ける。

「ヒシヨウマル、準備はできておるか」

「はいはい。資料室からあったのをまとめて持ってきてたけど、これでいいですか」
「……これはまた、随分とありますわね」

扉を開け、足元にあつた段ボール箱を持ち上げるヒシヨウマル。

自慢のサイドテールを揺らしながら、テレビの前におろした箱の中にはビデオテープがズラリと並んでいた。

中にはDVDなども混ざっており、時代に即してか多種多様。ラベルには『シーン集1988年』など時代分けされている。

多くはビデオテープ——昨今ではDVDなどの記憶媒体に押されて、すっかり見る機会も減ってきた長方形のプラスチック体。おおよそ長鉛筆が入る筆箱ほどのテープだ。

ご丁寧に上書きできないようテープのつめも折ってある。

少しだけ胡散臭いものを見るような目で適当にテープを拾い上げた。

「今では骨董品みたいな代物ですわね」

「一昔前は主流だったんじゃないかな。古い試合も多いから自然とこういったものも多くなる。テープの寿命を迎えようなものと一緒に入っているDVDに焼き付けておるから、そっちから見るといいかもしれない」

「ふーん……あら、爪の部分にテープが付いてますが」

「それは録画するときの応急処置じゃな。ビデオテープは『つめ』の部分を折ることで、上書きできなくなるが、テープを貼ると出来るようになる。まあ庶民のちよつとした知恵じゃよ」

興味深げにビデオテープを観察する。

使ったことがないわけではなかったが、CDのような記憶媒体が広がってからは実家でも使う機会はほとんどなくなっていた。

とはいえテープの雑学が本題ではない。

室内に備え付けられていたテレビとDVDプレイヤーにヒシヨウマルが、件のテープを入れて起動させると途端に歓声が聞こえた。

レース前特有の徐々に沸き上がってくるような観客の声。

「GIが——」という実況の声も混じっていたが、それを抜きにしてもかなりの大歓声と言えよう。

そのテレビの声にキングヘイローだけでなく、ツインターボやマヤノも興味津々に覗き込む。

「おじーちゃんおじーちゃん、これっていつのレース？」

「これは——シンボリルドルフの三冠を取る前のレースじゃな。無敗で菊花賞を迎えた当日は多くの観客が足を運んだと聞いている」

「いきなりとんでもないレースね。確か7連勝中で、菊花賞で8連勝だったかしら」

トレセン学園では生徒会長もやっているというシンボリルドルフの伝説的な記録を打ち立てたレースの一つだ。

ウマ娘のレースには地方、中央という違いがあるが、基本的に中央と呼ばれるレースはレベルが段違いと言っている。

その中央のレース——トウインクルシリーズを無敗で駆け抜けるというのは、並大抵

の実力で達成できるものではない。

どんな実力者でも、スタート、ペース配分、レース中の位置取り、仕掛けのタイミング、他のウマ娘の実力差等々、多くの要因が関わってくる。

レースも大体が10名以上のウマ娘が戦う場。2着以下は評価されるものの1着にならなければ敗北扱いだ。

そんな多数のネガティブな要素を実力一つで叩き伏せ、無敗の三冠ウマ娘に輝いたシンボリルドルフは、まさに歴代屈指の実力者と言えよう。

真剣な表情でテレビ画面のシンボリルドルフを見つめるのを他所に、ターボとマヤノが雑談をしている。

「ほんと派手な人っすよねー会長って。うちからしたら天上人みたいなもんすよ」

「ターボちゃんって成績いくつだっけ？」

「うちは8戦3勝っすね。一応GⅢのラジオたんぱ賞に勝てたのが密かな自慢っす」

ピンとツインターボが白いゴーグルを弾く。

彼女はゴーグルを複数持っているようで、今日は白いゴーグルを付けているようだった。

「えー、十分勝ってるじゃん。マヤノなんて9戦3勝だよ。しかも重賞はまだ勝ったことないし」

「いやいや重賞勝てたのはまぐれ勝ちみたいなものですよ。もしかしたら白ゴーグルが勝ちを呼び寄せたのかもしれないっすけどね」

「そうかなあー……あ、ルドルフ会長めっちゃ早い！」

「うっわ、中団に居たのになんで最終コーナーに入ったら前にいるんすか。こりや作戦勝ちっすねえ」

「並外れたレースセンスと位置取りの巧みさがあるからこそ出来る芸当じゃな。二人もよく勉強するといい」

坂戸も加わってテレビを見ながらワイワイやっている。

自分のトレーニングのはずなのになぜレースで盛り上がっているのだろう。

「……私を忘れないでくださいませんか」

「おっと、すまんすまん」

ツツコミを入れつつ画面の前に行く。

本日の特訓が始まった。

「……………っ?!? むむう」

時折、雷鳴に身体が驚きつつもキングヘイローは画面に魅入っていた。

往年のウマ娘たちが争うレース。

やはりというべきか、その一流のテクニックは目を見張るものがあつた。

例えば大逃げから徐々にスローペースへと落としていく高等テクニック。後続集団が必死に追うも体力を温存したウマ娘が悠々と一着を取る姿が映っている。

別のレースでは闘志を前面に出しながら先頭は譲るまいと激走する凄まじい姿も展開もあつた。精神が肉体を凌駕する光景は息を飲むしかない。

後方から直線一気にゴボウ抜きで差していくウマ娘もいた。その姿は稲妻の一言に尽きる。二着になつたウマ娘が茫然とした表情で一着になつた相手を見ていたのが印象的だつた。

「勉強になるばかりね」

「ほんと凄いやねえー」

「ええ」

一緒に見ていたマヤノトップガンも目をキラキラさせながら見ている。

既にレースデビューしているだけに、キングヘイロー以上に考えさせられるものがあるのかもしれない。

そのままずっと見ていたい気持ちもあつたのだが、

「……ちよつと御手洗に行つてきます」

クーラーの効いた部屋で身体が冷えたせいかわ催してしまった。

自室ではクーラー禁止令が出ているため無駄に暑い室内で暮らしている。

どうにも暑さに慣れてきたせいかわ、逆に冷えるのが堪えてしまっているのかもしれない。

「行ってらっしゃいっす。テレビはどうするっすか？」

「マヤノ先輩が楽しんでるようなので、そのままにしておきましょう」

立ち上がったキングヘイローに、ツインターボが自身の長い前髪をかき分けながら聞いてくる。

彼女のゴータル姿には慣れたものだ。

屋外が騒がしく勉強にも集中しづらだろうということで、ツインターボの勉強会も今日はお休み。一緒にレースを見ていた。

キングヘイローの特訓ということでテレビを一時ストップするか聞いてきたが丁寧に辞退する。

(マヤノ先輩の気分が少しでも晴れた方が良いでしょう)

自身もG I に出る予定とあつてか、マヤノも笑顔ながら真剣な様子でテレビに集中していた。

昨日の一件から夜が明けたが彼女のお気楽な様子は変わらない。

しかし彼女のレースに掛ける情熱を知ってしまった。

それはキングヘイローにとって好ましくもあるが、同時にちよつとした悩みも発生している。

単に無邪気なだけではない少女。

大切な人が失ってしまったがゆえに、心のどこかで無理をしているのではないかとつい考えてしまうのだ。

(気にしすぎてもいけません……まあ、トレーナーに任せた方がいいのかしらね)

当の坂戸はマヤノにいくつか解説を入れながら一緒にレースを見ている。

「つまりこの状況ではな——」

「おおー、そうなんだ。じゃあ、こういうときは——」

キングヘイローの特訓ではあるが、マヤノに対しても必要なレース知識を教える予定だったのかもしれない。

それを横目に邪魔しないよう静かに部屋から退出した。

むわつとする熱気を感じるホテル内。

手洗いを済ませたキングヘイローが室内に戻ると、マヤノトップガン、ツインターボ、坂戸トレーナーが並んでテレビを見ている。

頭部の耳を正面に向けて音を拾うと「タマモクロスが15人ゴボウ抜きだー！」という実況が聞こえてきた。

シンボリルドルフのレースは既に終わり、今度は別のウマ娘のレースになっているようだった。

なかなか興味深い内容なのか、真剣な表情でテレビを見ている。

(レース好きというか、なんというか……)

本当に自分の特訓のために持ってきたのかと疑問に思うくらい集中している。

固唾を飲んで静かに視聴している一同にどう声を掛けるか少し迷っていたところ、真横に人が並ぶ気配がした。

横を向くとサイドテールの女性——ヒシヨウマルだ。

思い返すと彼女だけなぜか輪に加わっていない気がしたことに気付く。

ツインターボの教師役がなければ、ヒシヨウマルも特に予定がないことになる。

ただ眉を下げながらマヤノたちに対して苦笑いしている雰囲気は気になっていた。

「どうかしたんですか、ヒシヨウマル先輩？」

「うん？ ああ、ハイローちゃんか。いやーなんていうのかなあ……後ろでのんびり聞いてたけど、割と天上人な会話してるよねーって思ってたね」

「……確かにシンボリルドルフ先輩に関しては、天上という他ありませんわね」

トイレに行く前の会話を思い出し、そう返答する。

なにせシンボリルドルフは碌に敗北をしたことが無いことでも有名だ。

あまりに負けなすぎ過ぎて数少ない敗北したレースの方が、ファンの間で語り継がれるというのだから化け物ぶりに拍車が掛かっている。

そしてWDT——ウインタードリームトロフィーという殿堂入りレベルのウマ娘たちを集めたレースでも、真つ先に呼ばれる常連。

まだヒヨッコでしかないキングヘイローには遠い存在だった。

しかしそんな彼女の言葉にヒシヨウマルはゆるゆると首を振る。

「いやーそっちじゃなくてね、テレビの前にいる二人だよ」

「……ターボ先輩とマヤノ先輩が、ですか？」

小首を傾げるキングヘイロー。彼女の言葉の意味は少し分からない。

確かに二人も既に勝利している身だ。

しかし常日頃から聞かされていたが、二人にとって3勝というのはそこまで大きなという話だった。

同期ならもつと多くの勝利数を挙げている者もいるし、GIなどの大レースで勝利した者もいる。

そんな剛の者に比べれば、自分たちはまだまだという話だ。

それでなくとも勝負とは水もの。運がいい、相手が良かった、そもそもレースの格が低い等々——ツイスターボとマヤノトップガンは謙遜なのか自慢げに語ることは少ない。

坂戸も上を目指すなら、まだステップレースに過ぎないと断言していた。

そういうものなのかとキングヘイローは受け取っていたのだが、ヒシヨウマルは違うと言う。

「1勝——そのたった1勝がね、人によつては重さと価値が凄く変わるんだよ。他の誰かが軽く1勝をする横で、どんなにトレーニングを重ねても届かない子つてのが出てくるの」

「それは……」

確かに頷ける話ではあった。

誰かが勝つということは、誰かが負けるといふことと同義である。

そしてウマ娘のレースはチーム戦ではなく個人戦。一人が勝てば、他の全員が敗北となる過酷であり、残酷なものだ。

キングヘイローにとつても、それは分かりきつてゐる当然の事実。しかしヒシヨウマルが語る言葉の一言一言には経験者だからこそその重みがあった。

「その、ヒシヨウマル先輩は——」

聞いて良いものか、悪いものか。

だが勢い余ってキングヘイローは聞いてしまう。

相手はどこか寂しそうな、それでいてなぜか晴れ晴れとした表情を浮かべる。

「あははっ、そんな神妙な顔しなくていいよ」

「そう、ですか？」

「うん。だって17戦0勝なだけだからね。戦績的には0—0—2—15かな？」

あつけらかな様子でヒシヨウマルが言う。

レースの戦績は1、2、3着とその他という区分で用いられることが多い。

ヒシヨウマルの場合は1、2着がゼロ回、3着が2回、そして4着以下が15回とい

うことになる。

彼女の戦績は一般的には凡庸なんて言葉では表せない。

ある意味、チームヘレヴァティンが対外的に言われている凡人——言わば才能がない

人そのものの成績だった。

勝つか負けるかなんて次元の話とはほど遠い。

「……なんか申し訳ありません」

「だから良いって。後輩ヘイローは変に気を回しすぎだよって、ね？」

手をヒラヒラさせながら苦笑いをする。

しかし気を使わせないようにしているが、全てを隠しきれているわけではない。

ヒシヨウマルがマヤノトップガンやツインターボを眺める姿は、どこか眩しいものを見る目だった。

「まあ、なんとというか、さ」

両手を組んで伸びをする。

ふわりとサイドテールが揺れた。

「レヴアティはやる気ないチームなんて言われてるけど、実際のところみんな割とやる気満々なわけよ」

「それは勝ちたいという意味、ですよね？」

「そりゃそうだよ。いくらふんわりした気持ちでトレセン学園に来たって言っても、みーんな心の片隅ではウイニングライブで称賛を受けている姿を想像しちゃうものよ。特に私みたいな下手に2、3着を取ってウイニングライブをやった子は特に、ね」

「年頃の女の子はみんなライブを憧れてるんだよ」と付け加えるようにヒシヨウマルが言う。

以前、ツインターボからレヴアティに足りないのはやる気と才能だと噂されていることは聞いていた。

実際チーム成績は規模に比べるとかなり悪い。ワーストとまでは言わないまでも、お

世辞にも上位を争う陣営ではない。

同時に故障の発生率などは非常に低く、骨折などの重症はチームの歴史においてもほぼ皆無。レースに出すことを心配する保護者からの信頼が非常に厚いという評価もあつたが。

（非常に複雑な想いを抱いてらつしやるようですわね……。それに他人事ではありませんし）

成績に関してはキングヘイローも他人事ではない。

自分が同年代では実力上位という自信はあるものの、レース上で実際に真剣勝負で戦つてはいないのだ。

マヤノトップガンなどのような普段は笑顔でいる少女でも、こと走ることににおいては誰よりも真剣な表情で行う。

連敗に次ぐ、連敗で何も為せないまま終わるといふ未来は結果を残さない限り、常に存在している。

先日、マヤノから聞いたトレーナーの一件もあつてか、グツと静かに拳を握つて気合を入れ直す。

そんなキングヘイローにポンとヒシヨウマルが背中を叩く。

「食堂でも言ったけど、だからこそキングヘイローにはみんな期待してるんだ。勝利す

るだけでも嬉しいからね」

「……自分自身の勝利ではないのに？」

「そりや自分が勝てれば一番だけど、勝負の酸いも甘いも嫌になっちゃうほど味わつてるのがチームヘレヴァティだからね。チームメイトが1勝するだけでも貴重だし、とっても嬉しい。それが頑張り屋で、真つすぐな後輩なら尚更。……だから言ったでしょ、みんな応援してるって」

「あの時はヒシヨウマル先輩個人の話かと思いましたが違うんですのね」

「これでも年長者として各グループの子たちと交流することが多いからね。あなたの話は結構頻繁に出てるよ。……ま、変にプレッシャーとか感じなくていいと思うけどね。うちらは画面向こうのスポーツ選手を応援するような心境で、やいのやいの言ってるだけだから、ガヤもいいところよ」

「それもそれで気になりますけど……ふう、そうですわね」

つつかえていた物を吐き出すように一息。

どうやら期待の新人ということで、人知れずレヴァティの他の面々から思った以上に注目されているようだった。

観察するように相手をじっくり観察し、言葉を思い返す。

ヒシヨウマルに嫌味のような感情は見え隠れしていない。声音からも嫉妬などの負

の感情も見受けられない。

こういった時の感情の機微を察知するのは得意だ。腹芸ならそれなりに出来るのだから。

そしてその経験から相手が感情のなんとなく察知できる。

——純粋にキングヘイローを応援したいという想いで語っているのだろう。

レヴァティも面々は最低でも100名以上はいる大所帯のチームだ。

その仲間たちの期待を一身に集める——通常なら緊張の一つでもしよう。

だがしかし、

「期待に応える者は私が目指すべき道と違たがわない——チームメイトの皆さんの期待には、勝利の花束と一緒にキチンと返礼してみせましょう」

「……本当に凄い自信だね」

「当然です。もちろん虚勢ではなく、長年積み上げてきたものがあるからこそですけどね」

自信満々に胸を張って答える。

プレッシャーなど糞くらえとばかりの返答だ。見方によっては傲慢とさえ受け取れるかもしれない。

ヒシヨウマルは最初こそ自信過剰にも見えるキングヘイローの答えに驚いていたが、

クスリと笑う。

そして最後にとばかりに、小さく、しかしハッキリした声で伝えてくる。

「——みんなの想い、お願いね」

「ええ、期待の新星キングヘイロー、しかと受け止めましたわ。想いの1000や2000、たくさん載つても大丈夫、というやつでしようか」

「とことん大きく出られると、逆に清々しいねえ」

茶化すように笑いかけるとヒシヨウマルも同じように笑った。

マヤノトップガンといい、ヒシヨウマルといい、そしてトレーナーの一件といい随分と他者の想いを預けられている。

しかしキングヘイローは特に気負うことはしない。

誰かの期待を背負うことに心地良ささえあつた。

そんな心境を覚えつつ、テレビ画面の方に視線をやる。

別のウマ娘のシーンに移ろうとしていた。

話しながらも画面の内容はキッチンと把握はしている。

この後もじつくりレースを鑑賞して歴代強者たちの姿を目に焼き付けるのだ。

それが後々のモチベーションアップにも繋がる。

「さて、次に見るテープでも探しましょうか——と？」

一枚目に入れたシンボリドルフのシーン以外に、あといくつか入っているか分からないが、テープの準備はしておいた方が良さだろう。

画面前では相変わらずマヤノたちがわいわい騒いでいる。

白熱したレース展開にすっかり魅入っているようだった。

その姿に少しだけ呆れつつ、キングヘイローは段ボールの中身に手を入れたとき、コツンと偶然手に触れた感触を覚える。

適当にこれで良いかと拾い上げたそれは、随分古めかしいテープだった。

そしてラベルには、

「テンポイントのレース集、ね。これで良いかしら」

目を細め、逡巡するが持ち上げる。

記憶が正しければ色々といわく付きのウマ娘だったとうろ覚えで思い出すが、キングヘイローは意に介さずテープを眺めていた。

「坂戸トレーナー、ちよつとよろしいかしら」

「うむ？ どうかしたのかの」

「今見ているレースが終わったら、こちらを見てもいいでしょうか」

「ふうむ、それか」

坂戸は髭をなぞりながらキングヘイローが渡してきたテープを見て考え込む。

いつもの長考癖だ。

ただ古い代物だからか、テープの伸びを確認したり、日付を確認したりと色々調べている。

そこまでする必要があるのでろうかと内心思いつつ、様子を窺っていると、

「……すまん、確かこれは中身が駄目になったやつじゃな」

「あら、そうなんですか」

「うむ。古いテープなだけに寿命を迎えているのがたまに混ざっておるんじゃ。一応レヴァティの事務所のパソコンに映像データが残ってはいるとは思いますが、今回の特訓ではさすがにな」

どうやら不良品を引き当てただけのようだった。

それでは無理もないとキングヘイローも引き下がる。

「仕方ありませんわね。何かおススメとかありますか」

「そうじゃな……同じ古い繋がりだが、DVDにハイセイコーというウマ娘の映像を残しておる。かなり昔だが、今ではなかなか見ないテクニクなどを見せる場合もあるから勉強になると思うぞ」

「ではそれでお願います」

「うむ。とりあえずこれは別に分けておこう」

そう言つて坂戸は扉を開けて部屋を出ていく。

その姿に若干の違和感を覚えたが、

「まあ、続きを見ましようか」

特に気にせず特訓の続きを開始することにした。

以降は特に大きなイベントもなく、キングヘイローたちは夏合宿を消化していく。

時折、休憩時間と称してダイビングや自然観光を楽しみながら二週間が過ぎていった。

☆

「——まあ、そんなわけで私は夏を超えて更なるパワーアップを測りましたわ」

「ふくん、キングヘイローのところも色々やってるんだねえ」

夏合宿が終わり、季節も秋へと向かうトレセン学園。

キングヘイローは久しぶりに会ったセイウンスカイに合宿でのことを軽く話していた。

もちろん弱点の話は省いてだが。

セイウンスカイはというと眠たげな瞳をとろんとさせながら軽く欠伸をしていた。

「随分、眠たそうですねですけどるんでいるのではなくて?」

「こつちもトレーニングは積んでるからね。キングヘイローこそ元気一杯だけど、夏場は本当に練習してたのかなあ?」

「もちろん。手を抜くなんて選択肢はありませんもの」

にやりと笑いかける相手。小悪魔っぽい表情でからかってくるが、キングヘイローも想定していたので受け流す。

そんな二人が笑い合いながら静かに火花を散らしていると、元気よく教室の扉が開け放たれ、ピンク色の元気娘がやってくる。

桃色の髪が特徴的なウマ娘——ハルウララだ。

「ねえねえねえ! セイウンスカイやキングヘイローは聞いた!」

扉の近くにいたキングヘイローたちに目を向けると近づいてくる。

教室内では地味に話すことが多くなっている相手だ。

「あらウララさん、そんなに急いでどうしたのかしら」

「何かビッグニュースでも入ったのかな」

「それはもうビッグニュースだよ! なんかね、あのね、海外から転校生がやってくるんだって!」

「海外からの転校生、ですか」

つまりは帰国子女というやつだろうか。

日本国内ならまだしも海外とは珍しい。

セイウンスカイも眠たそうな顔をやめて興味津々で耳を立て始めた。

「場合によつては、結構重要なニュースかもしれないね」

「ええ。海外のウマ娘はかなり手練れが多いと聞きます。もしかすると——」

——かなり強敵なのではないか。

そんな言葉が出そうになったとき、キングヘイローたちとは別の方にある扉——教卓がある方の扉が開け放たれる。

入ってきたのは二人のウマ娘。

一人は陽気そうな雰囲気、黒髪。顔に両目をマスクのような物で覆っている。

もう一人は物静かな出で立ちの少女。マヤノトップガンと同じ明るい栗毛だ。

「ワターシは、エルコンドルパサーです！ よつろしくお願いしまーす」

「今日よりこのクラスへ転入することになったグラスワンダーと申します。皆様、以後お見知りおきを」

大物の雰囲気纏った二人の少女が突如としてキングヘイローたちのクラスへと転入することとなった。

怪鳥とワンダーウーマン、青雲とお嬢様

海外からの転校生というエルコンドルパサーとグラスワンダー。

彼女たちがやってきてから数日が経過していた。

ウマ娘が海外からやってくるのも決して珍しいわけではないが、やはり物珍しさは湧いてくるもの。

興味津々なクラスメイトたちがワラワラと二人の周囲に飽きもせず集まってきていた。

両者は教室の一角で輪を形成しながら、それぞれ元気に会話している。

「あはは、日本ではそういう所もあるんデスね」

「そうなのよ。楽しいし、エルさんも今度一緒に行ってみよう！」

「グラスさんは喫茶店とかどうですか？ トレセン学園の周辺には良いお店が一杯あるんですよー」

「ええ、もちろん。楽しそうですし、道もまだ不安なので是非、教えていただきたいです」
そんなクラスメイトたちとの楽しそうな会話が聞こえてくる。

まだ日は経っていないものの、日本と違いフレンドリーさが要求される海外出身だけ

らか、あつという間に馴染んでいた。

グラスワンダーはグラス、エルコンドルパサーはエルと愛称も既に出来上がっていることから窺える。

談笑の絶えない休憩時間の教室。

大体が二、三人ないし、集団を形成している。

その中でキングヘイローはというと、グラスたちの輪には加わらず、ノートとシャーペンを手に、一人静かに何やら記入していた。

「これが、それで——やはり、上位か。なら対策は——」

ぶつぶつと呟きながら真剣な表情でメモと取っていく。

夏の残暑ざんしよが残る日々が続いていて、頬は僅わずかに紅潮している。

思い出したように汗が筋となって顔を伝っていくが気にしない。

小笠原での特訓のおかげか暑さに耐性ができているせいでもあった。

しかし理由は単純に暑いからというだけではなく、前の時間が体育だったことにも起因する。

キングヘイローはその体育での所感をノートに記していた。

ひと段落ついたのでノートを閉じると軽く天井に視線を向けながら息を吐く。

「……ふう、ままなりませんわね」

「なーが、ままならないのかな、キングヘイロー」

「聞きながら勝手にノートを開こうとしないでくださいな」

青空混じりの芦毛で、セミシヨートの少女——もはやお馴染みとなったセイウンスカイだ。

さりげにキングヘイローのメモを覗き見ようとしてくるがきっちり手でガードする。折角調べた成果をみすみすライバルに晒すわけがない。

キングヘイローのガードに別段、気を悪くした素振りも見せず、セイウンスカイは肘をつけて黒板側に顔を向ける。

グラスやエルたちの輪には加わらず、遠目から観察するように二人を眺めていた。

「体育での動きを観察してたのかな。研究熱心だねえ」

「分かっているならノートを覗く必要もないでしょうに」

「いやあ、ちよつとした挨拶みたいなものだよ」

「そんな挨拶はお断りですわよ。それより、そっちは加わらなくてよろしいのかしら。私と違って積極的に交流しているのでしょうか？」

グラスワンダーとエルコンドルパサー——彼女たちに対するキングヘイローとセイウンスカイが取った行動はまったく正反対のものだった。

キングヘイローは挨拶もそこそこに、両者へのアプローチを積極的に行わなかった。

そもそも物珍しさからクラスメイトが集まっている状態というのもあるが、距離を置くように動いている。

逆にセイウンスカイは持ち前のゆるさを武器に事あるごとに交流を持っていた。

元々社交的な性格というのもあるが、ただそれだけで終わらないのが彼女のいやらしいところでもある。

「そうなんだけどねえ——で、キングヘイローはどう思ったの?」

瞳を覗き込むように聞いてくるセイウンスカイ。

いつものふわふわとした雰囲気だが、抜け目のなさも感じられる彼女だ。

数か月の付き合いで既にお互い分かっているといったところ。

トントンと人差し指で机を叩いたあと、指を一本立てる。

話してくれたら、セイウンスカイからも情報を渡すという意思表示だろう。

情報収集の仕方が違う二人だけに有意義な情報が得られるのは分かっている。

そして勝利を目指すためなら最善を尽くすのがキングヘイローだ。

そのため、特に異議を唱えないまま徐に話し始める。

「……体育の動きを見た感じでは、グラスワンダーさんは差しか追い込み。エルコンドルパサーさんは自在の脚質を持つタイプでしょうね」

「本当?」

「ここで嘘をつくほど不義理じゃないですわよ。それにこちらはこちらで、信頼できる筋からいただいた情報なのだから感謝して欲しくらいね」

セイウンスカイから見えないようにノートを開きながら観察した結果と、いくつかの情報筋からまとめた結果を話す。

あつさりと開示したことに相手は微妙に疑っていたが、「ふくん」と鼻を鳴らすと興味を持ったように拳一つ分だけ近づく。

「なるほどねえ……でも、随分と断言しているようだけど根拠は？」

「独自の情報網はあるけど、最終的な判断は勘ですわよ。空気を揺らすほどの末脚を持つグラスワンダーは、普段の様子も相まって基本的に前で争い合うタイプではない。エルコンドルパサーは、ハナをきるような動きもできるけど、とにかく柔軟性があるから幅広い距離に対応できる——知り合いにいますが所謂、いわゆる天賦の才を持つ方でしょうね。悔しいけれど」

そう断言したキングヘイローだったが、実際のところ単純に勘だけが根拠ではない。夏合宿で行ったレース鑑賞会——それが別の意味で役立つていた。

本来はレースに集中して雷などの外因的な事象を気にしないようにするトレーニングだった。

実際、多少ではあるが効果はあり、現在も悪天候の際はレヴアティにて鑑賞会を継続

的に行っている。

もともと向上心や勤勉さが一際強いキングヘイローとあってか、レース内容もつぶさに記憶しており——それがグラスやエルの能力を理解する判断材料となっていた。

セイウンスカイに勘と言ったのは、トレーニング内容を突っ込まれたくないための方便だ。

（まあセイウンスカイなら、そこら辺はさほど気にしないかもしれませんが。……それにしても）

問題は件の二人——グラスワンダーとエルコンドルパサー。

明らかに高い素養を持つ彼女たち。

それなりにウマ娘たちへの観察力を鍛えていたキングヘイローにとって、非常に厄介だと感じていたのはエルコンドルパサーの方だった。

エルを見て、連想するのはチームヘレヴァティンの先輩——マヤノトップガン。

根本的な方向性や容姿は違えど、何となく纏う空気まとが似ているのだ。

口にするると軽い言葉になってしまうのでセイウンスカイには言わなかったが、『天才』という表現が妥当だと感じていた。

（未だ底を見せないセイウンスカイだけでも頭が痛いのに、更に2人も強豪がやってくるとはね……）

トレセン学園でも通常やるような学校のカリキュラムが存在しているため、体育などの身体を動かす授業がある。

高速で走れるウマ娘同士とあって、それだけでも見ごたえのある試合になりやすい。前の授業ではドッジボールをやっており、グラスワンダーやエルコンドルパサーの同世代とは思えない俊敏な動きを外野からつぶさに観察していた。

二人とも手を抜かない、真面目な性格をしているのかもしれない。

対して授業でも、いつものふんわりポーカーフェイスを維持しているのがセイウンスカイという少女だ。

キングヘイローがセイウンスカイを警戒しているのは、適当に授業を流して自身の身体能力を隠すような素振りをしていることだ。

今も情報収集を欠かさず行っていることから分かる。

ただ情報を集めてライバルの対策を取ろうとする思考が似偏っており、それがキングヘイローとセイウンスカイの仲の良さにも繋がっていたのだが、若い二人にはそこら辺のことは気づいていなかった。

キングヘイローが思案気に心の内で考えていたところ、セイウンスカイが声を出す。

「じゃあさ、提案があるんだけど」

「……………何かしら」

いつもの眠たげなとろんとした瞳に、薄っすらと悪戯つ子のような表情を形作りながらセイウンスカイが口を開く。

「——本丸に二人で突入つてのは、どう？」

ニヤリと口元は三日月を描く。

ある晴れた日のこと、キングヘイローとセイウンスカイによるグラス&エルへの強硬偵察が始まる。

☆

「——で、やることがボウリングってどうなんですか？」

「まあまあ、キングヘイローって普段はあんまり人を寄せ付けない質でしょ？ グラスたちも教室の隅にいる子と話したいなーって相談してたんだよ」

腕を組んで周囲を見やる。

場所はトレセン学園の付近にあるボーリング場の一つだ。

人間やウマ娘たちが楽しそうな様子で、ピン目掛けてボーリング球を転がしている。

二人が話しているのを他所に、本日招いた二人——今をときめく転校生、エルコンド

ルパサーとグラスワンダーだ。

今日は四人でボウリングをしにきていた。

物珍しそうにエルコンドルパサーが周囲を見回す。

「おおう、ここがジャパニーズテンピンボウリングの会場！ ……あんまり大きくない
デスね？」

「こらエル。規模はお店によつて違うんだから変なこと言わないの」

「府中は都会と言つても規模に大小があるからねえ。そこら辺は勘弁して欲しいかな」

「……これもトレーニングになるのかしら？」

テンションが高めのエルコンドルパサーにグラスワンダーが手綱を握るように制御
している。

それを見てセイウンスカイが苦笑いしているのを見ながら、トレーニングになるのか
などぼんやり考えていた。

本来はレヴアテイでのトレーニングもあつたのだが、坂戸に相談したところ「友人と
交流するのも大事」だとして、軽めのメニューを行つて切り上げている。

キングヘイローとしてはきつちり練習をこなしたいとの気持ちが強かったが、レース
本番に向けての休養も兼ねていると諭されてしまつては仕方ない。

突如として空いた時間をセイウンスカイたちと過ごすことになつていた。

「それにしても」とキングヘイローが呟くと、振り向いたセイウンスカイに話しかける。

「セイウンスカイ、私は別に人を寄せ付けない雰囲気は出してないわよ」

「えーいつも休憩時間にノートを開いてメモを取ったり、勉強してたら誰だって話をかけ辛いよ?」

その返答になるほどと頷く。

ライバルの観察に、授業に、レースにと時間はいくらあっても足りない。

夏前なら多少は余裕もあったがメイクデビューも近づいているとあつて忙しくなっていたのだ。

そういう意味ではセイウンスカイの指摘ももつともなのだが。

「ああ、そういうこと。でも私もやらなければならないことが多いので、善処しますとしか言えませんか」

「遠回しに否定するねえ。キングヘイローって変なところ頑固だよ」

「さてどうでしょうね」

何事もゆるくいくセイウンスカイと何事も真面目にこなすキングヘイロー。

彼女の突っ込みを適当に受け流す。

二人がいつものやり取りをしていると、その様子を見ていたグラスワンダーがくすり

と笑う。

「ふふっ、御二人はとても仲がよろしいのですね」

「別に腐れ縁的な間柄だと思っただけなあ」

「倒すべきライバルなだけです。……この際ですからハッキリ言っておきますけど」

「およ?」

セイウンスカイだけでなく、グラスやエルの方にも語り掛けるようにする。

グラスワンダーに釣られるようにエルも視線を向けてきた。

「——この場にいる全員がライバル。来年には三冠ウマ娘の座を賭けて戦うのですから、覚悟しておくことね」

背筋を伸ばし、気合を込めるように勢いよく、びしっと指を差して宣言する。

トレセン学園には、同年代かつ多くのウマ娘たちがいた。

もしかしたら未だ現れない、強敵が潜んでいる可能性もなくはない。

しかしライバルのチェックを欠かさないキングヘイローが、現時点でピックアップして、競い合う好敵手——おそろく激戦を繰り広げると予想しているのは目の前にいる三人の少女たちだった。

突然のライバル宣言に、呆気に取られていた一同だったが、

「ふふっ♪ なるほど。キングヘイローさんがどういう方か何となく分かってきました

た。……でも私は負けませんよ？」

クスリとグラスワンダーが口元に手を当てて上品に微笑む。

教育の行き届いた、草原を思わせる優雅な笑みだ。

しかし溫和であっても鬪志という雰囲気は誤魔化せない。

後ろに陽炎が揺らめくような独特のオーラを纏まとっていた。

続いて両目をマスクで覆っている少女——エルコンドルパサーも白い歯を見せて、快活そうな笑顔を見せる。

「熱いハートを持ったウマ娘のようデースね！　で〜も〜……一番になるのはワタシですよっ！」

「望むところよ。でも最後にターフの一番先を駆け抜けているのは、このキングヘイローだけだね！」

胸に手を当てふふんと鼻を鳴らす。

グラスとは打って変わってエルは分かりやすいほど勝気な表情だ。

強者の余裕と言ってもいい。自分の勝利を信じてやまない自信家。

それは自らの実力を頑なに信用しているからであり、ただの虚言の類ではない。

何処までも飛ぶように走り去ってやろうという矜持をキングヘイローは感じていた。対するは強敵。

それは紛れもない事実で悩ましいもの。

しかし自然と口元には笑みを浮かべていた。

相手が強いということは、それを倒せれば自身の輝きにもなる。

いつかレースで戦うことを想像し、闘争心が湧いてきていた。

「燃えているところ悪いけど今からレースをするわけじゃないし、とりあえずボウリン

グで勝負しよっか」

「貴女は相変わらずマイペースですわね……」

「私がというより、キングヘイローが燃えやすい質なだけだと思うけどねえ。ほら早く靴とボールを選ばないと寮の門限になっちゃうよー」

三者三様の様相を呈している者たちを他所に、いつの間にか準備を済ませていたセイウンスカイ。

若干、氣勢が削がれた気もするが気を取り直して準備に取り掛かる。

セイウンスカイと離れ、三人は室内に備え付けられている靴置き場で室内用のシューズに履き替える。

「——あ、そういえば言い忘れてましたわ」

「? どうしたんですか?」

グラスワンダーが声に反応する。

いそいそと履いている途中でキングヘイローは忘れていたとばかりに話し出す。

「今回のボウリングはグラスワンダーさんやエルコンドルパサーさんの身体能力を調査したくて、ボウリングに参加しましたので、一応伝えておこうかなと」

「……あら、それは話してもいいんですか。普通は秘密裏に調べようとするものですが」
「色々と裏で調査はしてきましたが、こそこそするのも馬鹿らしくなってきましたね。勝利のために最善を尽くすのが私の信条ですが、正面からぶつかって勝つ——それが一番気持ち良いやり方でしょう？」

あつさりと今回の目的をバラす。

キングヘイローの突然のライバル宣言に対し、真つ向から受けて立つ構えを見せた二人。

その二人に対し、変にこそこそしても悪い気がしたのだ。

もちろん勝つために必要な調査は継続するだろうが、内心を話してしまっても良いと思っていた。

少なくとも目の前のライバルたちは、いつだって正々堂々と戦うだろう。

それに恥じない自分でいたかった。

何より偉大な母親たちに胸を張って会えるように頑張りたいのだから。

「ふう〜ん、キングヘイローは私たちを随分買ってるんデスねえ」

「当然。これでも強いウマ娘を見分ける嗅覚には自信があるもの。グラスワンダーさんとエルコンドルパサーさんが並大抵の相手ではないことくらい——」

「エル。エルで良いよ。長いでしょ?」

「……分かりましたわ。それにしてもエルさんは普通に喋れますのね」

変なイントネーションで「デスデス」喋る口調から一転して、普通の日本語らしい発音で喋れることに、思わず突っ込みを入れてしまう。

対するエルはてへつとわざとらしくおどけると、

「おっと。エルはアメリカからの帰国子女なので、こつちでよろしくお願いしマース——」

「なぜ口調が——いえ、何か事情があるかもしれませんし、追及するのも野暮かしらね」
考えてみればツインターボという後輩キャラを作っている人物を思い出す。

もしかしたらエルコンドルパサー——エルにも理由があるかもしれないと考え、あまり深く考えないことにした。

「ふっふっふっ、それが賢明デース。これには山よりも低く、海よりも高い理由が——」
「エルは間違ったイントネーションで日本語を覚えてしまったので、単にそちらの方が話しやすいから喋っているだけです。公園の池のように浅い理由しかありません」

「アウチ!? グラス、いきなりバラさないでくださいよ——」

「キングヘイローさんの親切心を利用してイタズラしてはいけません。めつ、です」
両手の人差し指でバツテンを作りながら、グラスが子供を諭すような言葉で駄目出
する。

知り合いの突然の裏切りに、エルは観念したようにがっくりと肩を落とす。

「うう〜ソーリー、まあそういうことデース……」

「いえ、私としてはどちらでもいいのだけれど」

口調に関する細かりあれこれをつ突つ込んででも仕方ない。

ただグラスワンダーにとってはあまり良くないことだと受け取っているらしく、しき
りに謝っていた。

異国から来た二人とあつてか何かと周囲に気を使っているのかもしれない。

そんなやり取りをしていると、

「三人ともー、待ちくたびれたんだけどー」

焦れたようにセイウンスカイが、自慢の尻尾でペシペシと壁を叩いている。

彼女なりの抗議のようだった。

肩を竦め、互いを見やる。

「ごめんなさいね——それじゃ、気を取り直してボウリングでも楽しみましょうか」

「そうですね。チーム分けはどうしますか？」

「時間もあまりないし、バラバラでいいんじゃない。ついでだから、負けた子はジュース奢るってのはどう？」

セイウンスカイがいやらしく笑う。

元々は互いに競争することで身体能力を調べる予定だったのだが、キングヘイローとしては純粹に楽しもうという方向にシフトしていた。

（セイウンスカイには悪いけど、私の中では今日はもうお開きな気分だから普通に楽しみましょう。トレーナーも、おそらくそれを望んでいらつしやるでしょうし）

レースが一番とはいえ、学生同士。まだまだ学園生活は続く。

ライバルではあるが、ピリピリした関係よりも肩肘を張らずに済むだろう。

ボールを拭きながら遊ぶ準備をする。

奢るといふ単語に反応したのかエルコンドルパサーが右手を振り上げながら。

「それ良いデスねー、じゃあ早速やりましょう。キングヘイローもそれで良い？」

「もちろん。貴女たちとの前哨戦として、ボウリングも華麗な勝利で終わらせますわ」

「言いましたねー、絶対負けないうデスよっ！」

「望むところっ！」

不敵な笑みを浮かべながらお互いに睨み合う。

勝負をするからには全勝するつもりで戦うのがキングヘイロー。

今日も今日とて彼女は勇ましく戦うのだ。

それを横目にセイウンスカイとグラスワンダーが話す。

「なんか気付かないうちに仲良くなったみたいだねえ」

「そのようですね。たぶんエルと気が合うのかもかもしれません。ああ見えて、エルは負けず嫌いですから」

「あー、それはキングヘイローと噛み合うかもねえ。負けず嫌いという言葉が服を着て歩いているのがキングヘイローだし」

芦毛の少女は嘖き出すように苦笑いする。

数か月ほどの付き合いだったので、大体の性格は把握していた。

その言葉にグラスワンダーは少しだけ困ったように微笑む。

「ふふふ、本人に言ったら怒られますよ。……さて、私たちもやりましょうか」

「そうしよつか。色々考えてた気がするけど、今日はもうどうでもいい気分になってきたよ」

「? 何かあったんですか?」

「本当にどうでもいいことだから気にしないでいーよ。ほらほら始めよう」

四人はワイワイ騒ぎながらボウリングを楽しむ。

来年にはライバル同士。しかし今日はただの親しい友人として笑い合う姿がそこに

はあつた。

——ついでに碌にボウリングを経験してないのに、謎の自信で勝負を挑んだお嬢様が、ガーター連発で惨敗している姿も見られたがそこはご愛敬。

☆

そんなこんなの日々を過ごしていたキングヘイローであつたが待ちに待つた日が近づいていた。

正面で真面目な雰囲気醸し出す坂戸トレーナーがおもむろに口を開く。

「——さて、マヤノトップガン、キングヘイロー」

「はい！」

「直に10月。レースが近づいてきた。これからは最終調整として強めにトレーニングを行つていくぞ！ えいえい、おーじゃ！」

気合を入れるためか拳を天井に突き上げる。

マヤノは楽しそうに続いた。

「おおーじゃ♪」

「おおーじゃっす？」

「お……おおーじゃ……？」

「じゃ、は真似せんでもええ。とにかく特訓じゃ！」

「「はー！」」

マヤノはノリよくジャンプし、ツインターボは首を傾げ、キングヘイローは謎の振りに戸惑う。

一同が困惑する場面はあったものの、レヴァティは一丸となって更なる練習態勢に入り始める。

トレセン学園に入って数か月が経過していた時期。
キングヘイローのデビュー戦は着実に近づいていた。

諦めの悪いウマ娘

大地を蹴り上げ、息を切らしながら走り続ける。

トレセン学園に来てから既に半年ばかり。キングヘイローは今日もまたトレーニングに励む。

「はっはっはっ……くっっ！」

一定速度を保ちながら息を切らさないようにする。

脚は早く、心拍は一定、姿勢を正し、常に最短最善のルートをシミュレート。

動きには余裕を持たせ、無理はし過ぎない。末脚を残すためのスタミナ維持に努める。

フォームを堅持し、レース中の集団に揉まれながら疾走するイメージ。周囲には一流のウマ娘たちがいると仮定する。

レース中に自身の最高の性パフォーマンス能を發揮出来ない状況で何をすべきか——練習中でも忘れないように心の隅に置いておく。

「う、つく。……よし、仕掛ける！」

風を感じながら一気に急加速。

足裏に神経を集中させて、自身で踏み固めた即席の地面を蹴るようにして飛び出す。体操服姿のキングヘイローは鋭くインを切り込むようにコーナーを曲がっていった。何本か走ったことでぬかるみ始めた内ラチ沿いを走り続ける。深く地面を踏みしめたことで運動靴が汚れていくが気にしない。レース中にそんな無駄なことを考える暇などないのだから。

「——っ!!!」

加速した後にはやることは少ない。

ただ圧倒的な速度で前へ前へと行く。

先行していたライバルを追い抜き、差しや追い込みを見せるウマ娘たちを振り切り、ゴール板を駆け抜けるイメージ。

今回は荒れている内側の芝を他のウマ娘たちが嫌がり、外目を走っていたところを奇襲するという想定で行っている。

茶褐色の髪を激しく揺らしながら、キングヘイローはそのまま予定していたゴール地点を一旦に駆け抜けていった。

過ぎたあとには息を整えるように軽いランニング——荒い息を吐きながら、ストップウォッチを持っている坂戸に話しかける。

「はあ、はあ……はあ……。……タイムは、ふう、どうでしょうか？」

「1分46秒01——何本か走っているからさすがに遅くなっておるな」

「ふあ……ふう……そう、ですか」

「しかしラスト600m——上がり3ハロンは35秒5。疲労状態かつ荒れた馬場を駆け抜けた割にはかなり良いタイムが出ておる。地力が付いてきたならよし、だが道中で脚を溜めすぎているかもしれないから、そこだけは注意じゃな。脚を残しては悔いも残ろう」

「そうですね。次は修正しておきます」

脚を残す、あるいは脚を余す——要はスタミナを残したまま、ゴール板を過ぎてしまった状態だ。

レースでラストスパートを仕掛けるタイミングが遅すぎると発生しがちである。

疲労が表に出やすいラスト600mのタイムは、そのウマ娘の地力を測るのに丁度良い。

しかし坂戸の目にはペースにこだわり過ぎてスタミナを過剰に残してはいないかという懸念があったのだろう。

練習なので全力を出し過ぎるのも問題だが、流し過ぎてもいけない。

そういったことも考えなくてはいけなかった。

デビュー戦は1600mのコース。それを想定した同距離の単走トレーニング。

併走トレーニングも行いたいところだが、マヤノトップガンやツインターボも次レースが近づいているため、本日はそれぞれ別メニューをこなしていた。

背筋を伸ばし、疲れた様子から普段の体勢を戻す。

息を整えながら、キングヘイローは青空を見上げる。

残暑も最近では和らぎ、芝コースをダッシュしても無駄に汗が流れることも少なくなってきた。

高く澄み切った秋空というには早い。本日も穏やかな陽光が府中に降り注いでいる。

熱中症などのリスクがある夏が過ぎたことで、練習を本格的に行うチームも多い。練習中であろう走っている最中の掛け声も、トレセン学園内にいるとよく聞こえてくる状態だ。

「……学園全体が熱気に包まれているようですね」

「ほっほ、この時期はみな気力十分、戦意十分な頃合いじゃからな。仕上がり早い者はG1である『朝日フューチャーティステークス』への出走も狙っておる。新たなウマ娘たちが芽吹く時期だ」

初夏に入る頃からデビュー戦も含めてウマ娘のレースも多くなってきた。

秋になれば更に開催日が増えていき、周辺施設も賑やかになる。

そのせいか府中全体が活気づいているように感じていた。

事実、この時期には新世代やトウインクルシリーズの新たな歴史を見ようと熱心なファンほど足を運ぶ。

他人に影響されやすいわけではないが、キングヘイローも自然と気合が入っていた。

「そういうえば……」

レースついでに確認しておこうと坂戸に尋ねる。

「私のデビュー戦は10月の上旬——で、よろしいのかしら」

「ああ、すまん。細かい日取りを伝えておらんかったか——10月5日、京都の芝1600mのコースじゃ」

「決まりましたのね」

「うむ。誰かのデビューしていく姿を、指を咥えて待つのは終わりじゃ。………やれるか？」

坂戸は短い白髪の手がそよ風に揺られながらも、温和な表情は崩さない。口調も同じ。

しかし最後の言葉だけは少しだけ低く、最終確認をするように問いてくる。

その言葉に返す言葉は決まっていた。

キングヘイローは茶褐色の前髪を左手でバサリと振り払う。癖ともいえるお馴染み

の動作だ。

そして髪の下から現れた表情もまたお馴染みの顔。

自信満々で、迷いなどない。

「何を今更。私はキングヘイロー——ダンシングブレーヴ母様とグツバイヘイロー母様の娘で、どのウマ娘よりも先頭を疾走する者。調子はいつも最高で最善で、なにより完璧に仕上がってますわ」

誰よりも努力してきた自負がある。

誰よりも能力がある自信もある。

大言壮語ではない。

この日のために積み重ねてきた、重みが違うのだ。

だからこそ揺るぎない自信が彼女を支えている。

キングヘイローの自信過剰ともいえる返答に、しかし坂戸は静かに頷く。

「そうじゃ、お主が積み重ねてきたものを披露すればええ。そうすればおのずと結果は付いてくる」

「もちろんそのつもりです」

「——時にキングヘイロー。お主がレースを通じて求める目標はなんじゃ」

「目標、ですか？」

「うむ。本来はレヴアティに来た時に聞いておくべきなのだったが、出会いが出会
いだったのでな。今更で悪いが確認しておきたい」

坂戸のそう聞かれ、キングヘイローは改めて過去の出来事について思い返す。

元々レヴアティに入ったのはマヤノトップガンと偶然出会った経緯があつてのもの
だ。

丁度チーム選びに迷っていたところに、昔からの老舗チームで看板や規模に惹かれて
入った面もある。

マヤノとの併走トレーニングを通じて勢いでいった部分があるが、特に後悔はしてい
なかつた。

(……そういえばリギルがどうか言われてましたが、ほとんど忘れてましたわね)

現状も一応だが、レヴアティへの加入が仮入部という立場になっているのを思い出
す。

ただ書類上ではキングヘイローは立派なチームヘレヴアティのメンバーだ。

坂戸からはチームヘリギルへの転入も勧められていたが、既にチームの一員として
動いている身。

ここまで来て何処かへ行くのも薄情者だろう。

「折を見て伝えておこうか」と内心決めたところで、再度キングヘイローは坂戸に対す

る答えを用意する。

すなわち目指していく目標は何なのかという点。

「狙うは頂点しかありませんわ」

「それはWDTかSDT——ウインタードリームトロフィーかサマードリームトロフィーのどちらかということの良いのかの」

歴代の名優たるウマ娘だけが出場できる『ドリームシリーズ』。

通常、ウマ娘たちはトウインクルシリーズで多大な結果を残すと、更に上位のシリーズへ進出できる——というより進出しなくてはならない。

これは一部の實力最上位のウマ娘たちが、實力下位の者たちを蹂躪するようなレースがあつてはならないという理念の下に行われている。

昔は斤量きんりょうという言葉ばハンデ戦で均衡を保たせていたのだが、とある事故を境に疑問の声が挙がり、現代のシステムとしてハンデ戦は形骸化している。

そのハンデの代わりになったシステムの一つが『ドリームシリーズ』——實力最上位の者たちのみで行われるドリームマッチ。

悪い言い方をすれば化け物は化け物同士で競い合えというものだ。

これに出場できるウマ娘は文字通りレジェンドと言って差し支えなく、日本でも屈指の實力者が並ぶ一大イベントだ。

当然、出れるだけ称賛される名誉なレースなのだが。

「ドリームシリーズはお呼ばれされたら、もちろん嬉しいですが……私の狙いではありません」

「ふうむ。キングヘイローなら喜んで出場するかと思ったが意外じゃのう」

キングヘイローの返答に、坂戸は細い目のまま髭をなぞる。

ドリームシリーズへの出場は数多のウマ娘たちにとって夢の舞台。

出走することが非常に困難だと分かりつつも、心のどこかで「いつか自分も」と期待している者も少なくない。

スポーツ選手ならオリンピックに出場するようなものだろうか。

出るだけでも自慢ができる程度には名誉なレース。

だからこそ、坂戸はキングヘイローの返答はいささか意外に思っていた。

肩を竦めながら彼女は答える。

「私だって名誉欲はありますし、目立つことは好きですわよ。ですがそれ以上に大切なものがあるだけです」

「大切なものとな」

「……ええ。凱旋門賞へ出場し、恥ずかしくないレースを行う。それこそが私の一番の夢であり、最短で目指したい目標です」

「凱旋門賞、か。前人未踏のレースであり、日本では聖域にも近い賞——確かにそれは高い頂じゃな。しかしその挑戦は無謀と言われるかもしれないぞ。それでも尚、挑むことができるか？」

「……夢ですから、どうしても諦められません。母からは『諦めの悪い子だね』なんて苦笑されたこともありましたが」

真剣な表情で話しながらも、茶化すように格好を崩す。

尊敬してやまない母ダンシングブレーヴが為した偉業であり、世界最高峰のレース。ひたむきに勝利するために努力し続けるのも凱旋門という高い目標があつてこそだ。

揺るぎない決意の言葉を受け、坂戸は一度瞑目する。

普段の深く思考する姿にも見えだが、静かに佇む様子は並々ならぬ雰囲気にも思える。

そして彼はゆっくりと口を開く。

「——分かった」

聞こえてきたのは短い一言。

呆れるわけでもなく、適当に放った言葉でもない。

ただ全てを受け入れるような、そんな意志が窺える。

「これでもウマ娘の要望はできる限り答えていくチームのトレーナーとしてやってきた

のでな。将来的には凱旋門賞を狙っていく方向でいこう」
「……ありがとうございます」

凱旋門を狙うということは海外遠征をするということである。

トレーナーによつては拒否される可能性もあったため、坂戸が素直に了承の意を示したことに、キングヘイローは内心で安堵していた。

かの賞は日本勢にとつては悲願ではあつたが、トレーナーによつては敬遠する者も当然いる。

特にコース設計の理念は各国で違つており、それに即して芝やコース形態も大きく変わる。

遠征したはいいものの日本の整備された芝とは一風変わった状態に戸惑い、調子を崩したり、怪我をする者も決して少なくない。

ウマ娘に理解があるとはいへ安全重視の坂戸が首を縦に振るかは、ちよつとした懸念事項でもあつた。

ふうと息を吐き、落ち着く。最初にして最大の関門は抜けた。

残る問題はたつたひとつだけ。

「ではまず目指すべき目標も分かつておるな？」

「もちろんですわ。まずは1勝、そしてG1勝利——栄光への道筋は見えています」

「うむ、そういうことじゃな。さて、今の会話で体力もだいぶ回復しただろう。気合を入れて坂路10本、いくぞ！」

「はいっ！」

まずは1勝、とにかく1勝。

坂戸の掛け声に答えるように気合の入った声で答える。

目指すは初戦、メイクデビュー。10月5日の京都での勝負。

キングヘイローにもはや迷いはなかった。

☆

月日は更に流れ、本日は10月1日水曜日。

今日も今日とてトレーニング日和だが、神妙な面持ちでキングヘイローはレヴアティの建物内でいた。

「んん……………ふう。あ……………」

そわそわ、そわそわと。

立っては座ったり、トレーニング器具に触れては離れたりと落ち着かない。

「……………何やってるっすか？」

室内の片隅にある畳の休憩所で、のんびり足を伸ばして座っていたツイインターボからツツコミを受けてしまう。

同じく休んでいたマヤノトップガンは畳に枕を置き、うつ伏せでお休みモードだ。寝ているわけではないが完全に寛いでいる。

そして当のキングヘイローはとうとせわしなく頭部の両耳をびくびく動かしながら、

「落ち着かないんですよ！　こう……期末試験の開始前みたいなピリピリした空気って言うのかしら」

いつもの落ち着いた様子とは違って落ち着きがない。

さしもの彼女も試合前になるとどうしても気が立ってしまうようだった。

今日は坂戸から特記事項があると連絡を受けていたのだが、トレセン学園の方で用事があるらしく、まだレヴァティには来ていない。

結果として心の休まらない状態が続いていた。

「レース前のこの時期は大変だよねえー。あとは走るだけなんだけど不安になっちゃうのは分かるよ」

「その割にマヤノ先輩は余裕そうですね。神戸新聞杯が終わって再来週には、また京都新聞杯が控えていますのに」

「慣れだよなれー。もう1回目だから試合前にジタバタしても仕方ないからねえ」
腕を組みトントンと叩くキングヘイロー。

手持ち無沙汰気味な彼女に対し、同じくレースが近づいているマヤノは至って冷静だ。

元々動揺するようなタイプではないことを抜きにしても自然体といった様子はさすが先輩といったところか。

キングヘイローがデビュー戦の準備をしている合間にマヤノトップガンも夏の休養が明けたあとレースを行っていた。

9月17日に開催されたG IにつぐランクのG IIである神戸新聞杯——そこでは惜しくも2着。

しかし次走で同じくG IIの京都新聞杯では2番人気だろうともっぱらの噂だ。

マヤノトップガンというウマ娘の評判も徐々に上がっており、関係者各位も今まで眠っていたレヴアティの隠し玉かと警戒を強めているという。

特にキングヘイロー、マヤノトップガン、そして根強い固定ファンを獲得しているツインタールボと、スター性のあるウマ娘が揃っていると見た記者から取材の申し込みまであったほどだ。

「菊花賞の前評判では3番人気になるんじゃないかって記者の方が仰ってたじゃないで

すか。話では今年のダービーを取ったタヤスツヨシさんと拮抗しているそうですし」「あれーそうなの？ みーんな油断してくれた方が楽なだけだなあー」

「GⅡなどの重賞で好走できるということはGⅠでも争える証左。神戸新聞杯では5番人気でしたが、京都新聞杯が始まる頃には1、2番人気になりますわよ、おそらく」

「みんなマヤノの魅力の虜になっちゃったのかなあー。菊花賞が待ち遠しいね♪」
キングヘイローの指摘にも別段気にした素振りは見せない。

狙いは菊花賞だけに照準は完全に菊花賞へ向いているのだろう。

そんな二人の会話にツインターボも乗っかる。

「人気者は辛いつすねえ。人気上位だとマークされたり、最悪周囲のウマ娘が全て敵状態になる場合もらしいつすし」

「ターボ先輩も来月のオープンクラスである福島民友カップに、久しぶりに出走するんじゃない？ 大手情報サイトである『ねつとウマ娘』では、ぶつちぎりで1番人気確定だそうです」

「あれま」

情報収集を欠かさないキングヘイローはネットなどで調べ物をするときもある。

その中でたまに使っているサイトの一つが『ねつとウマ娘』だ。

ウマ娘の成績などを記録、収集することを重視しているサイトであり、トウインクル

シリーズの関連ニュースを取り扱ったり、果てはレース前の人気投票なども行っている。

登録者数が日本最大手とあってか、その精度は非常に高い。

レースが近づかないと分からない人気順もあつという間に判明してしまうくらいだ。

そして件のツインターボといえば、独特の大逃げスタイルが大受けしているらしい。

久しぶりのレース出走にファンの間では喜びの声と共に、休暇を取つても見に行きたいという声が非常に多い。間違いなく1番人気だった。

ただツインターボもマヤノと同じく気にした様子はない。

こちらは平常運転というより苦笑い気味だったが。

「まあうちの場合は実力人気というより、マスコット人気が強いっすからねえ。たぶん警戒されているのは2番人気の方っすよ」

「……言つて悲しくなりません?」

「いちウマ娘というより芸人枠なので、これで良いんすよ。うちは最終コーナーまでトップで走り、その後の見事な失速っぷりでファンを沸かせるのがお仕事っすからね」

お馴染みのゴーグルをクイツと動かし、眼鏡のように光を反射させる。

自分の中では決め台詞を言ったと思つているのかもしれない。

その様子に呆れたような表情のキングヘイロー。

「そこまでハッキリ断言すると逆に清々しいものがありますわね」

「ふっふーん、ツインターボ凄いつて褒めてくれて良いっすよ?」

「いえ、褒めるのはあんまり……そこは『大逃げで油断したら勝ち抜いてやる!』みたいな言葉が入っていたら、プラス評価になっていましたけど」

「ガツデム! ヘイローお姉さんの査定は厳しいっす」

「私の査定は勝利を諦めないという実にシンプルな評価基準ですわよ。先輩なら頼りになる言葉を出してください」

もはやお姉さんという部分にツッコミを入れない。

単にいちいち指摘するのも面倒になったけども言うが。

和気藹々とした雑談は続く。

「あはは、ヘイローちゃんは厳しいねえー」

横で聞いていたマヤノも耳を傾けていたのか、会話に参加してきた。

それを見たツインターボは味方を得たとばかりに口の滑りが加速していく。

「ほんとっすよ。バファリンの半分の成分を含有した方が良いっす」

「ターボ先輩はもう少し真面目な方が私の胃にやさしいので、このままで良いというこ
とですわね」

「なんかうまい言い回しをされたような、微妙に強引なような論法を見たつす!? 今日
のキングヘイローは言葉の切れ味が鋭すぎつす!」

「あはははは、二人とも賑やかだねえ………緊張は溶けたかなあ?」
「え?」

「ふふつ、何でもなーいよ——へ・イ・ちゃん♪」

マヤノがニツコリと笑い、小さな言葉で咳くがキングヘイローの耳には届かない。
ただ時折見せる先輩らしい表情を覗かせるがすぐに消えてしまっていた。

その後も雑談に興じていると、入り口の扉が開かれる。

「おーい、今来たぞー」

坂戸がのんびりした歩調でやってくる。

いつもの練習時に使う資料等一式が詰められたカバンを片手に持っていた。

そんな彼の言葉にキングヘイローが即座に反応する。

「トレーナー、用事なので仕方ないのは分かっているんですが……」

「ほっほ、遅れてすまんすまん。調整に手間取っただけ。最終追い切り——きつちり
やるぞー」

追い切りはレースの直前、およそ数日前に行うトレーニングの用語だ。

完全に身体の調子を上向きにして身体をじっくり休める。

そしてベストコンディションでレースに赴くのだ。

「もちろんですわ。私の試合の後にはマヤノ先輩のGⅡ、ターボ先輩のオープンレースへと続くチーム〈レヴアテイ〉の大切な初戦。きっちり勝利してみせます!」

「うむ、その意気じゃ。そして今回はゲストも用意しておる」

「ゲスト、ですか?」

「はいはい、呼ばれそうな雰囲気なので不肖、このヒシヨウマルがやってきましたよつと」

挨拶するように軽快な口調でやってきたのは合宿で一緒に行動していたヒシヨウマルだった。

トレードマークのサイドテールが今日も元気に揺れている。

同じレヴアテイ内のチームとはいえ、グループが違くと会う機会は意外と少ない。

しばらくは挨拶するだけの間柄だったのでキングヘイローは彼女の登場に少し驚いていた。

「ヒシヨウマル先輩……何かご用事が?」

「用事もなにも後輩キングヘイローのためにみんなが協力するために、ね?」

「私のためにですか?」

「うむ。キングヘイローが言ったように、今回のレースはチームに弾みを持たせるため

の重要なレースじゃ。そのためチームヘレヴァティンだからこそ実施できる訓練を用意した」

ヒシヨウマルの言葉を引き継ぐように坂戸が話を続ける。

「チームヘレヴァティンのお家芸。特訓名はそうじゃな……『連続集団併走トレーニング』と言ったところか」

「今回の名称は随分普通ですわね——と、いえそれより名称からするともしかして」

「察しの通り、他グループも招いてキングヘイローと実戦を意識した併走トレーニングじゃ。10名ずつと休まず連続して併走トレーニングを行い、レースの感触をみっちり叩きこむ。主に新入生を対象とした訓練だな」

「つまりこのヒシヨウマル先輩とも一緒に走るのだ。……きっちり追い抜くように頑張るんだよ。私たちも経験だけは多いし、実戦を意識して少しダーティなラフプレー混ぜてくるから気を付けるように」

ウインクしながら注意もしてくる。

あまり褒められた行為ではないが、レース中は純粋な走力勝負の戦いではない。

身体をぶつけてくる他にも、時には審議しんぎにならない程度にさりげなく進路を妨害してくる時もある。

試合巧者な者は上手いレース運びができ、また慣れてない者は巧みなレース運びに沈

む場合だつてある。

将来を見据えた大切なトレーニングだとすぐに察することができた。

「ありがとうございます……私のために。この御礼は明日の新聞で、『キングハイロー初勝利』という文字を飾らせることでお返ししましょう」

「相変わらず自信满满で凄いな……時間もないし、坂戸トレーナー」

「うむ、コースへ行くか。ヒシヨウマルたちとは斤量——ハンデを付けて争ってもらおう」「はい——」

「ラストはマヤノトップガンとツインターボも加えた併走トレーニングじゃ。時間も惜しい、ヒシヨウマルはキングハイローと一緒に駆け脚で身体を温めながらコースへ連れて行つてくれ。ツインターボとマヤノは連絡事項を伝えた後に行かせる」

「ヒシヨウマル了解。じゃあ行くかうか？」

「了解です！」

坂戸はテキパキと指示を出す。

そのままキングハイローとヒシヨウマルは駆け足のまま、練習場へと向かう。

（ようやく、ようやくですのね……レースが、試合ができる。絶対に勝つて見せるから見てください……お母様）

キングハイローにとっての初戦——メイクデビュー。

京都という歴史ある舞台で、彼女にとつての大切な一戦を迎えることとなる。まだ長い長い戦いのほんの序章。

彼女の胸には様々な想いがこみ上げながら練習場へと向かっていくのだった。

☆

「さて、お主たちには残つて貰つたわけじゃが」

キングヘイローたちが去つた後にレヴァティに残つていたマヤノとツインターボ。

マヤノは不思議そうな顔で坂戸を見上げていた。

「うーん……おじーちゃん何か企んでる？」

「謀略つすかね」

「そんな大層なことは企んでおらんよ。ただラストの併走トレーニング——そこでキングヘイローがおそらく全力でお主たちを抜きにかかるじやろうから、無理に追わず適度の負けておいてくれ、という要望だけじゃ」

苦笑いしながら坂戸が話す。

そもそも併走トレーニングはあくまで他のウマ娘同士で争いながら走るトレーニングだ。

特に闘志が強いタイプには有効な方法であり、キングヘイローのような負けず嫌いなタイプは限界を超えて走ろうとするため効果が高い。

二人とも先輩とあつて、その有用さは知っている。

ただ疑問もあつた。

「ヘイローちゃんなら普通に併せるだけでも猛烈な脚を見せると思うよー?」

マヤノが思い出すのは初めてキングヘイローと走つたときのこと。

まさに限界を突破して追いすがる姿は鬼気迫るものがあり、思いがけず全力で追い抜いてしまった。

そのときのことを思い出すたびにマヤノの心はざわつく。

——もし実戦で彼女のあの激走を背中で感じたらどうなるだろうか。

きつと楽しくてワクワクするレースに違いない。

負ける気はしないのに、追い抜かれてしまう錯覚を覚えるほどの強靱な意思の強さ。

あそこまで負けたくないという闘志をあらかじめ前へと出す者はそうそういないなかつた。

大概が「ムリー」と諦めて沈んでいく。

仮に勝つても負けても笑顔で「良いレースだった」と心の底から想い、握手をして終わる。そんな爽やかな戦い。

そんな中で仮に負けが確定していても諦めようとしな——『覆水盆に返らず』という諺ことわざでなら、地面にしみ込んだ水すら元に戻そうと、真面目に全力を尽くすのがキングヘイローというウマ娘だとマヤノトップガンは捉えていた。

「だから仮にトレーニングでも手を抜くのはマヤノの主義じゃないかなーって」
マヤノは普段こそ友好的ではあるが、レースにおいてはそこまで甘い感覚を持つてはいない。

そしてマヤノトップガンはキングヘイローに期待している。

いつか素の実力で追い抜いてゴールして見せる日が来ることを。

だからこそ今はまだ彼女に負けてやれないのだ。

沸々と湧いてくる闘志が彼女の言葉を後押ししていた。

普段はあまりしないマヤノの主張に坂戸は「ふむ」と考え込むように髭をなぞる。

「わざと負けるのは嫌、か」

「うん。練習でもレースでも、ヘイローちゃんには負けたくないかなあ。全力で正々堂々ぶつからないと失礼かなって思っちゃうの」

「……無自覚じゃが、ライバル心を持つているようだのう。これはこれで良い傾向か」
ぼそりと坂戸が呟く。ささやくような声だったせいかなマヤノの耳にも届かない。

不思議そうに首を傾げる。

「おじーちゃん?」

「いや、何でもない。ならば普通に併せようか。キングヘイローに勝たせるのは、気持ち良くレース当日を迎えさせようという考えと、無理追いで身体に負担をかけない方が良いかと思ったが……考えてみればあやつは筋金入りの丈夫つ娘じゃからな。叩けば叩くほど嬉々として走りそうじゃ」

「……叩かれるのは嫌だよ?」

「そこはほれ、言葉の綾じゃ」

変な勘違いをしたマヤノに坂戸が弁明していた。

聞き方によつては妙な誤解が生まれかねない会話である。

「何やら話が終わったつぽいっすけど、結局普通にやるつてことで良いっすか?」
「悪い悪い。それで問題ないぞ。遅くなつてもいかんし、そろそろ行こうかの」

坂戸の言葉に二人は頷き、予定していた練習場へと向かつていく。

入念な準備を訓練をこなしていくキングヘイローと坂戸たち。

陽が注ぐトレセン学園。夢を抱いた若者たちは今日もまた練習に励む。

太陽が沈むまで、少女たちの掛け声が止むことはなかった。

夢の第一歩

その日、坂戸は日課になっているガラス拭きをしていた。

ガラスと言っても窓ガラスを拭いているわけではない。

場所はチームヘレヴァアテイの拠点——普段、キングヘイローたちが集まってくる貸しビルの一階。

室内の中央にはトレーニング器具が置かれ、右隅には休憩スペースとして畳などが置かれている。

それとは別に玄関からまっすぐ奥側へ行くとあるスペースにガラスケースが置かれていた。

水拭きをしたあと、乾いた雑巾で丁寧に拭き取る。

ただそれだけの作業だが早朝に行うことが多いそれを、毎日の日課として行う

細かいビル全体の掃除は専門の業者に任せているが、これだけは例え業者が綺麗に掃除をしていっても最後は自身がやっていた。

背中に軽く突き刺すような痺れを覚え、トントんと左手の甲で叩く。

持病ではなく年老いたことによる痛みだ。

一年が経つごとにまるで借金の負債が膨らむように、身体のあちこちにガタがきているのを自覚する。

歳は取るもんじゃないな、と苦笑いしながら掃除用具を片付ける。

もう少しのんびりやっけていても良かったが今日ばかりは用事があった。

玄関からスタッフの一人がやってきて坂戸の名を呼ぶ。

「坂戸さん、ウマ娘運搬車の準備が出来ました。要望通り、キングヘイロー仕様です」

「おお、できていたか。隣の車庫に置いてあるのかの」

「はい。よろしければ見ていきますか？」

「そうじゃな、変なところがあつたら困るし、見ておくか」

そう言つてスタッフと共に坂戸は貸しビルの隣にある大型車用の車庫に向かう。

レヴァティに限らないがウマ娘の輸送というのは存外、神経を使うものだ。

飛行機や列車などの公共機関を使つてもいいが、デビュー前を除けば彼女たちはそこらのアイドルよりも知名度が高い。

キングヘイローはともかく同行するマヤノトップガンやツインターボは、既にかかりのファンを獲得しており、各地の競馬場へ行くための手段も限られていた。

また十人十色という諺があるように、彼女たちも多彩な性格をしている。

それこそ常人の理解を超えた独特の感性と価値観を持つ者も決して少なくないのが

ウマ娘だ。

幸いといつていいか、キングヘイローやマヤノトップガンなどは、その本質はレース一筋の真面目なタイプ。ツインターボも周囲に迷惑を掛けるのを良しとしない性格であり、トレーナーの手を焼かせるウマ娘ではなかった。

他所のチームではたまに大喧嘩の末、チーム離脱という話もチラホラ聞くので、身体のがたがきている坂戸にとっては幸いだっただろう。

ただいくら人間と同じ言葉を話すとはいえ彼女たちは『ウマ娘』という人と違う種族。環境の変化などには本人たちが思っている以上に弱い面もある。

ましてや彼女たちはトウインクルシリーズという過酷なレースに赴く者たち——そのコンディションは常に最高の状態を保つのもトレーナーの大切な仕事と言っても良かった。

そんな彼女たちを輸送する車にもちよつとした工夫がされている。

坂戸たちはシャツターが開かれている車庫へと赴き、緑を基調とした大型バスに目を向ける。

「……相変わらず良い車だのう」

見上げながらそう呟く。

大型バス——しかし通常のバスと違い、外からは見えないう曇りガラスを使用して

いる。

また窓は少な目で金属部分はかなり多い。

坂戸の眩きが聞こえたのか、スタッフも気持ち目を輝かせながら話す。

「トレセン学園が誇る特殊車両ですからね。中には冷蔵庫、トイレ、簡易ベッド、流し台、テレビ等々の一式を揃え、事故が起きても大丈夫のように車体も金属で覆って耐久力も向上。10名は載せられる豪華仕様ですよ。一度こういう車で日本一周を体験してみたいものです」

「こんなデカブツだと山越えなどはあまりしたくないがな。ハンドルを誤って横転しちゃうじゃ」

「ははは、確かに」

スタッフも本気で日本一周など考えてなかったのか同意する。

どのみちガソリン代なども考えたら普通のキャンピングカーでも買って乗り回した方が楽であろう。

雑談もしておき坂戸は車両に施された意匠に目を凝らす。

緑を基調とした車体——それは普段から、その様な色合いをしていない。

今回、特別に施されたものだ。

坂戸は髭をなぞりながら「うむ」と小さく頷いた。

「なかなか良い感じにプリントされておるな」

「ええ、キングヘイローさんは写真に良く映えるタイプなので、宣伝効果もおそらくバツチリかと」

大型バスに裝飾されていたもの。

それは痛車——ではなく、キングヘイローの名前とシルエットなどが施されている。

顔は見えないが緑のドレスと華麗にポーズを取っているウマ娘。

出るところは出てひっこむところは引っ込んでいる見事なプロポーション。

セミロングの髪なども、その美しさに一役買っている。

シルエツトだけでも美人であろうことは容易に想像ができ、車体を眺めた者は一体どんなウマ娘なのかと興味を惹くこと間違いなしだ。

車体に書かれた大きく書かれたキングヘイローの文字に、『10月5日、京都第2Rに期待の新星現る!』とあからさまな煽り文句まである。

文字通り、トウインクルシリーズにデビューする新ウマ娘キングヘイローの宣伝車両だ。

見事な出来だったがスタツフは少しだけ難しい顔をする。

「しかし良かったんですか? こういった宣伝はデビューするウマ娘に行く場合も確かにありますが……」

「大半は実績を積んだウマ娘がファンサービスも兼ねて行うパフォーマンス、と言いたいんじゃない」

「ええ……」

ウマ娘たちのレースはファンあつてこそ成り立つエンターテインメント。

トレセン学園はファンが沸き立ち、夢を見させるようなイベントを行わなくてはならない。

彼ら彼女らの多くがコースに訪れ、レースを見学し、店やグッズ、席料などを払うことで維持費が賄われる。

ウイニングライブなどの映像や歌などを収録したCDも発売され、少なくとも利益を生んでいる。

馬券などというギャンブル要素はない。

だからこそウマ娘と人との間に余計な感情が混じることなく、スポーツとして成り立っているのだ。

キングヘイローの宣伝についても要はファンを増やしておきたいという坂戸の思惑に他ならない。

ただそれはトウインクルシリーズを盛り上げたいトレセン学園が考えるべきことだ。

『○○○○の姉妹対決はいかに!?』や『天皇賞春夏連覇なるか!?』などといった大記

録が起きそうなときに、トレセン学園側が宣伝車両を用意することが多い。

「当然、注目されるウマ娘は既にG Iを勝っている実力上位者。

秋ごろの府中などは三冠ウマ娘が誕生するかという話になってくると、ちよくちよくそういった宣伝が行われていて風物詩となっていた。

対してキングヘイローは実績皆無の新人。1勝どころか1戦もしていないヒヨッコだ。

だからこそスタッフはその行動に対する問題点や懸念材料を述べる。

「鳴り物入りで鮮烈デビューー！ というのはたまにある話ですが、キングヘイローさんに関しては少々問題があるかと思われまます」

「ふむ、問題か」

「はい。こういういった場合、反感と言いますか……デビュー前に煽るのがちよつと……。表現が難しいんですが、マスコミが持ち上げすぎると逆にお茶の間で嫌われる現象みたいのが、割とあつたりするんじゃないかなって思うんですよ」

「うむ。まあ……あるじやろうな」

坂戸はゆつくりと頷く。

それは覚悟していたことでもあつた。

ネット社会の怖いところか、コアなファンの間ではウマ娘たちの情報が頻繁に行き交

う。

デビュー前ならまだしもデビューしてしまえばあつという間に情報は広まる。

実質アイドルであり、スポーツ選手でもある彼女たちのwikiなども当然のように作られてしまうのだ。

その中でキングヘイローというウマ娘の立ち位置はというと、新人たちの中ではかなり有名な部類に入っていた。

なにせ両親が共に有名人。更に凱旋門賞に勝っているダンシングブレーヴを親に持つとなれば注目度はうなぎのぼり。

ついでにヨーロッパの英雄的なウマ娘がなぜ日本に住んでいるかなども謎を呼び、フアンの間では根も葉もない噂話の数など枚挙に暇がない。

そんなにも有名人に娘がいてしかもデビュー時期が近づいているらしい……となればネットの口を塞ぐことなど不可能だ。

キングヘイローも地元の学校に通っていた時期があったので、同級生を名乗る人物がネットに書き込みをすればあつという間に把握される。

そういう意味では、キングヘイローはデビュー前から有名人という他のウマ娘にはない稀有な存在だった。

そんな彼女をデビュー前から宣伝するようなことをすればどうなるか。

「何やらいけ好かないウマ娘がいるなどと言われるかもな。裕福な家庭育ちというのは知れておるし、鼻もちならんと毛嫌いする連中もいるじやろう——しかし、だからこそやる意味がある」

「だからこそ、ですか」

「キングヘイローはプレッシャーを跳ねのける強いメンタルの持ち主であり、多くの注目を集めることを力を増す目立ちたがり……と、儂は見ている。ファンの好悪問わず、目立ってなんぼと開き直った方が案外良い結果を生むと儂は思う——思うからこそやるんじゃない」

「はあ……そういうもんですか」

坂戸の持論にスタッフは曖昧な返事をする。

これに関しては理解されると思ってはいなかった。

ふと外を眺める。

道路を挟んで向かい側にあるトレセン学園。その敷地内の木々は秋の入り始めを感じ取ったのか、緑の葉が色づき始めているものもある。

日付は10月4日。

キングヘイローのデビュー前日のことであった。

高くなった空を見上げて彼は誰に聞かせるでもなく呟く。

「……願わくば、全てが良い方向に向かえばよいがの」

☆

キングヘイローは予定通りの時刻にレヴァテイの貸しビルへと到着する。

正確には隣の車庫ではあるが、目を向けると坂戸と、隣にマヤノトップガンとツインスターボも来ていた。

「来たなキングヘイロー。準備は大丈夫かの」

「ええ……それにしても随分大掛かりなものを作りましたのね」

バスを見上げるとキングヘイローの文字やデビュー戦を宣伝する内容が書かれた大型車両。

京都までの足だと説明はされていたが、変わったものを用意するんだなと内心で思う。

「デビュー戦じゃからな、ド派手にいつてもよからう。……それとも怖気づいたかな？」

坂戸が心なしかニヤリと口元を歪めた気がした。

そんな相手にキングヘイローは別段気にした素振りも見せず、左手で前髪を払う。

「まさか。このキングヘイロー、今までの人生で後悔するようなトレーニングはしてい

ませんわ。それに、この宣伝もトレーナーが必要と考えたのでしょうか？ だったらその
思惑に乗ったうえで勝利してみますわよ」

「ほっほ、頼もしい限りじゃな」

まったく動じないばかりか胸を張って自信満々な表情を見せる相手に、坂戸は好々爺
然とした様子で笑う。

自信過剰とも取れるが、ただの自信家でないのは普段のトレーニングからも見て取れ
る。

キングヘイローは自分が誇れるだけの積み重ねはしてきたという自負があった。

街宣車のような車両の状態に、特に異を唱えなかつたわけだが違う方向からツツコミ
が入る。

「むむむー……おじーちゃん、マヤノの時にはこういうことしなかつた気がしたけど、ど
ういうことおー？」

問題の声の主はマヤノだ。

甘ったるく可愛らしい声と顔立ちだが、眉間にシワを目いっぱい寄せながら不機嫌ア
ピールを行っている。

話から察するにマヤノのデビュー戦では宣伝のようなことはしなかつたのだろう。

だが坂戸は特に同様した様子もなく、落ち着いた様子で話す。

「この手の宣伝戦略はタイミングが重要なのでな。マヤノの場合は1月にデビューじゃつたらう？ 寒い時期にやってもあまり効果がない」

「ええー、でもでも、マヤノもこんなでつかいプリントされた車に乗ってみたいなって」
「慌てるでない。菊花賞のときには特注の宣伝車両で出撃してやるぞ」

「ほんとっ?! 楽しみにしてるからね!」

「うむ。ちゃんと準備しとるから安心しなさい」

マヤノを宥めている坂戸を他所に、キングヘイローとツイインターボはそのまま車両を眺めていた。

いつものように髪の間から青いゴーグルを覗かせている。

「けっこー派手っすねえ。レース前からこんなやってるとマークもキツキツかもしれないから注意っすよ」

「そうなんですか? 私はそこら辺は分からないんですが……」

「噂好きのツイインターボ調べによると、キングヘイローというウマ娘には注目がかなり集まってるっすよ。良くも悪くも」

「悪くも、ですか」

キングヘイローの言葉にツイインターボは頷く。

普段の様子とも違う、先輩らしいと言うべきか。

おちやらけた様子は鳴りを潜めている。

「そ、悪くも。出る杭は打たれるのが宿命だからね。うちの目からみてもキングヘイローは実力が抜けてる方だから、マークがかなり集中すると思った方がいい……いいっすよ!」

「……口調についてツツコミを入れたいけど、流しておきますわ。アドバイスも頂けたわけですし」

「そうして貰えると助かるっす。いやあ、キャラじゃないことをすると駄目っすね」

「たはは」と頭を掻きながら苦笑いしているツインターボ。

彼女のキャラもそれなりに掴んできた頃合いではあるが、どうにも変なペースになるときがあるようだった。

ただ疑問には思ったものの、彼女にとって一番気にすべきはレースのことだ。

(マーク、ね。私は2番人気だけど、かなり警戒されているでしょうね)

キングヘイローの対抗となるウマ娘は1番人気のトレアンサンプル。

同じ栗東寮所属なので何度か見かけたことがあった。

体育などで綿密な調査をしたが、動机的にはさほど脅威にはならないと判断していた。

とはいえレースはゴール板を通り過ぎ、結果が確定するまでは何が起こるか分からない

いのが勝負の世界。油断は禁物だ。

「キングヘイロー」

「? 何かしらトレーナー」

どうしたものかと考えていたところに、坂戸が挟まれる。

年老いた、しかし力強い瞳でこちらを見つめていた。

「真つすぐ走って勝つ。それだけを意識すればええ」

「……了解しましたわ」

小難しいことなどいらなさとばかりのアドバイスだ。

考えすぎていた自分に少し苦笑いしながら、キングヘイローたちは車に乗り込み、一

同京都へ向かって動き始めた。

京都への旅路は特筆すべきことはなく、ホテルに宿泊していた。

レースは明日に行われるため、本日はそのまま休養となる。

本来、チームで行動するときにはマヤノやツインターボが同行する必要性はない。

トレーナーとレースに出る者だけがいい。

ただホテルに泊まる宿泊費はトレセン学園側から支払われるとあって、仲間の応援つ

いでに同行するというのは割とよくある光景だった。

「試合着よし、着替えよし、財布よし——一通り揃ってますわね」

既にお風呂も入ってさっぱりしたバジャマ姿のキングヘイロー。

あてがわれたホテルの一室にて入念なチェックのもと、必要なものが揃っていることを確認する。

仮に忘れてしまっても現地で揃えられなくはないが、大切なデビュー戦とあつてレース前から変なケチは付けたくない。

ようやく大丈夫だろうと一息付くと、おもむろに旅行カバンの中から一枚の布切れを取り出す。

白地に黒い数字で『10番』の文字。

坂戸から渡されていたゼッケンだ。

キングヘイローは鏡の前でゼッケンを広げると胸に当て、ニッコリと微笑む。

「とうとう……とうとうこの日が来ましたわ。キングヘイロー、その名を知らしめるための第一歩」

ニッコリというよりはニンマリとも取れるくらい満面の笑みだ。

試合では体操着にゼッケンを付けただけの簡素な出で立ちでレースを行う。

しかしウマ娘にとってはこれから何度も着用することになる戦闘着でもあった。

ぎゅっとゼッケンを握りしめる。

感慨深いものが胸中に広がっていた。

トレセン学園のみならず、実家からずっと研鑽けんさんを積んできたのも全ては今日という日のため。

GIのような大舞台ではなく、あくまでメイクデビューではあるが、それでも夢にまでみたレースなのだ。

幼い子供の頃はTVの一視聴者でしかなかった自分。

それが今日、中継されながら大スクリーンに映し出されながら、レースの様子を大観衆に見せるつけることになる。

軽く手が震える。

怖気づいているのではない。武者震いに近いものだ。

これからやってやろうという闘志が胸に満ち満ちしている。

「……いけないいけない、レースは明日。この燃え上がる心はスタートするまで残しておかないと」

頭を左右に振り、掛かり気味だった自身の闘志は散らす。

遠足の前のような子供染みた感情を持って余してしまうと眠れなくなってしまう。

キングヘイローは意識を逸らすついでに、過去の名レースを演じてきたウマ娘たちを

思い返す。

余計に闘志が湧きそうな気がしないでもなかったが、レース前なので仕方ないと自身に言い聞かせる。

夏場に行った特訓的一幕。

GIの大舞台を駆け抜けていく多くの雄姿を視聴するというもの。

ビデオで見ていたが、やはり胸にくるものがあつた。

シンボリルドルフ。

タマモクロス。

オグリキャップ。

ミスターシービー等々——ビデオで見た彼女たちはその一人一人が力強い走りで勝利をもぎ取っていつていた。

また参考にするべきテクニクも多くあつた。

テレビで見た技術の数々を思い浮かべていく。

少しでも盗めるように、思い出せるように。

目を閉じて瞑想にも近い状態になっていたキングヘイローの脳裏に最後の単語が思い浮かんだ。

「——テンポイント。そういえば、まだ見ていませんでしたわね」

結局、坂戸がDVDを持って行って、そのままになっていた。

『流星の貴公子』という二つ名で有名な日本を代表する名ウマ娘の一人。

底知れぬ不屈の闘志でライバルたちと激戦を繰り広げた時代を代表する者だ。

帰ったら坂戸にDVDを見せるように急かそうと内心決めた彼女は、ちよつとした事実
実に気付く。

事実といつても、ささやかな本当にどうしようもない結びつきだ。

「……10番のゼッケンに、テンポイント——そういえばtenは英語で10を意味する言葉ね。……ふふ、願掛けには良いかもしれませぬわね」

別にどうでも良い偶然だった。

ただ試合前には出来るだけ縁起が良いと嬉しいのも事実。

(明日のレースでは良いことがありますように……)

電気を消し、布団に入りこむ。

明日はようやくレース。

キングハイローは目を閉じ、その日が来るのを静かに待つことにした。

☆

青空が広がる秋晴れの日。

ザワザワと大観衆が詰めかけている10月5日の京都競馬場。

宇治川と桂川の間で作られたコースには大勢のファンが観客席に集まっていた。

『さあ、今年もやってきましたメイクデビュー！ フレッシュな面々で行われるウマ娘たちによるレースが始まろうとしています！』

耳に良く通る張りの良い女性実況アナの声が競馬場に響く。

既に第1レースは終了しており、第2レースの始まりが刻々と近づいていた。

体操着に10番のゼッケンを付けたキングヘイローは静かに息を吐く。

パドックでの初見せも終わり、目指すは本馬場入場のみ。

目指すは夢の舞台。

夢の第一歩。

ターフの新緑によく映える少女は大観衆の前に姿を現す。

「——ッ」

わっという声を壁がいきなり押し付けられたような錯覚を覚える。

いや実際にそれだけの重圧があったと言つてもいい。

声だけで突風が起きたとさえ思った。

しかし少女は怯むことなく薄笑みを浮かべて手を振り上げる。

覚悟はできていたのだ。あとは前に進むだけ。

『出てきましたっ。今年のトウインクルシリーズでも有望株の一角と言っていていいでしょう！ 母が為した伝説を子が受け継ぐことができるのか!? 10番、キングヘイローです!!』

多くのライバルたちが激闘の繰り広げるレース。

まだ見ぬ強敵がひしめき合うターフの世界。

キングヘイローの長く、険しい、決して平坦ではない戦い。

その踏み出した一歩は、多くの強敵たちと演じる激戦の第一歩だった。

メイクデビュー京都

『さて各ウマ娘が出揃いました！ 発走まで今しばらくお待ちください』

実況の声と共にターフの上に立つ少女たちに視線が集まっていくのを感じる。

傍から見ると見世物にも見えるが、トウインクルシリーズを見に来た観客たちとスポーツ競技に参加するウマ娘たちというのがお互いの立場だ。

人々は発走をまだかまだかと待ち望んでいる様子。

そんな中でキングヘイローは腕を伸ばしながら、周囲の様子を観察する。

親しい面々はいない。せいぜい廊下などですれ違った程度だ。

クラスメートなら声の一つも掛けた方がいいのかもしれないが、生憎そんな空気は漂っていない。

特にキングヘイローには刺すような視線がいくつも突き刺さっていた。

(……敵意とまでは言いませんが、かなり警戒した様子で見られていますわね。ま、仕方ないことですけど)

本日キングヘイローたちがレースを行っている京都競馬場のメインレースはGⅡの京都大賞典だった。

シルクジャステイスやダンスパートナーというGIウマ娘たちが対決するとあつて注目度は高い。

それに比べれば自分たちのデビュー戦などオマケみたいなものだろう。

キングヘイローは額を拭い、顔を張り着いた雨を拭う。

先ほどまで晴れていたはずなのだが急に空が曇つて小雨が降りだしていた。

女心と秋の空という言葉のように天気が変わりやすい状態なのかもしれない。

現在は小康状態といったところで、霧雨に近い状態になっているが肌に張り付く感触がお世辞にも良いとは言えなかった。

芝の状態もややおも稍重。

地面の水分含有量の違いで、良、稍重、重、不良の順番に悪くなっていく状態の中では、2番目にあたる。

ダートなら土が固まり、むしろ踏み出しやすくなるが、芝だと若干だが走行に支障が出る状態だった。

脚を踏みしめると普段より余計に地面が沈み込んでいくような感覚を覚える。

しかしそんな悪天候にも関わらず、観客は多い。

自身のウマ耳を立てて器用に動かすと、喧騒の中から声がいくつか聞こえてきていた。

『——あれがキングヘイローか。かなり状態が良さそうに見えるな』

『やっぱり実物は綺麗ねえ。一際輝いて見えるわ』

『あとでサイン貰えないかな……』

キングヘイローに対する声の多くが好意的なものだった。

その称賛に人知れず胸を張る。

(ふふん♪ やはり注目株は私のようなね。レースでも華麗に勝利して期待に応えて見せましょうか)

今は勝つことが一番とはいえ褒められるのは素直に嬉しいものだ。

しかし純粹に称賛だけあるかと言えば違う。

中には彼女に対して疑問の声を投げかける声もあった。

そしてそれは、偶然にも耳に届いてしまう。

——キングヘイロー？ いや、良家のお嬢様か何か知らないけど俺はいけ好かない気がするねえ。

(むっ！ 何か聞こえましたわね)

初めての試合。

この時、キングヘイローは知らず知らずのうちに神経を尖らせてしまっていた。

普段と違う環境であり、ずっと追いかけて続けた夢への初舞台ということもある。

そのせいか『キングヘイロー』という単語に耳が敏感に反応してしまう。

腕、肩、背中、腰、太もも、膝、足首と順番に柔軟をこなしていつている途中だったが、ついそちらの方へ意識を集中してしまう。

チラと目と耳を向けると、会話を続けてるカップルが二人。

ペアルックのつもりなのか緑を基調とした同じ衣装に身を包んでいる。

(声の主は……あのシンボリドルフ会長のキャラTシャツをきた男女ですわね)

声からして男性側が発言したのだろう。

キングヘイローの耳に届いたのは件の発言をした人物が最前列にいたせいだ。

GⅡ開催とあって最前列を取るのはかなり難しいことを考えると熱心なファンなのかもしれないが。

周囲に気付かれないよう、視線だけそちらに向けていると女性が話し始める。

金髪に染めた髪をショートポニーに仕上げた、如何にも軽そうな女性だ。

「えー、でもでも、キングヘイローって子ケツコー可愛いじゃーん。これは1着取れるって」

「顔と実力は比例しないっての。俺の見立てでは6番のミスターダハールって子が勝つね。素朴な顔立ちだけど地方組特有の闘志が溢れてるぜ！」

「どうやらどのウマ娘が勝つかの予想し合っている様子だった。」

見た目で選んでいるらしい女性に対し、男性は男性で地方組を持ちあげているようである。

ただどうも言葉の端々からエリート組を毛嫌いしている風でもあった。

(エリート扱いなのは嬉しいですが、ああいった手合いも出てくるのね……それにしても)

観客席から目を離し、特に注目していなかったミスターダハールというウマ娘を探す。

キングヘイローが10番なので内ラチ側にいる少女を見つける。ひときわ小さな体躯の子だ。

肩にまでかかった髪を三つ編みでひとまとめにしている目立たない風貌である。

マヤノトップガンどころかツインターボクラスの小柄な少女だった。

落ち着かない様子で周囲を見回しており、キングヘイローの視線に気付くと何故か申し訳なさそうにペコペコと頭を下げてくる。

気にするなど言わんばかりに手を振ると、そのままゲートの方に向き直った。

「……まあ、気にする必要はありませんわね」

誰に聞かせるわけでもなく呟く。

さほど脅威には感じない。

警戒するとすれば良馬場でないコース状態をどう料理するかだ。

そう結論付けると己のレースに集中するべく、ストレッチを再開したのだが横合いから声を掛けられる。

「まるで眼中にないって様子ですね」

「……ん？」

声の方向を向くと少女が一人、キングヘイローを睨みつけるように見ている。

相手のゼッケンは13番。

13番の相手というと、

「トレアンサンブルさん、かしら？」

「ええ、そうですよ。2番人気のキングヘイローさん」

やたらと2番人気と強調するトレアンサンブルという少女。

今日のレースではトレアンサンブルが1番、キングヘイローが2番人気に付けている。

つまりこの会場、そしてこのレースでは目の前の少女が一番勝利に近いと目されているということだ。

ただそれはそれとして挨拶されたからには返さねばならない。

「それはご丁寧に、トレアンサンブルさん」

「ふんっ、握手ね……」

手を差し出すと相手も応じないわけにはいかないと思ったのか握手をり返す——が。

「ッ!? あなたっ」

「——お嬢様と見くびられることが多いですが、これでも昔から跳ねっ返りの強さには定評がありますのよ。特に挑発された場合には、ね！」

「……こつちだつて負けないからっ！」

『おーつと、ここで1番人気のトレアンサンプルと2番人気のキングヘイローが握手をしている！ 正々堂々戦おうという姿は初々しきを感じさせるっ！』

グ、グ、グ、とお互い子供のよう握手した手のひらを握りしめ続ける。

初々しいというより、キャットファイトに近い女性同士の睨み合いだったが、容姿端麗のウマ娘たちがやると微笑ましい光景にもなっていた。

普段は子供っぽい先輩たちの世話でなりを潜めているものの、キングヘイローも年頃の少女。

こちら辺は年相応の幼さがあった。

ただずつとお互いに手を握っているわけにもいかない。

特に示し合わせたわけではないが自然と互いに手を離すと、

「今日のライバルはアタシなんだから、さつきから観客席ばかり見つめてないで、試合に

集中すること！ いいね！」

「観客……？ まあいいわ。もちろん分かってますわよ」

「ふんっ！」

そう言い放つと一度ビシツとキングヘイローに指を突き立て、そのまま足早に13番ゲートの前に行つてしまふ。

首を傾げたキングヘイローだったが。

(……もしかして、観客席の様子を見ていたのが気に喰わなかったのかしら?)

ちらちらと観客の反応を気にしていたのを、集中していないと注意したかったのかも
しれない。

少しだけ悪いことをした気分になるも気にしすぎても仕方がないと自分のことに集
中し直すことにした。

そして――

「奇数番のゼッケンからゲートに入ってください」

係員に施されてウマ娘たちがゲートへと入っていく。

キングヘイローは偶数番号だったが、奇数番の少女たちがすんなり入ったので、時を
待たずしてゲートへと入る。

ゲートは一直線の金属製のオリみたいな形状をしており、ウマ娘たちがスタートするときに使われる。

スタートすると前方の柵が開け放たれる仕組みで、開いたらスタートしても良いという合図になっていた。

通常の陸上競技のようにゲートなど使わなくても良いのではないかという意見もある。

しかしライングをした場合、瞬時に時速数十キロの速度を出せるウマ娘だと怪我の危険性もあり、スタツフや隣のウマ娘を巻き込む大惨事になりかねない。

またゲートを使わない場合、音を使ったスタート方法だと音に敏感なウマ娘には不適という意見もあり、ずっと昔からゲートを使うようになっていた。

そのゲート内でキングヘイローは静かに神経を集中し始める。

ザワザワと遠くから聞こえてくる喧騒。

車や木々が揺れる音。

心臓が高鳴り、肌には視線が集中していく感覚を覚える。

今この瞬間、会場の視線はウマ娘たちに注がれていた。

——練習通りにやればいい。

——勝つための努力は全てやってきた。

——あとは結果を出せば問題ない。
自身を落ち着けるよう脳裏に囁く。

前を見つめ、脚を踏みしめ、構える。

風が吹き、前髪を揺らしている中でそれは来た。

ガシャン！

「——ッ!!」

身体が自然と反応し、瞬時に前方へと駆け出す。

キングヘイローの長い長い旅路の第一歩が始まる。

☆

『メイクデビュー京都、始まりました！ さあ誰が鼻を切るか。まずは11番ケンペルが大外から果敢に攻めていった。後ろに10番キングヘイロー、横に並んで14番テイエムラシアンが追走します』

スタートは上々と言っただろう。

キングヘイローは周囲の動きを見ながら早めに先頭のウマ娘に取りつく。

(デビュー戦はみんな動きが固くなりやすく、後続集団に残されては勝ちが遠くなる。

まずは先行策といきましょう)

あらかじめ脳内でシミュレートした通りにレースを進めていく。

京都競馬場の内回り——コーナーの途中には高低差約3 m前後の上りと下り坂がある——が、そこは問題ではない。

ペースさえ誤らなければいい。

重要なのは位置取りだった。

序盤から勢いよくスタートしたことで鼓動が早めに鳴り始めるが、努めて息を落ち着かせながら内ラチ沿いに走り始める。

本来なら空気抵抗が掛かり、全身に負荷も与えられるところだが、先頭を走るケンペルというウマ娘の真後ろに取りつくことで幾分か風が和らいでいた。

『各ウマ娘、4コーナーを曲がり始めます。キングヘイローら先行集団を追うのは5番タニノハレム、外に12番ユウキレインボーだ。そして後ろ1、2バシンほど離れた好位に1番人気トレアンサンブル! 虎視眈々と先頭集団を見つめます。斜め後ろには8番アドマイヤディオス、やや外を回りながらコーナーを曲がっていく』

上り坂を駆け上がり始めながらオーバーペースにならないよう注意する。

ゆっくり上り、ゆっくり下る——のは主に外回りのコースではあるが、ここで無理をしても消耗してしまう。

キングヒーローも他のウマ娘をスタミナを維持しつつ、第3コーナアの坂を攻略して
いた。

『さあ第3コーナアは下り坂があるので。後続集団もにわかに動き始めている。トレアン
サンプルの後ろには1、3、7番は横一列。おっと15番ニシノカミラ、9番ジント
ルネードは動き始めたか。最後尾集団には4、6番、一番後ろに2番マイネルサヴァン
だが大丈夫か。6番ミスターダハールは既に苦しそうだ』

はっはっはっと思を切らし始める者が始めていた。

ただ走っているだけなら、そうはいかない。

しかし実戦のレースでは起伏に富んだコース。

大観衆の前という緊張感。

集団で走っていく中での駆け引き。

その全てが若いウマ娘たちのスタミナを根こそぎ奪うかのように吸い取ってしまう。

稍重の芝は少女たちの体力を削り、踏みしめる大地はまるで泥沼のように疲労した身
体を巧みに絡め取っていく。

当のキングヒーローも2、3番手に付いていた影響で脚に疲労感が残っていた。

しかし、

(まだ脚は残っている——これなら！)

余裕があるとキングヘイローは踏んでいた。

坂を下りきった先に見えるのは第3コーナー——ゴール板が遠くに見えるラストの直線。

誰よりも先に駆け抜けければ勝利となる。

周囲が疲労感を隠せず、汗だくで走り抜けるなか、キングヘイローはまだ余裕があった。

過酷な練習——と言っているか分からないが、彼女が追いかけてきた背中ではこんなものではない。

スタミナを残した両脚は力強く前を進み始め、先頭を走る少女の真横へと行く。

『おーっ?! やはり来た、ここでキングヘイローがやってきました!!!』

彼女が出会った背中では小さいのに、その走りは激しく。

その癖、一瞬でも油断するとまるで蜃気楼のように消えてしまう。

初めて勝負したときは茫然とするばかりだった。

油断はしない。

だからこそ全力で戦う。

(——ここにいる背中ならあつという間に抜きされるっ!)

四肢に力を入れ、一息に先頭へと躍り出る。

大歓声がキングヘイローを始めとしたウマ娘たちに浴びせられるが気にしている余裕はない。

その余裕はゴール板を走り抜けるまでおあずけだ。

勢いを保ったまま先頭を維持したまま、ゴール板へと迫る。

キングヘイローはマヤノトップガンとの対戦を思い返しながら走り続け、そして――
『トレアンサンプルは中団に位置したまま動けないっ。8番アドマイヤディオスが後方から必死に追い込むがこれは届かない！ ユウキレインボーやタニノハレムも追いつめるが足りないか!? これはキングヘイロー、キングヘイローだ！ キングヘイローーッ着!!! 名家の意地を見せつけました!』

8番に追いつかれそうにはなったものの見事1着。

デビュー戦を勝利で飾ることができた。